

Survivor from Neighborhood

くそもやし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃に近界の小国家にドナドナされて戦争しまくっていた主人公が、なんやかんや
あつて里帰りして、ぼんち揚げを食べながらカピバラのお腹を触つて過ごすようになる
お話です。

目

次

いつかの私たちと、さようなら

221

来訪者

空閑遊真①

空閑遊真②

三輪秀次①

鬼怒田本吉①

獅子身中の

須賀要③

ボーダーについて語るスレ

369 341 309 291 273 258 242

プロローグ									
須賀 要									
須賀 要②									
正式入隊日									
あるいは家族とカレーの日									
熊谷友子の後悔									
思い出か悪夢か									
獣犬、学校に行く。									
那須玲①									
彼の異常／檻の記憶									
願いが叶う罰									

201 180 160 140 122 104 79 61 41 20 1

プロローグ

「……………イルガー…………」

おそらく、爆撃の地響きで目が覚めた。

少し遅れて敵襲の警報が鳴り響く。こここの兵士たちは自分と同じく警報が鳴る前に起きているだろう。

既に鍛え抜かれた肉体は眠気を引きずる事は無く、装備を整えて出撃準備を完了する。

「ちくしょう、黒角だ！ 野蛮な獣人どもが…………！」

敵戦力を確認した将官が泡をくつた様子で騒ぎ立てる。

どうやら国土の防衛も限界が近いようだ。

これまでも『角つき』が戦線に出てきた事はあつたが、黒が出陣するのは久しぶりだ。

白は何度か殺した事があるが、黒と戦う事になれば死ぬのはこちらだろう。

——この国はあとどれくらい保つか

大国からの侵略に抗い続け、恐ろしい速度で死んでいく兵士を補充するために、絶え間なく他の国から奴隸を確保する。

自分もそうして連れてこられた兵士の一人だが、どうやらその無茶な戦線維持もここまでらしい。

「何をしている、クズどもが！ さつさと出撃しろ!!」

本国の将官ががなりたてる。奴隸軍人自分たちを捨て駒に退却するらしい。

「護国の為に死ねるのだ、光栄だろうが！ 一匹でも多く敵を殺して国民を守れ!!」

「了解」

彼らは一体どこに逃げるというのだろう。

門から湧いてくる敵を迎撃するならまだしも、星の一部を占領され、橋頭堡を作られている致命的な事態だというのに。

——関係ないか

いつか来る終わりが、今日だつただけだ。

自分が死んだ後、彼等がどうなろうがどうでもいい。

どこか別の国へ逃げ延び、命を長らえるかもしねれない。

問答無用で虐殺されるかも知れない。

降伏が受け入れられ、属国として国の名前は残るかも知れない。

だがどうあっても、この国は滅ぶ。

属国となつて名前が残ろうが、それは心の拠り所にはならない。

彼らは自らの故郷を自らで守らず、彼らの言う『クズ』に国の命運を預けたのだ。命を脅かす敵から目を背け、振るうべき剣を拾い物の野良犬に握らせた。

当然の結果だ。

自分たちはここで死に、彼らのうちのいくらかが生き延び、これからも生きてゆく。それがこれまでの彼らと同じような生活なのか、それとも彼らがゴミのように使い捨ててきた自分達よりも下等な扱いをされるのか。
どうでもいい。

最早こうなれば彼らには死ぬか、故郷を蹂躪されるのを指をくわえて見ているかしないのだ。

そしてもし、そのどちらかを選べるとすれば、彼らの多くは迷わず後者を選ぶだろう。
ならば、

ああ、

ここで死ぬまで戦える身で良かった。

—— そういえば、自分の故郷は、一体どんな景色をしていたのだろうか。そんな事も、戦い続けるうちにいつの間にか忘れてしまった。

空と地平線を埋め尽くす敵を前に、いつもの様に呟いた。
「トリガー、起^{オル}動」

—— この腐つたごみ溜めでは、よくある事だ。



『反応アリ、門、開きます』

「わかつたわ」

通信から聞こえる小夜ちゃんの報告に、私は小さく首肯して応えた。

「くまちゃん、茜ちゃん。お願ひ」

「了解です！」

「了解です！」

攻撃手のくまちゃんが鎧付きの孤月をすらりと抜き放ち、

狙撃手の茜ちゃんが後方の

ビルの屋上から重量級狙撃トリガー、アイビスを構える。

那須隊の結成から数週間。

ようやく戦闘時の連携が安定してきた事で、最近の私たちは調子が良かつた。

今日も皆とお話ししながら、当直の防衛任務をこなしている最中の事だつた。もちろん、気を抜いたりはしていない。私たちが敵を取りこぼせば、それは市民の命に関わるのだから。

——2年前の惨劇は、未だに色濃く脳裏に焼き付いている。

——黒煙、悲鳴、肉と瓦礫の山。

——あんな光景はもうたくさん。

ゲートの予測地点に到着した私は意気込み、戦闘態勢を取る。

身体が弱くまともに出歩けもない私に、トリオンの身体を与えて外の世界を与えてくれたボーダーに対する感謝の念は、そのまま私の戦う原動力になつていて。

細かく分割したトリオンキューブを周囲に浮かべ、いつでも出現した敵を迎撃できる

様に準備する。

「来る……」

ズツ、と。

空中に一軒家をまるまる飲み込めるほどの黒いエネルギーが球状に広がつた。

——それはまるで、空間そのものが切り取られたような、異様な光景だつた。

出現したゲートを前に少しの緊張感を覚える。

ゲートの端に、細かな雷状のエネルギーがチリチリと迸り、暗闇から浮かび上がるか

のように、白い装甲のトリオン兵たちが姿を現した。

粉碎され、切断され、バラバラになつた状態で。

「え…………っ！」

『何、これ』

私達が混乱する間にも、ゲートからは絶え間なくトリオン兵の残骸があふれ出てくる。

中型戦闘タイプ^{モルモット}

体に巨大な穴が空いている。

大型捕獲タイプ^{スヌータイプ}

、建造物と見紛うほどだつたその巨躯は、見るも無惨な瓦礫と化して
降り注いだ。

そして、何等分かに細切れにされた、見た事もないクジラのような巨大なトリオン兵と3m程の大型のトライオン兵が残骸の山に積み上がった時、ようやくトライオン兵の出現が止まつた。

『こんなのが、聞いたことない……』

通信の小夜ちゃんが呆然とした様子で呟いた。

それは私や他の皆も同じだ。

ゲートから破壊されたトライオン兵の残骸が出てくるなんて、聞いたことが無い。

「何が起こっているの……？」

突然の事態に沈黙が降りるなか、ぴくりと何かを感じ取つたくまちちゃんがゲートを見上げて言つた。

「まだ、何か来る」

収縮を始めるゲートが空に消える直前、トライオン兵に比べるとかなり小さな影を吐き出した。

ちようど人間くらいの大きさの――――――

「ひ、人だ!!」

「うそお!?」

くまちちゃんと茜ちゃんが驚愕の声を上げるが、それどころではない。

私は駆け出し、ゲートに最も近い場所に立つくまちゃんへ叫んでいた。

「落ちる……くまちゃん！」

「つ、うん！」

混乱した状況にあっても私の意図を迅速に察してくれたくまちゃんは、落下する人影が地面に激突する前に素早く走り込み、その人を受け止めた。

戦闘服のような格好の、おそらく同年代の男の子だつた。
いや、それより、

「酷、い…………！」

『ひつ……』

私は思わず口許を押さえ、通信からは小夜ちゃんの悲鳴が聞こえる。

「ごぼつ、つあ……」

喀血。

ばしやりと夥しい血液が吐き出され、コンクリートの舗装路を赤く染める。

落ちてきた人は、生きているのが不思議な程の怪我だつた。

バケツをひっくり返したかと思う程大量の血に濡れ、おそらく身体のあちこちが骨折している。

最も酷いのが左肩から右脇腹へばつさりと抜ける大きな切創だ。

ひゅうひゅうと辛うじて小さく呼吸はしているようだけれど、正直、私にはいつ死んでしまつてもおかしくはないように見えた。

「トリガー、解除^{オフ}」

「玲？」

私は男の子の状況を見ると、トリオン体を解除し、羽織っていた上着で止血を始めたあと、もう一度トリオン体へ換装した。

「小夜ちゃん、本部に報告をお願い。私はこの人の傷を縛つて病院に連れていくわ。ここで救急車を待つより背負つて走つた方が早い」

『……はい』

傷を縛り終え、私が男の子をおぶさつた所でくまちやんが声を上げた。

「玲、あたしも行く」

くまちやんの眼は静かで、だけどとても強い意志が込められているよう思つた。こうなつたらくまちやんは頑固だ。だけど、こんな状況なのに、私はそれが嬉しかつた。「くまちやん……ええ。ごめんなさい、茜ちゃんは本部へ報告がてら小夜ちゃんの所に行つてあげて。一人じや心細いだろうから」

「は、はい！」

小夜ちゃんの元へ向かう茜ちゃんを見送つた私たちは、トリオン体の許すかぎりの速

度で疾駆した。



「ん…………」

ふと、目が覚めた。

身体は半ば無意識に出撃の準備を始めようとする。

——そうだ、敵……一匹でも多く……

しかし、体を起こそうとした時、全身に激痛が走った。

「ぐつ、う…………つ！」

そこでようやく、自分の状況に気がついた。

全身の至る所に包帯が巻かれ、清潔感のある柔らかいベッドに寝かされている。

「な、んだ、これは……」

ズキズキと鈍痛の響く頭を押さえつつ、息を落ち着かせ、冷静に自分の記憶を辿つていく。

我先にと逃げ出す本国の将官。

敵を殺せという指示とすら言えない命令を受けて戦場に出る奴隸たち。

空と大地を埋め尽くし、地下茎に雪崩れ込む敵の軍勢。

思い出せる最後の記憶は、戦線が後退し正にコロニーに敵が攻め込むなか、遠征艇のドックで大量のトリオン兵ブラックと黒トリガーを相手に死にものぐいで戦つていた所までだ。

(捕虜にされたのか……?)

有り得ない話ではないが、妙だ。

手足が拘束されている訳でもなければ、監視もついていない。

おまけにトリガーすら奪われていなかつた。

自分の場合、トリガーを奪われるとはつまり死を意味するので、生きているということはそういう事だ。

(この傷では動けないから……?) いや、目を覚ました以上、トリオン体に換装さえすれ

ば関係ないはず)

捕虜として扱うためにトリガーレスを奪わないのは百歩譲って有り得るとしても、敵の兵士に監視すらつけないのは異常だ。

(……どうする)

思い浮かぶ選択肢は3つ。

1つは今すぐにここを脱出し、安全な場所まで逃げる事。

これは却下だ。あまりにリスクが高すぎる。

ここがどこの国のどういった建物かすら分からぬのに安全な場所も何もない。

もう1つは、ここに入ってきた人間を人質に取り、情報を吐かせる事。これも却下。
人質に選んだ人間がトリガーレスを使いだつた場合、人質ごと吹き飛ばされる可能性もある。こちらもトリオーン体に換装すれば死にはしないが、そうして再構築に時間のかかる戦闘体を無駄にするのは避けたい。

最後は、寝たふりで様子を見る事。

消去法かつ地味だが、これしかないだろう。いざとなればトリガーレスを起動し、建物を破壊して外へ逃げればいい。まあ、その後どうするか見当もつかないのだが。

大まかな方針を決めた所で、人の気配が近づいて来るのを感じた。慌てて目を閉じ全身の力を抜く。

ドアが開く。

「お邪魔します」

女の声だ。足音からして人数は3人。

「もう1か月だね」

「仕方ないわ。あの大怪我だもの……」

「お医者さんは峠は越えたって言つてましたけど……」

——1か月。

1か月の間、自分は寝ていたらしい。

(……国は滅んだだろうな)

思つたよりと、いうか、当然というか。何の感慨も浮かばなかつた。

ただ、あの大地で散つた夥しい数の命を哀れに思つた。

「城戸司令たちは近界民ネイバの可能性が高いって言つてたけど……やっぱり、心配ね」

「うん……」

そういえばここはどこなのだろうか。捕虜をこれ程までに丁重に扱う国は聞いたことがない。

「……そろそろ、帰りましょう。彼も静かに寝たいだろうし」

「はい」

「そうだね」

「じゃあ、また来ますね」

寝ている（と思つてゐる）相手に話しかけるとは変な奴らだ、と思つてゐると、声の主たちは部屋を出ていった。

「……」

身体を起こす。短い時間だつたが、収穫はあつた。

『キド司令』と言つていた。司令官の名を出すという事は、先の彼女達も軍もしくはそれに類する組織の人員という事か。

『ネイバー』。この単語には聞き覚えがない。自分の事を言つていたのだろうという予想はつくが、そんなものになつた覚えはない。

「……疲れたな」

ふと窓がある事に気づいて外を見る。夕日が沈み始め、おそらくは住宅地をオレンジに染めていた。

脱出するのは簡単そうだ。

「やばいやばい、携帯忘れちゃった」

「珍しいね、くまちゃんがうつかりなんて」
「いや、あたしだって忘れ物くらい普通に……え？」
「？　どうしたんですか、せんぱ——」

しつかりと、目と目が合った。

(…………
あ)



◆
「……では、本題に移ろう」
ボーダー本部。

その日、会議室は異様な雰囲気に包まれていた。

ひと月前、B級の那須隊が防衛任務中にゲートから人型近界民ネイバ-らしき人物を発見。瀕死の重症を負つており、本部の指示を仰ぐ時間が無かつたため、現場の判断で保護したという前代未聞の大事件が起きた。

那須隊の独断による情報の流布を恐れた上層部だつたが幸いにもそんな事は起きず、隊長である那須玲が「怪我人の見舞いをしたい」という希望を出したため、「この一件に關して今後一切、如何なる他言も禁ずる」という事を条件に口を封じる事ができた。

那須隊はゲートからその人物が出現した瞬間を目撃しており、下手に誤魔化すのは悪手という判断だつた。

そしてつい先程、昏睡していた件の近界民ネイバーが目を覚ましたという那須隊からの報告を受け、急遽ボーダー幹部が集つたのである。

〔ディスプレイ、出ます〕

本部長補佐である沢村響子がそう言うと、会議室のテーブル上に大きなホロディスプレイが浮かび上がる。その中には、一人の少年が映つていた。

『この人達がボーダーの幹部。真ん中の人が城戸司令よ』

『わかった』

ベッドから体だけ起こした少年の傍らに立つ那須玲が簡単に説明する。少年は会話

だけならば問題ないようで、受け答えもはつきりしていた。あの重症を考えれば驚異的な回復速度だ。

「境界防衛機関・ボーダーの司令を務める城戸だ。早速だが幾つか聞きたいことがある」

『知りうる範囲なら』

「名前は?」

『スガ・カナメ』

「スガ……」

「……なんというか、随分と日本人らしい名前ですねえ」

「ふん、偶然じやろう」

メデイア対策室長、根付栄蔵の小声(ねつきえいぞう)の呟きに、開発室長の鬼怒田本吉(きぬたもときち)が吐き捨てた。

ボーダーにとつて欲しい情報はいち近界民(ネイバ)の名前などではない。

しかし、1人だけ顔色の違う団がいた。

(おいおい、こりゃあ……)

玉狹支部支部長、林藤匠(りんどうたくみ)である。

(…………直ぐにわかるか)

支部のメンバーに近界民がいるからか、林藤は極小さな、普通ならば有り得ない可能性を、既に頭に浮かべていた。

「次の質問だ。君はどこから来た？」

『わからない』

「わからんだと？　自分の国すらわからん奴がいるか！」

少年の答えに、鬼怒田がテーブルを叩いて怒鳴る。

『知らない。俺たち攫われてきた奴隸には、戦えという命令しか下されない。おそらく、あなた達の知りたい情報は無い』

「はっ！」

「奴隸……」

空気が重くなる。つかの間、会議室を沈黙が支配し、画面内、少年の傍らの那須も顔を青くしていた。

しかし、聞き逃せない言葉があつた。

「攫われてきた、と君は言つたな。傷を抉るようで済まないが、その国に攫われる前はどこの国にいたんだ？」

ボーダー本部長、忍田真史しのだまさかずみが全員の疑問を代弁した。

『——もう覚えていないほどの昔だが。俺はかつて玄界ミデン、正確には地球の日本とい
う国にいた』

須賀 要

遠い、遠い記憶を見ている。

暗い檻の中、いつまでも啜り泣く子供の声。

それが自分のものだと気づくまでに、たっぷり1分はかかった。

次の日も、その次の日も。独房のような部屋の隅で、自分は膝を抱えて泣いている。

「■と■■ん、お■■さ■」

——繰り返し繰り返し、同じ言葉を涙ながらに口にして。

ある日、一人の男がやつてきた。男は部屋を出て自分に着いてくるように言った。暗い部屋も怖かつたが、その時は男の方が怖かつた。だから自分は嫌だと言った。腹を殴られ、髪を掴まれてどこかへと引き摺られて行つた。

——そうして『武器』を手に入れた自分は、次の日に初めて戦場で人を殺した。いつしか涙は枯れて、『どうすれば死なないで済むか』を考えるようになつていつた。何か、とても大切な事を忘れているのではないかという思いを、心のどこかに抱えた

まま。



「わ、私、お医者さん呼んできます！」

どたどたと駆け出す茜ちゃんに返事すらせず、私とくまちゃんは起き上がった彼を見ていた。

全身の至る所に包帯が巻かれていて、包帯が巻かれていらない所からも覗く古傷が痛々しい。

「もう、大丈夫？」

言つてからしまつた、と思つた。あれ程の大怪我でずっと寝たきりだつたのだ。大丈夫なはずがない。

何か言葉を交わしたくて、つい変な事を言つてしまつた。

「……要求は何だ」

「よ、要求つてあんた、助けて貰つて礼も無いの？」

「大丈夫……大丈夫よ、くまちゃん」

男の子の態度にくまちゃんが熱くなつてしまつたようだ。
私はと、納得していた。最初に本部に連絡した時、忍田本部長が「近界民（ネイバ）かも
しれない」と言つていたのを思い出す。

もしかしたら、彼は自分が敵に捕まつたと思つているのかもしれない。

ボーダーの偉い人達が彼の事をどう考へているのか分からなければ、私は彼が生き
ていて本当に良かつたと思つてゐる。

助けようとした人が死んでしまう所なんて見たくない。

「あなたを傷つけたりなんてしないわ。ただ、あなたの事を教えて欲しいの」

本部への通信を開く。彼が目を覚ましたことを伝えると、沢村さんは酷く驚いて、小
さく「良かったわね」と言つてくれた。



彼、カナメくんが話した事は、私の想像を超えていた。

奴隸として10年以上戦い続けてきた事。

大国に彼のいた国が攻め滅ぼされる直前、ゲート門の暴走で飛ばされてきた事。

そして、大規模侵攻よりもずっと前に近界民ネイバに攫われた日本人である事。

『……成程。情報、感謝する。続きは後日だ』

「了解しました」

ベッドのカナメくんを見る。彼は自分の身の上を語る時も、眉一つ動かす事は無かつた。

淡淡と、ただ起きた事をありのままに話していた。

その声には感情も感傷も、当時感じただろう苦痛を厭う色すら伺えなかつた。

彼にとつて、それが当然だったのだろう。

初めて会った時のあの怪我を思い出す。もしかしたら彼の命を奪っていたかもしれないあの傷すら、彼にとつては当然の物だつたのだ。

——胸が痛い。

いつも感じる息苦しさとは違った、締め付けるような痛みだった。

『こちらでも君の戸籍を確認した。安心してくれ、要くん。決して君を悪いようにはしない』

「そうですか」

『那須くん、君も休みなさい。……顔色が悪いぞ』

「……はい、ありがとうございます」

忍田本部長の優しい言葉も、彼は唯の報告として聞き流しているのが分かった。
まるで、「悪いように」というのがどんな扱いなのか分かつていなかのように。



要くんの一件は機密情報として扱われる事になつたみたいだ。

事が事なので当然だと思う。

詳細は流石に私たちには教えてくれなかつた。

「ここにちは」

それはそれとして、私たちは許可が降りたのをいい事にずつとお見舞いを続けてゐる。皆私のわがままに付き合つてくれて頭が上がらない。

病室に入ると、ベッドから青空を見ていた要くんが振り返つた。

「なすか」

要くんはいつも、何をする訳でもなく、窓の外の景色を眺めている。そして私たちが来ると、少し遅れて振り向く。

——改めて、驚異的な回復速度だ。

既に受け应えには何ら問題は無いし、その他の身体機能にも障害は残つていない。

「ええ、何回もごめんなさいね」

「構わない」

「あんたもうちよつと何か言いなさいよ……」

「クマチヤンもか」

「やめてよ気持ち悪い」

「そういう名前じやないのか？」

「違うからね!?」

「あつははははは！」

「笑うな茜！」

静かだつた病室に笑い声が満ちた。

悪気があるのか無いのか、要くんは「？」マークを頭の上に浮かべながら差し入れのバナナを頬張っていた。たぶん至つて真面目だ。

「お前達は軍人か」

ふいに、食べる手を止めて要くんの静かな目がこちらを見た。

「いいえ。私たちのいるボーダーは、そうね……ちょっと違うかもしねないけれど、自警団や自衛隊と言つたらいいのかしら」

「ジケイダンやジエイタイ」

「志願者だけで結成された、防衛のための独立した組織よ。戦争じゃなくて、街の人たちを守るのが役目なの」

「わかる」

『YESかNOかしか意思表示できないんですかこの人……』

「ブフツ」

「?」

思わずといったふうに口を挟んだ小夜ちゃんの言葉に茜ちゃんが吹き出した。通信なので要くんには聞こえておらず、相変わらず首を傾げている。

それでも、小夜ちゃんが男の人のいる会話に入るのはとても珍しい。男の人が苦手なのを含めても、やっぱり放つておけないのかかもしれない。

「……戦闘の無い日はあるのか」

「防衛任務は週2、3回くらいだから、それ以外の日はお休みかな。防衛任務でも何も起きない日もあるわ」

「——あるのか？」

ぽかん、と。私の話を聞いて、要くんは酷く驚いていた。

「……ええ、あるわ」

——いつたい、向こうではどれだけ戦つてきたのだろう。

気になるけれど、要くんが自分から言わない限り、決してこちらからは聞かないと私は決めていた。

「戦わない日は何を？」

要くんが不思議そうに尋ねる。

最近は専ら要くんの質問に答える形で会話している。「幹部の人たちから色々聞かれるとん、要くんが何か聞きたいことがあつたら遠慮なく言つて頂戴」と私が言つた。

要くんの事だから「別にいい」とか言われちゃつたらどうしようかと思つていたけれど、意外にも要くんは話しかけてきてくれた。

「それは、学校とか遊んだりとか……」

「学校とはなんだ？」

「」

何気なく放たれた質問。

彼にとつては、おそらく何ら重要な意味の無いその言葉に、私達は死角から頭を殴られたようにうちのめされた。

認識が、甘かつた。

要くんの言葉に、皆黙り込むしかなかつた。

「……つ」

「ぐくりと、一度息を飲み込んで。

けれど私は、その空氣を振り払うように。

ここで怯んじやダメだと自分に言い聞かせながら、できる限り気丈に言葉を繋げた。

「学校はね、色んな事を学ぶ場所。友達だつて出来るし、身分なんて関係なく誰にだつて行く権利があるの。もちろん、要くんも行けるわ」

「玲……」

でも、ここで狼狽えていては駄目だ。彼に関わるというのなら、その位の覚悟はしないといけないんだ。

「何を学ぶ？」

「計算したり物語を読んだり、国の歴史を勉強したりするの。他にもいろいろあるわ」

「それでどうする？」

「お友達ができるとね、とつても楽しいの」

「楽しい…………」

「ええ、とても幸せな気持ちになれるの」

「…………よく、分からない」

「ううん、いいの。いいのよ、今はそれで…………そうだ、ならまず、私とお友達になりましよう？」

そう言つて手を差し出す。

要くんは私の手をしばらく見つめて、悩んでいるように言つた。

「違う、分からるのはお前達だ。俺は知つている情報は全て話す。お前達が俺に貸しを作る理由は無いはずだ」

「…………」

初めて、彼が目を覚ましたときの事を思い出す。

——重なつたのだ。

ベッドから体だけを起こし、何をするでもなく空を眺める彼の姿が。

——窓の外から聞こえてくる笑い声を羨ましく思いながら、届かない空を見つめるしかなかつた以前の私に。

ボーダーに入る前は、きっと私もああ見えていたのだろう。

くまちゃんや茜ちゃんや、小夜ちゃんに出会わなければ、たとえトリオンの体を手に入れても、きっと私は今もそうちだつた。

「ううん、貸し借りじゃないの」

「…………」

「……あなたの事を放つておけなかつた。恩を売るつもりは無いけれど、助けた人に死んで欲しくなかつた。だから私たち、あなたが助かつたつて聞いた時、とても嬉しかつた」

彼は困惑した様子で私を見ている。

でも私の言葉は止まらない。

なにか、胸の奥に生じた、温かいような熱いような、そんな何かに突き動かされながら私は彼に言葉を届ける。

自分がこんなに饒舌だつたなんて知らなかつた。

「——それに、どちらか選べるなら、楽しい方が良いでしよう?」
要くんははじめて、驚いたように目を丸くした。



「いやあ悪いな、わざわざ来てもらつて。お前のトリガーやを聞くに、此處で調べた方が良
いってなつちまつたんだ」

「構わない」

はつはつは、と笑いながら肩を叩いてくるのはボーダー玉狹支部支部長、林藤匠だ。
要が三門市に流れ着いてから一ヶ月。

外出の許可が降りた要は今、彼の統括する玉狹支部へと足を運んでいた。

「しかし、よくボーダーにそこまで協力する気になつたな。俺が言うのもなんだが、別に協力する理由ないだろ？」

玉狹支部の傍を流れる川を興味深そうに眺めていた要が、林藤の言葉に振り返った。

「……友達のためだ。ボーダーのためじゃない」
(…………おお?)

なんか、こう……。

「……お前、ずいぶん変わったな」

要の目は、林藤が初めて彼を本部からディスプレイ越しに見た時と同じだつた。

無機質で何も映さない、冷たい鉄の様な瞳。

だが確かに須賀要という少年は、病室で過ごした一ヶ月で、少しづつだが変化を遂げていた。

「……分からぬ。ただ、玄界ミダレ……この世界で生きる以上、変わらなければならぬと感じた」

「」

違う。

変わつたのだ、自分から。

彼はそう、努力したのだ。

第1回撃者故に仕方がない、また何ら責のある行為を働いたわけでもないのに記憶封印措置を行うわけにもいかない、という理由でこの少年との面会を許された那須隊だつたが、彼女たちとの接触は要を想像以上に良い方向へ運んでいた。

林藤は知っている。

奴隸や兵士、戦わされる者たちが、敵と共に自分の心をも殺し始めたとき、二度と取り返しのつかないところまで壊れていってしまうということを。

他でもない、自分の目で見てきたから。

「はは……よーし、このあと用事が済んだら焼肉連れてつてやる。こつちのメシはうまいぞ！」

「肉か、任せろ。食糧の現地調達はできる」

「や、そうじやないから」

国とか戦争とか、トリガーやボーダーとかなんて関係ない。

林藤はただ一人の人間として、この少年が真っ当な人生を送り始める入口に立つてくれた事を喜び、またそれを助けてくれた那須隊へ深い感謝を抱いた。

「おっし、とりあえず入るぞ。今は戦闘員達は防衛任務だが、皆面白い奴らだ。仲良くできると思うぜ」

「了解した」



「うーん……君、コレで今まで戦つてきたんだろ？」

「そうだ」

仮装シミュレータールームで要のトリガーを調べ終わった後。

玉狹支部のエンジニア、ミカエル・クローニンが深刻な面持ちで要を見た。特に思うことも無く要が肯定する。

「よく死んでないね」

「……？ 生きているからな」

「オイオイ、会話が噛み合つてないぞ」
質問の意図が不明だ。

「こいつは目の前の自分が見えていないのだろうか。

「こうして生きているのだから死んでいる訳が無いだろう」と要是思つた。

心底不思議そうな顔で見つめ合う「人に、呆れた様子で林藤が突っ込む。

「まあいいや。今後基本的にこのトリガーは使用禁止だ。それまでは使うならボーダーの……そういうえば、君はボーダーには入るの？」

「そのつもりだ」

「えつ、おれ聞いてない」

適当に頷くと、林藤がずつこけた。

言つてないから当然だ。

「手続きはどうすんだ？」 正式入隊には保護者の書類が必要だぞ

「……因みに、実家は？」

「2年前の侵攻で死んだそうだ」

シノダが連絡してきた事実を伝えると、二人の顔にわずかに陰が差した。

ミカエルはすぐに「ごめんね」と謝り、林藤は静かにタバコの煙を吐き出していった。

「それより、俺がボーダーに入るにはどうすればいい？」

構わずに質問すると、林藤は椅子から立ち上がり、静かに頭に手を置いてきた。

「まあ待て。お前には先にやんぬきやいけない事がある。行くぞ」

「ちよつと、ボス」

そう言うと、林藤はミカエルの制止も聞かずに要の手を引いて歩き始めた。



「……、こは？」

三門市の中心にほど近いとある公園。

木々に囲まれたその空間に、1つの大きな塔が立っていた。

その周りをいくつかの石版が囲み、そこにはびっしりと細かい文字が刻まれている。

「慰靈碑だよ。2年前の大規模侵攻で死んだ1200人超の名前が全部書いてある」

塔の下にはいくつもの花束が手向けられていた。

度々人が訪れる場所のようだ。

「お前の親御さんの名前もあるはずだ。探してみろ」

「……文字がわからない」

「ああく……そうか、そうだよな、悪い。俺が探すしか無いか……えっと五十音順だから……」

しばらく端から文字を読もうとしたが、とてもできそうになかったので林藤に伝えると、林藤は一言の謝罪の後、要を1つの石版の前に連れていった。

「須賀……あつた。ほれ、ここだ」

指さされた2つの文字の羅列を見る。

やはり、なんと読むのかは分からなかつた。

「ただいま、つて言つてやりな」

林藤が穏やかな声で言つた。

要はもう、彼らの名前すら忘れてしまつた。

しかし、その2人の名前を見て、『お父さん、お母さん』と何となく胸の裡で唱えた時、ふと要の脳裏に去来するものがあつた。

わけも分からず放り込まれた殺風景な監獄。

寒くて、怖くて、ただ泣き叫ぶしかなかつた幼い自分。
死なないために大勢を殺した。
敵を殺した。

味方を見捨てた。

そうして命を長らえても、胸に積もるのは絶望だけだった。

「一つ……思い出した」

「ご両親のことか？」

「違う。攫われた後の事だ」

——遠い、遠い記憶を見ている。

『おとうさん、おかあさん』

暗い部屋の隅で、膝を抱えて泣いている自分。

嗚咽混じりに繰り返し呼んでいる。

『お父さん、お母さん』と。

——なぜ、今まで忘れていたのだろう。

「……最初は、ただ帰りたいだけだったのに」

「…………」

いつからだろう。

『もう一度父と母に会いたい』という願いすら忘れ、命じられるままひたすら敵を殺すようになつたのは。

慰靈碑に近寄り、そつと2人の名前を指で撫でる。

「遅れて、ごめんなさい」

冬の気温と木の陰に晒された慰霊碑は、要の指に冷たい痛みを残すだけだった。だが確かに、なにか物理現象とは別の温かさが、自分の胸の裡に広がったのを要は感じた。

——その痛みと温かさが、まるで両親に叱られた後に、優しく頭を撫でられたようで。二人の声も顔も、もうとつくに覚えていないのに。

要には、優しげな男女の「おかえりなさい」と言う声が聞こえた気がした。

「うん。ただいま、二人とも」

もう一度慰霊碑を優しくなぞり、指をもう一方の手で包み込む。その痛みを、大切に、慈しむように。

「借りが出来た。ありがとう、リンドウ」

立ち上がり、慰霊碑を離れる。

「——ああ。俺が生きていれば、また来れるから」「……そうだな」

林藤の傍を通り過ぎる時、要の顔には柔らかな笑顔が浮かんでいた。



後日。

「リンドウ支部長の計らいにより、本日付で玉狹支部配属になつた須賀要だ」

「つーわけだ。あ、こいつここに住むから」

「ちよつと！ あたし聞いてないんだけど！」

「木崎レイジだ、宜しく」

後にボーダー最強と呼ばれる事となる「旧玉狹第一隊」が結成された。

スガ
カナメ

須賀 要②

「向こうから帰ってきたあ!?」

「じゃあ元は日本人という訳か」

林藤に「とりあえず自己紹介しとけ」と言われたので簡単に自分の経歴を説明したところ、玉狹支部の戦闘員であるという小南桐絵こなんきりえと木崎レイジときざきが驚きの声を上げる。やはり自分はかなり珍しい種類の人間らしい、と要はほんやりと思った。

しかし一つ気になる所がある。

「近界民ネイバーには慣れていると聞いたが」

自分のような半端者とは違つて正真正銘の近界民ネイバーであるミカエルがいるのだから、大して驚かれはしないだろうと思つていたのだ。しかし現実はこれである。

「攫われて、しかも自力で帰ってきた人なんて見たこと無いわ」

「そうか」

玉狹支部のオペレーター、林藤ゆりがそう言つた。攫われる人間は多いが戻つてくる者はほとんどいないらしい。

「どれくらい向こうで戦ってきたんだ?」

「10年だそうだ」

「じゅつ……！」

また小南が驚いている。「よく驚くやつだな」と要は思つた。

「あんた、今何歳？」

「知らない」

「はあ？」

なにせ世間の常識どころか自分の事もろくに分からぬ様な幼少の頃に攫われたのだ。

あの国が奴隸の誕生日を祝う訳もなく、要は自分の年齢を知らない。

ついでに言うと自分がマトモに人間扱いされている現状すら困惑ものだつた。

「リンドウ、俺は何歳なんだ」

「ほいよー」

寬いでコーヒーを飲んでいた林藤は、要の言葉にボーダー支給のタブレットを操作する。

支部長である林藤の権限レベルに応じて、幹部クラスでデータベースにアクセスした林藤は、『須賀要に関する事項』から彼の戸籍を確認した。

「この年の生まれだと、えーと16歳だな」

「6歳から戦つてたわけ!?」

「そうなるな」

「小南、お前より先輩じゃないか」

「うぐつ」

小南は要より年下らしい。

なにやら林藤に「年上にタメ口はよくないぞ」と弄られて慌てている。

「けど要くん、正式入隊は済ませたの?」

「正式入隊?」

初めて聞く話題だ。

ゆりの質問を聞いていた林藤が「言つてなかつたけか」とぼやきながらも、申し訳無さそうな雰囲気は全く出さずに頭をボリボリと搔いた。

「本部の方で正式入隊日つてのがあつてな、式典みたいなもんだ。ま、幸いあと1週間ちよつと後に次の正式入隊日があるからそれまでは我慢しろ」

「了解した」

「そうだ、暇ならこっちのトリガーに慣れとけよ」

そう言うと林藤は1つの手のひらサイズのケースを投げ渡してくる。

握りこんだ時に手にフィットするような曲線が施された珍妙な物体だつた。

「これが？」

「そ、玄界ミテのトリガーツてやつだ」

「おい支部長ボス、まだ須賀は正隊員じやないんだろう。一般人のトリガーの使用は……ボーダーの技術の結晶であるトリガーを何の躊躇いもなく投げ渡した林藤をレイジが奢める。

しかし林藤はまるで悪びれた様子もなく、むしろ楽しげに紫煙をくゆらせた後、口を開いた。

「おいおい、こいつが一般人つてタマか」

「何をする」

興味深そうにトリガーホルダーを見つめていた要の頭にポンと手を置き、林藤は言う。

既に戦闘員わずか2人ながらボーダー最強の名を戴く『玉狹第一』の誇るトップ攻撃手アタッカ小南桐絵バーフエクトオールラウンド、完璧万能手木崎レイジを挑発するよう。

「さつきも言つたけど、こいつはお前らよりずっと長く戦つてるんだぞ？」

「…………！」

「——へえ」

忘れていた訳ではない。

しかし重く受けとめはしなかった。

林藤の言葉で2人は理解する。

この奇妙な新人は『戦闘経験』で自分達の遙か上を行くのだと。

「む、なにやつ」

「須賀要だ。世話になる」

「ほう、おれはようたろう。こいつはらいじんまる。おれのあいぼうだ」

「食えるのか？」

「あいぼうだ!!」

当の本人は腐るほど触ってきたトリガーより、頭のでかい毛むくじやらの奇妙な生き物とそれに乗る幼児に興味を惹かれていた。



「弧月、レイガスト、スコーピオン……」

「アタッカーハンド用トリガーはこれで全部だ」

シミュレータールーム。

テープルに並べられたトリガーを取り、しばし思案する。

「射手、ガンナー、あと狙撃手スナイパーもあるけど、どうすんの？」

「……攻撃手だな。近づく方が性に合っている」

玉狹第一のポジションは、小南がガンガン攻める切り込み役。

レイジが状況に応じて近・中・遠距離でフオローするのが玉狹第一の戦闘スタイルだ。なんともまあレイジの負担が大きい雑な戦い方だが、それでもボーダートップに君臨しているということは、それだけ両者の力量が高い事の証左でもある。

「実際に使った方が早いか」

欲を言えば射手か銃手ガンナーが好ましいが、遠距離攻撃系のトリガーは慣れるのに時間がかかる。

近距離トリガーはだいたい初見の物でも感覚で使えるので、やはり要にとつては立ち回りやすいインファイターの方があつている。

「付き合え、レイジ、こなみ。模擬戦だ」

「なまいき！　付き合つてくださいでしょ！」

「構わないが、どういう形でやるんだ？」

そもそもレイジも小南も優れた攻撃手(アタッカ)という話だ。

今のところ攻撃手(アタッカ)以外になるつもりはないが、『弧月』『スコーピオン』『レイガスト』のどれをメインにするかで部隊の動き方も大きく変わってくる。

その上でこの部隊に最も合ったトリガーを選ぶのが理想だろう。

「1対1。弧月、レイガスト、スコーピオンでそれぞれ10本ずつ相手をしてくれ」「多いな」

「いいわよ。ボーダーのトリガーならあたし負けないし」

『10本勝負の3セットね、設定しておくわ。最初はどっちからやるの？』

室外のゆりから通信が入る。

それを聞いた小南が懐から純白のトリガー・ホルダーを取り出し、威勢よく啖呵をきつた。

「……！　ゆりさん、俺が——」

「あたしがやつたげる！　ボコボコにされても泣かないでよね！」

「まずは『弧月』だな」

1人静かに落ち込むレイジに気づいた者は誰もいなかつた。

◆

小南

(双月)

22

8

須賀

弧月

22

2

「あ、ありえない……このあたしが……」

「次はレイガストだな！」

「……調子乗んないでよね！ あんたの勝ちはこれで最後よ！」

小南
(双月)

○○○○○△?

8

須賀（レイガスト）????????△○ 1

「ま、まー中々だつたけどこんなもんよね！ 先輩って呼んでくれてもいいのよ？」

「……重いな。最後はスコーピオンか」

「むきー！ ちょっと悔しがりなさいよ！」

小南（双月）○○○？○？○？○△ 6

須賀（スコーピオン）???○？○？○？△ 3

「うつ……ぐすつ……」

「お前が泣くのか」

『気にすんな。こいつ自分より戦歴長いやつが初めてでムキになつてんだ』

「う、うるさい!!」

通信から聞こえてくる林藤の言葉に小南が顔を真っ赤にして吠えた。

理解できない感覚だ。

そもそも今の戦績でも小南が大きく勝ち越している。

しかしここで部隊の関係が拗れるのは好ましくない。

フォローしておいた方が良さそうだ。

「双月は接続器があつて真価を發揮するとミカエルが言っていた。実際接続器〔ネクター〕を使つて

いればもつと差は開いていただろう

「情けはいらないわよ!!」

「おい、やめろ」

頭をかじられた。謎だ。

「次は俺とだな」

『桐絵ちゃんお疲れ様〜』

「おかしい、何かがおかしいわ。だつてあたしよ? ボーダー最古参のあたしが……」

レイジがシミュレータールームに入ってきたのと入れ替えで、まだ何か言いたげだった小南が肩を落としてどぼとどぼと退出していった。

涙目でどんよりとした空気を纏う姿にはなんとも言えない哀愁が漂っていた。
どうでもいいので要は目の前のレイジに集中する事にした。

「レイジには中距離戦、遠距離戦装備でそれぞれ相手をしてほしい」「なるほどな」

対中距離戦はともかく遠距離の狙撃手スナイパー
アタッカと攻撃手の一対一は一方的な戦闘になる事請け合ひだが、実際に攻撃を受けるのが性能把握には一番だ。

『じゃあ始めるわね。頑張って、二人とも』

「は、はい！ ゆりさん!!」

なんだかゆりと話しているレイジは殺しやすそうだな、と要は思つた。



「どういう事だ、林藤支部長。何を企んでいる!?」

「だんっ！」と力強くテーブルに拳を叩きつけながら鬼怒田が声を張り上げた。

「私は彼のトリガーの解析を命じたはずだが、これは何だ？」

会議室の上座に座る城戸が一枚の紙を取り上げる。

その書類には須賀要の入隊、及び玉狹支部への転属の旨が記してあつた。

「もちろん仕事はきつちりしましたよ。データも送りますつて。それは要本人の希望で

す

「なに？」

林藤は悪びれた様子もなく要の玉狹支部への転属を口にした。

それを聞いた城戸が眉を顰めた。

そもそも今回、林藤に命じられたのは要の近界トリガーの解析である。
玉狹支部の隊員は林藤が個人的に近界(ネイバーフッド)から持ち帰ったトリガーを元に作られた特製のトリガーを使っており、本部の量産型トリガーとは規格が異なる特殊な部隊だ。

その事もあって、近界(ネイバーフッド)トリガーを扱うノウハウは玉狹支部——というよりはミカエルと林藤——の方が本部の研究チームよりも圧倒的に大きいのである。

要のトリガーの異常性から、玉狹支部のミカエルと林藤の元で解析するのが妥当だとして、林藤にはそのような命令が下されていた。

「事実ですよ。それに、まさか城戸さん達もあいつをあのまま一般人として扱うつもりは無かつたでしょ？」

「それはそうですが……しかし……」

「一般人として扱う訳にはいかないんだから、ボーダーで管理するしかない。でも玉狹以外じゃあいつは扱いにくすぎる。話し合いしても、たぶん結果は変わんなかったと思うよ」

「…………」

会議室に沈黙が降りる。

皆、黙り込んでしまった。

涼しい顔をしているのは新しいタバコを取り出そうとしている唐沢と城戸くらいのものだ。

「（ご）心配なく。トリガーのデータは取れましたし、定期的に更新しますよ。今のところは問題ありません……それに、あいつは強い。A級上位レベルの即戦力が加わったと考えれば、そう悪い話じやないでしょ」

——あんたらにとつちやそう簡単じやないか

林藤は肩を竦めたい気分だった。

高い能力を持つ近界トリガーの使い手。

それが玉砕支部に所属を望んでいる。

これは城戸派にとつては手放しに喜べる問題ではない。

要が近界民だつたなら話は單純だ。

城戸派、いや現在のボーダーは近界民の徹底した排除を掲げているため、殺す事に何の支障も無い。

しかし要は戸籍のあるれつきとした三門市の市民である。

排除する訳にもいかず、近界ネイバーフッドトリガーを持つため本部に所属させるわけにもいかない。

結果として対立する玉狹支部の力が強まる事を彼らは恐れているのだ。

「やはりというか……それ程なのか、林藤？」

要の実力や派閥の力関係というより、要がそうならざるを得なかつた過去に対して苦い物があるのだろう。

神妙な面持ちで忍田が尋ねた。

「まあな。こないだウチのエースと10本やつて3勝1分けだつたぞ」

「小南相手にか……！　こつちのトリガーは慣れてないだろう？　凄いな……」

忍田が感心した様子で声を漏らす。

実際、彼の経歴を話には聞いていても、実際に戦いぶりを見ると感嘆せざるを得ない。玉狹第一の誇る攻撃手アタッカー、小南桐絵は年齢こそ幼いものの、旧ボーダー時代から戦ってきた事もあり、現在のボーダー内でも並ぶ者のない超一流の戦士だ。

その小南桐絵から、あろう事か初見のトリガーで10本中最低1回は勝ちを拾つている。

これは驚異的と言つて差し支えないだろう。

ボーダーで『ノーマルトリガー最強』と言われる忍田ですら、見たことも無い、初め

て手に取るトリガード、双月を振るう小南を相手にそれができるかと言われば口を噤まざるを得ない。

とはいえ、要がそれ程の実力を手に入れるまでの経緯を知つていると、忍田も林藤も決して手放しで喜ぶ事はできなかつた。

そして、近界民の徹底的排除を謳う城戸派にとつて、この事態はそう単純ではない。

城戸は飄々とこちらを手玉に取つた様な態度を取つてくる1人の青年を思い浮かべていた。

「随分と手が早いな……迅の差し金か？」

「さつきも言つたでしょ？　あいつの希望ですよ。なんならここに呼んで本人に聞いたつていい」

須賀 要という人物に城戸派が抱いている印象は、はつきり言つて『こちら生まれの近界民』^(ネイバ)という認識が半分である。

——人生の大半を血塗られた戦場で過ごし、自己と社会への認識、そして人格形成のほぼ全てを「殺し合い」という価値観で形作られたそれはもはや、こちらの人間と呼べるのだろうか？

城戸派の答えは『否』だ。

須賀 要の帰属意識は何処にあるのだろうか。それはきっと向こう、もつと言えば戦場だ。

無論、書類上は彼は日本人だ。

しかし、人生のほとんどを戦場で過ごし、ボーダーの管理外のトリガーを持った人間が本部の目の届きにくい玉狹支部に属するという状況は、城戸派にとつて特大級の爆弾以外の何物でもない。

「…………仕方あるまい。事情が特殊とはいえ、入隊希望の一般人を追い出す訳にもいかん」

「さすが城戸さん」

「ただし、彼のトリガーに関する事は逐一報告する様に」
「はいよ、了解です」

——ただ、攫われた一般人が帰還した、という現状が城戸にとつても喜ばしいものである事も事実なのだ。

現在のボーダーは人々を近界民の脅威から守る為に生まれたのだから。

そこを違えるつもりは城戸には無かつた。

「良かろう。須賀要のボーダー入隊、及び玉狹支部への転属を許可する」

城戸の一聲により、要は正式に玉狹支部への所属が決定した。

本題に決着が着いたことで、会議室の緊張が解けた。

「じゃ、ワタクシはこれで」

用事の済んだ林藤が腰を上げたその時。

何気なく、口をついて出てしまったのだろう。

根付のぽとりと零した咳きが林藤の耳に届いた。

「はあ、半近界民と言つたところですかねえ……まつたく、よくよく面倒な事が起くる

……」

悪気は、無かつたのかもしれない。

根付栄蔵は悪人ではないし、少々嫌味っぽい部分はあるものの、本質的に常識と良識を兼ね備えた大人である。

でも、

…………最初はただ、帰りたいだけだつたのに

両親の前で跪き、肩を震わせる少年の背を見ていた林藤は、聞き流す訳にはいかなかつた。

「根付さんさあ」

「え？」

静かに、いつもの穏やかな調子で口を開けたのは、ひとえに林藤の人柄ゆえに他なら

ない。

「あいつが好きでその『半近界民』とやらになつたとか思つてゐる？」
「あ……いや……」

林藤に普段と変わつた空氣はまつたく無い。

軽い口調に、緊張感という物の感じられない雰囲氣。

それが逆に根付の背筋にゾクリとした震えを走らせた。

鬼怒田と根付が顔を青くし、唐沢までもが小さく目を見開いている。

「よせ、林藤。根付さんも、不適切な発言は控えてもらおう」

「え、ええ。その……誠に申し訳ない……」

張り詰めた空氣を解すように、忍田が静かに一人を制する。

根付は金縛りから解放されたように動き出し、おずおずと謝罪した。

「いや、すいませんね空氣悪くして！ ただまあ、過度な哀れみも余所者扱いも本人から
しちや不本意でしようつて事だけですよ」

「——ああ、肝に銘じておこう」

城戸の言葉を聞いた林藤は満足げに頷いたあと、タバコを取り出しながら部屋を後に
した。



「ただいまーっと。おお、やつてるな」

「リンドウか」

玉狹支部に着いた林藤がさつそくシミュレータールームに顔を出すと、レイジ、小南とトリガーホルダーをいじつている要が出迎えた。

「ええ……あんたこんなセットでいくの？　というかB級に上がるまでは1つしかトリガー使えないわよ？」

「わかっている、お前達との連携を考慮した結果だ。今まではレイジの負担が大き過ぎる」

「あたしと組んで長いんだから、レイジさんがそんなんでヘタるわけないでしょ」

「まあ、正直助かるな」

「レイジさん!?」

トリガーホルダーを並べたテーブルを囲んでわいわいと――主に小南が――盛り上がりつていて。

「どれどれ……へえ。お前、小南とだとスコーピオンが1番戦績良かつたろ?」

「ああ。だがスコーピオンではカバーがしにくい。俺が2人をフオローして、レイジを更に動きやすくすれば、自然と小南の大振りも決まりやすくなるだろう」

「なるほど。良かつたなあレイジ」

「やつと小南の面倒を見なくて済むな」

「ちよつと!　皆してなによ!!　あたしは1人だつて強いんだから!!」

「うがー!　と小南が要にかぶりつく。」

要は「おい、やめろ」と言いながら小南を押し退けていた。

小南に10本勝負に引き摺られていく要を眺めながら、林藤はタバコの煙を満足そうに吐き出した。

「こりゃあ、楽しみだな」

正式入隊日

迅悠一には未来が見える。

正確に言えば、「目の前の人間に起こる未来を、可能性の大小に応じてより先まで見通せる」というSクラス、「超感覚」に類する副作用だ。(サイドエフェクト)

「…………んん？」

「どした、迅？」

「いや、ちょっとね」

朝ごはんの後のぼんち揚げをボリボリと齧つていると、目の前でコーヒーを飲みながら新聞を広げている林藤の未来が見えた。

別にそれ自体はいい。いつもの事だ。

今だつて視線をついと動かすだけで、目に映る人達の色々な未来が見える。

例えば、今皿洗いをしているレイジはこの後ベンチプレスで筋肉をミチミチいわせているし、今日も今日とて雷神丸を駆る我らが玉狹の誇るカピバラライダー陽太郎は、そろそろ雷神丸から滑り落ちてお尻を打ち付ける。

「おぎやつ」

問題は、林藤に見た未来の内容だ。

(ふーむ、誰だ? 支部長は厚着してゐるし冬かな)

可能性が低ければ今に近い未来を、逆に高ければ年単位で先まで見通せるサイドエフェクトだが、詳細な月日までは掴めない。

しかし長くこのサイドエフェクトを使つてゐる迅は、見えた光景からおおざっぱだが時期を把握した

未来の光景では、林藤が誰かと会話をしながら、その人物を玉狹支部へ招き入れていた。

客人が来ること自体はまれにあるのだが、迅が気になつたのはそこではない。

(入隊と転属用の書類……へえ、玉狹に新人か)

別の場面では、林藤がその『誰か』にボーダーへの入隊、そして玉狹支部への転属用の書類を渡していた。

(んー、どうしようかな)

未来を人に教えても、良い結果になるとは限らない。

玉狹に入る時点で悪人という訳ではなさそうだったが、迅は林藤に先の光景を教えるか決めあぐねていた。

ぼんやりと悩みながらも、ぼんち揚げをボリボリする手は止まらない。

「おはよー」

その時、前日に支部の部屋に泊まつていた小南がリビングに降りてきた。

(お、小南も見ておくか)

『誰か』が映りこんだのは林藤だけだったが、玉砕にいる以上、小南の未来にも見えるかもしだれない。

そう考えた迅の未来視に映つた光景は――

「な、何よ」

「……小南、頑張れよ」

「ちよつとどういう意味よ！ 今度は何が観えてんの!?」

——小南（双月）○○○？○？○？○△

先輩風を吹かしながら意気揚々と『誰か』との模擬戦に臨んだ小南が半泣きにされて
いる場面であった。

迅は心の中で合掌した。哀れ小南、そんなどから陽太郎にも舐めくさつた態度を取ら
れるのである。

(面白いから黙つておこ)

割と心配する必要はなさそうだ。

(小南が新入りに半泣きにされる) 未来はもう動き出している――



「私は以上だ、この後の説明は嵐山隊に一任する。

入隊おめでとう」

壇上に立つ忍田がそう言つて式辞を締め括つた。

最後に、彼は靴を鳴らしながら見事な敬礼を披露した。

その目線が、ふと自分に向いているのがわかつた。

身体がほぼ無意識に動く。

キュッという小気味よい音と共にこちらも敬礼を返した。

忍田は少し驚き、満足そうに頷いて壇上をあとにした。

「え、これ俺達も敬礼しなきやいけないやつ?」

「もう本部長行つちゃつたし、やんなくて良いんじやない?」

「何あの人……」

「恥つず……」

周りからの視線を感じる。

染み付いた動作故に反射的に反応してしまったが、どうやらボーダーではその必要はないようだ。

忍田と入れ替わるようにして、鮮やかな赤い隊服が特徴的な少年が姿を現した。

「今回の入隊式を監督する嵐山隊の嵐山准あらしやまじゅんだ。まずは入隊おめでとう」

(あれがこなみの言つていたアラシヤマか)

小南の親の兄弟の息子らしい。

「いとこ」という言葉で言い表せる関係らしく、小南とも仲が深いようだ。要としてはそれは他人なのではと思わなくもないのだが、この三門市にはそういうた関係の人間同士が多いらしい。

(玄界ミデンは覚える事が多くて大変だ)

最近は玉狹のメンバー達に陽太郎と一緒にひらがなとカタカナを教わっているのだが、陽太郎よりも覚えが遅い要是最近少し疲れが溜まっていた。

戦うだけならば一日中戦い続けた事もあるが、文字などの勉強はそれとは比較にならないほど体力を使う。

『戦い以外の生活』を送る事で初めて気づいた。
自分は結局、戦っている時が一番落ち着くらしい。

「君たちの左手の甲にある数字を40000ポイントまで上げること。それが正隊員昇格への条件だ。普通は1000ポイントからスタートだが、仮入隊の間に高い素質があると判断されれば、その分だけポイントが上乗せされているぞ」

左手を見る。

そこには『35000』の文字が光っていた。
要は比較的素質が高いと判断されたらしい。

「あいつ35000だぞ……！」

「すっげえ」

「やはり敬礼はするべきだつたんだよなあ……」

「恥つずとか言つた俺恥つず……」

周りから感じる視線の雰囲気が変わった。

1000ポイントより上の隊員は何人かいるが、反応を見るに要はその中でも最も高いようだ。

(素質……)

才能や伸びしろ、と言い替えてもいいのだろう。

しかし、なんだか腑に落ちなかつた。

無論、この中で一番実力があるのは要なのだろう。

だが実力とは素質とイコールではない。

——伸びしろで言うなら、俺よりこいつらの方がずっとあるだろう。

そんな思考をかき消すように、嵐山の声が響いた。

「さて、君達の訓練を行う場所まで案内しよう」

アタッカーとガンナー・シユーターは同じ部屋で訓練を行うらしい。

嵐山と丸い髪型の眠たそうな目をした隊員について行くと、観客席のあるシミュレー
タールームのような部屋がいくつか並んだフロアに出た。

「さつそくでびっくりするかもしねないが、対近界民戦闘訓練だ。大丈夫、仮想戦闘モードだから痛みは感じないしトリオン切れもない。思いつきりやつてくれ。制限時間は一人5分で、早く倒す程評価が上がるぞ！」

実戦の適性を測るには妥当な方法だ。

近界の戦争はトリオン兵が主力であるため、この訓練で向き不向きがある程度はつきりするだろう。

集団を先導する嵐山がシミュレータールームを指さすと、淡い光とともに、霧の中から浮かび上がるようにして、一体の小さなバムスターが現れた。

「相手はあの大型近界民だ。ネイバー訓練用に小型化してある」

(…………何?)

——バムスターが、訓練?

要が耳を疑うなか、周囲の反応はまったくの逆だつた。

「あいつ見たことある!」

「あ、あんなでかいのとやんの……?」

「いや、でも痛みは無いんだし……」

「こつわ……」

——意味がわからない。

戦闘訓練であるのに、捕獲型のバムスターを相手にすることは。そもそも、バムスターというトリオン兵は攻撃力のほとんど無い団体のでかいだけの雑魚だ。

よっぽどのガラクタを使つていなかぎり、新兵のトリガー使いでも時間がかかりこそそれ、負ける事は有り得ないはずだ。

だからこそ、今回の戦闘訓練も玉砕で行つてゐる対人戦か、トリオン兵を相手にする

としてもモールモッド辺りだろうと考えていたのだが、蓋を開けてみればただの的あてだ。

せつかく優れた訓練システムがあるので、これではあまりにも粗末ではないか。
 （…………いや、違うか）

ふと要の脳裏によぎったのは、ボーダーにいるであろう友人の言葉。
 『戦争じやなくて、街の人たちを守るのが役目なの』

殺すために戦うのではなく、守るために戦うのだと。

『だから私たち、あなたが助かつたって聞いたとき、とても嬉しかつたわ』
 自分を助けてくれた命の恩人は、そう言つていたではないか。

——『玄界ミデン……この世界で生きる以上、変わらなければならぬと感じた』
 （…………何も、変わつていしないな）

小さく首を振る。

これでは自分を友人だと言つてくれた彼女に合わせる顔がない。

「さあ、始めよう。順番にシミュレータールームに入つてくれ！」

説明を終えたらしい嵐山が隊員たちを誘導していく。
 要は一抹の自己嫌悪と反省を抱きながら、彼の後を追つた。



「おーい、要。マフラー持つてけ」

「了解した」

小南桐絵がいつもの様に休日の朝、玉柏支部の自室で目を覚ますとそんな会話が聞こえてきた。

「うー…………あれ、今日だつたつけ!?」

がばり、と布団を押しのけベッドから起き上がる。

そうだ、今日は要の正式入隊日だという会話を昨日したばかりだった。

下から聞こえて来る会話から、もう要が支部を出ようとしていると判断した小南は、急いで部屋を出て階段を駆け下りた。

「ちよ、ちよつと待つて！」

「などど、と土煙を巻き起こしそうな勢いで一階に顔を出すと、無表情ながらなんとなく驚いた雰囲気の要と、彼の服装を整えている林藤と迅が目に入った。

「今日学校休みだからあたしもついて行つてあげる！」

「いや小南、もう結構時間ギリギリなんだけど」

「このお寝坊さんめ」

「うそ!」

時計を見る。確かにあと30分もない。

なぜもつと時間に余裕を持とうとしないのだ、と文句を言いそうになつたがすんでのところで止める。

戦闘時以外はだいたいのんべんだらりと過ごしているうちの奴らにそんなことを期待してはいけない。
玉猶

というか自分も大分遅くまで惰眠を貪つてゐる時点でどつちもどつちだつた。

小南は頭を抱えたくなつた。

「要、本部への行き方なんてわかるの?」

「支部長が本部へ行くついでに連れてくらしい」

「あーもー！」

せつかくできた後輩に先輩として、こつちの事を色々と教えてやろうと思つていたのに、トリガーについてはミカエルやレイジが、ボーダーについては林藤や迅や陽太郎が主に教えているせいで、要が来てから小南は先輩らしい事が何も出来ていない。これは由々しき事態である。

レイジはそんな感じじやないし、迅に「小南先輩」呼ばわりされるのはムカつく。このままでは、先輩呼びしてくれる（かもしれない）後輩を逃がしてしまっては、

!

「小南、お前まず着替えたら？」

と、迅が珍しく気まずそうにそう言つた。

「え？」

言われて、気づいた。

そういうえば自分は起きるなりベッドを飛び出してきたのだ。
ぎぎぎぎぎぎ、と壊れたロボットの様に首を動かし、自分の身体を見下ろす。

下着の上に重ねただけの、ふわふわとした可愛らしいパジャマが成長期の少女の体のラインを表している。

更に、慌ただしく飛び起きたせいで髪はボサボサ、パジャマもずれて、すべすべとし
た健康的な肩とおへそ、あとちよつとどいうか普通にぱんつが丸見えであつた。

まあ端的に言つて、今の小南桐絵嬢（一五）はお年頃の少女が人の目に触れるにはとつても恥ずかしい姿なのである。

1

もう一度、さつきの焼き直しのようにぎこちない動きで林藤、迅、要の方を見る。

— 1 —

「いやー、言うタイミング無くてさあ」

迅と林藤は頬をかいたり、口笛を吹きながら顔を逸らしている。話を取り替えて教えてくれるあたり気を使つてくれたのだろう。

それはまだいい。

とても。

とつつつつつつつつつても恥ずかしいが、理不尽に本気で人に当たるほど小南は鬼でも屑でもない。

「どうした、早く行け」

問題は、小南が顔を出してからずつといつもの無表情でこちらを見ていたコイツである。

1

いやいや待て待て、こいつは子供の時に色々あつたからそこからの社会常識が無いわ

けで、つまりこいつはお子様と同レベル、いやでもいくらお子様でもレディのあられもない姿をみて何だとは何よあたしに魅力が無いってわけあたしだつてこれからもつと成長するんだからそろそろ胸が大きくなるアメだつて届くしすぐに――

「顔色が悪いぞ。精銳ならば体調管理には気をつけろ」

小南、緊急脫出

「行くか、要」

「こなみはいいのか」

「いいんだ、しばらくあいつはそつとしといてやれ」

「了解」

(納得いかない……納得いかないわ……なんであたしだけこんな思いをしなきやいけないの……)

色々と考えつつも、やつぱり後輩の事は気になる訳で。

小南は身だしなみを整えたあと、入隊指導を見学しに本部へ足を運んだ。

「あ、いた」

戦闘訓練テストを行っているフロアに入り、観覧席の欄干に肘をつきフロアを見渡すと、ちょうど要がシミュレータールームに入していくのが見えた。

(ああ、今回も准が担当だつたんだ)

大変ねー、と小南は他人事のように呟く。

下を見ると、入隊指導を担当している小南の従兄弟である嵐山が要に何やら色々と話しかけていた。たぶん、大丈夫心配いらないだとか頑張れだとか言つてるんだろう。要の戦闘能力を知つている小南は、静かにニヤリとしたどこぞの実力派エリートのような笑みを浮かべる。

(……ふふ、びっくりして腰抜かさないことね、准)

要がシミュレータールームに入ると、静かな電子音とともに、訓練用に小型化されたバムスターが姿を現した。

「あなたの力、見せてやりなさい」

小南がそう言うとほぼ同時に、要の戦闘訓練を開始する宣言が響き渡った。

「…………」

静かに、見据える。

視線の先には何千、何万と殺してきた相手。やる事はこれまでと何も変わらない。

腰のホルスターから武器を引き抜く。小さなトリオンの放電とともに刀身が姿を現した。

ナックルガードと下部のブレードを消し、刀身を小さく取り回しやすいように変形させた。

目線で準備の完了の意思表示をすると、シミュレータールームにアナウンスが響いた。

『2号室、始め!』

最速、最短。

この戦闘訓練は一体倒せばそれきりだ。そのあとを気にする必要が無い。柄を放る。

空中で一瞬停滞する刃。

体捌きはまるで疾風だつた。

上体を思い切り捻り、生じた力を弱めず、更に腰を捻つて倍増したエネルギーを脚へ伝える。

右脚が震む。

莫大な勢いで打ち出されたままに、『レイガスト』の柄尻を蹴り抜いた。



まるで、弾丸。

キュドツツツツツツ!!!! という空気と物質が擦過するような快音を鳴らして飛翔した
レイガストが、大気を引き裂き、バムスターの眼の中心に根元まで深々と突き刺さつた。
「な…………」

誰かが驚愕の声を漏らした。

眼の周囲にも大きなヒビを残したバムスターがゆっくりと倒れ伏した。

『い、 1、 1秒…………!?』

歴代最速記録が誕生した。

あるいは家族とカレーの日

「凄いな！ 歴代最高のタイムだ!!」

崩れ落ちるバムスターを尻目にシミュレータールームを出ると、すぐに嵐山が駆け寄ってきた。

「君は？」

名前を聞かれているのだろうか。

向こうの上官にもたまにいたが、こういう要領を得ない質問は良くないと要は思つた。

「玉狹支部の須賀要だ

「玉狹……ということは」

所属を伝えると、嵐山は顎に手を当てて考えこむ。

数瞬して嵐山が口を開こうとしたとき、頭上から聞こえて来る声が彼の言葉を遮つた。

「驚いたかしら、准！」

「なにつ！」

「そいつをC級だからと侮らない事ね！」

「誰だ――――!?」

珍妙な掛け声とともに、声の主が観覧席から飛び降りる。

そいつはだんつ！ と勢いよく要と嵐山の前に降り立つた。

「なんと言つても、こいつはこのあたしが直々に鍛えた後輩なのよ！」

既にトリオン体に換装していた明るい黄緑色の隊服が印象的なショートカットの少女、小南桐絵が自慢げに宣言する。

「いや、俺はお前の後輩になつた覚えは――」

「後輩なのよ！」

訂正しようとした要の言葉はあえなく断ち切られる。

なんだこいつは。

話を聞かない。

「桐絵！ そうか、彼はお前の後輩か！」

「いや、後輩では――」

「流石玉狹つてところか、凄いな！」

「当たり前でしょ、玉狹うわちはボーダー最強なんだから！」

わいわいがやがや。

なんだこいつらは。話を聞かない。
なるほど、と要是納得した。

「いとこ」というだけあつてこういつた所は似て いるようだ。

いきなり現れた小南と嵐山が楽しそうに話している様子が突然の出来事すぎて、1.1秒という桁違いの記録に沸き立つて いた他のC級隊員達は困惑していた。

「おつと、まずいな。須賀くんたちの番で最後だし、次に移らないと……というか桐絵、普通に入つてきてるが本来はダメだからな？」

「わ、わかつてるわよ」

生真面目な従兄弟の注意に小南が気まずそうに言い返した。

まさか「初めての後輩が問題を起こさないか心配で見に来たら大活躍してたから自慢したくて飛び出しました」などと正直に言える訳がない。

「待たせてすまない！ 次の訓練に移ろう！」

嵐山と眠そうな隊員が次の訓練の説明をするなか、小南は要に話しかけていた。

「へへ、やるじゃない。まあ玉狹うわの前衛フロントなんだから当然ね」

「そうか」

「さつさとB級上がりなさいよ、正隊員にならないと部隊に所属できないんだから」

「ああ」

小南の声を背に、ぞろぞろと移動しはじめた集団についていくと、なぜか小南も当然のように隣を歩いている。

「ついて来るのか」

「え？ うん」

こてんと小首を傾げる小南は何でそんなことを聞くのかわからないといったふうだつた。

たぶん、割ときつきから奇異の目で見られていると思うのだが、それはいいのだろうか。

要はどうでもいいので考えるのをやめた。



「……」

地形踏破訓練 1位

隠密行動訓練

1位

探知追跡訓練 1位

当然と言えば当然の結果である。

一つのミスがそのまま死に直結する場所で10年間『生き残るための動き』を身体に染み込ませてきた要は、ごく当たり前のようになんとぶつちぎりの成績で1位を総ナメにした。

「あまり貯まらないな」

左の手甲に光る『3600』の数字を見てぽつりと零す。
要のつぶやきを耳ざとく聞いていた小南がそれに応えた。

「そこ」でランク戦つてわけ

ふふん、とドヤ顔で薄い胸を張る小南がなぜ偉そうにしてるのか要にはよくわからなかつたが、とりあえずランク戦の方が早くポイントが貯まるらしい。

「ほら、このパネルをこうして……」

「ふむ」

個室ブース内で小南に説明を受けながら、表示された相手を片つ端から選択する。

「——やるか」



首を刎ねる。

胸を貫く。

腹を捌く。

脳天から股まで、一刀両断にする。

相手が武器を持つ手を掴み、そのまま喉を串刺しにさせる。

——落ち着く

「ひつ……」

隙だらけの顔面にレイガストの切っ先を突き込む。恐怖に固まつた表情を縫い止め
るように串刺したレイガストを、更に一度柄を捻る。

原型を留めない程ぐちやぐちやになつた頭部が砕け、相手はそのまま緊急脱出して
いった。

——ここに来てから、うまく言えないが悪くない気分だった。

ペイルアウト

ただ、慣れない環境でいささか気疲れしていたのも事実だ。

——落ち着く

「うわあああああっ!?」

震える拳銃の銃口から吐き出される光弾が、明後日の方向へ飛んでいく。シールドモードを使うまでもなかつた。

むしろ重い、邪魔だ。

レイガストを投げ捨てるよう投擲する。恐怖に支配された相手は死にたくない一心で動く。

だからか、肩を深く切り裂かれたものの間一髪で躱したようだ。

「や、やつた……！」

構わない。

後は勝手に撃つてくれる。

レイガストを捨てて身軽になつた身体が風となつて駆ける。

既に剣がものを言う領域だ。

瞬きのうちに距離を詰めた要は、勝利を確信した。

——だから、落ち着く。

戦場は、余計な事を考えないでいい。

考える事は、ひとつだけ。

「ひ、やめ——」

必死になつて引き金を引く相手の手を掴み、銃口を強引に頭に向けさせた。

「あ」、という相手の声が聞こえたが、遅い。

ドドドン、と数回銃声が響き、相手の頭は風船の様に弾けた。
——敵を殺す。



(けつこう暇ね……^ボ支部長遅いからあたしが要を送つて帰らなきやだし……あ、きた)

手持ち無沙汰のまま、個人ランク戦フロアのソファで時間を潰していた小南に、ブー
スから出てきた要が無造作に言い放つた。

「できたぞ」

そう言つてドリンクのストローを咥える要に小南は目を瞬かせた。

「できたつて……」

「これでB級か?」

「え、は、早くない?」

すつ、と差し出された左手の甲には『4003』のポイントを現す数字が、どこか自慢げにすら感じられる様子で輝いている。

いや、本人は全くその気は無いだろうが、ざわざわとした周りの空気と視線がそう感じさせるのだ。

小南とてこの中身お子様の歴戦の兵と2週間ちょっと生活してきたのだから、その実力は十分にとはいえないまでも理解している。

が、それにしたつてこれは……。

小南は携帯をいじつたりしていたのであまり気づかなかつたが、周囲の隊員達の要を見る目が完全に恐怖のソレである。

「あんた何したの?」

「普通に戦つただけだ」

絶対嘘だ。

いや、嘘というか、こいつの言う「普通」は周りのそれとちょっと、いやかなり違う。

小南は要の出てきたブースに入ると、要の行つてきた試合の戦績を確認した。

一試合目	試合時間	0分05秒
二試合目	試合時間	0分02秒
三試合目	試合時間	0分09秒
四試合目	試合時間	0分03秒
五試合目	試合時間	0分08秒

「うつわあ」

小南は直ぐに見るのをやめた。

そして、周りのC級隊員達から要が恐怖の目で見られている理由を理解した。

間違いない。

あいつ、今日入隊したばかりの新人たちの心を（無意識に）折りまくっている！

可哀想だが、ご愁傷さまと言う他ない。

そもそも10年戦ってきたやつがC級隊員訓練生でいる今の状況の方がおかしいと思う。

はあ、と一つため息をつく。

黒トリガーを持つているなら話は別だが、そうでない以上、ボーダーに入るにはC級

から始めるしかない。

ブラック

他のC級にとつては不幸中の幸いというか、要はB級昇格が決まつたのでもうこれ以

上悪夢を見ることはないだろう。

彼ら

「あんたこの後どうすんの？」

遠巻きに見つめてくる訓練生達を若干気の毒に思いつつ、小南は要にこれから予定を聞いた。

もうオリエンテーションの訓練は終了している。

後は自由時間だ。

「このまま玉泊第一への入隊手続きをしに行く。リンンドウとシノダはどこだ？」

「あ、そつか。もう正隊員扱いだもんね！」

要の予定を聞くと、小南は嬉しげに肩を揺らして、目を輝かせた。

「こつち！ 案内してあげる！」

小走りで駆け出す。小刻みにふわふわと揺れる特徴的な長髪は、小南の心情を表しているかのようだつた。

わからない、なぜ小南はあんなに興奮しているのだろう。

要は首を傾げた。

「早くー！」

急き立てる声にどうでもよくなつた要は思考を放棄して、小南の後を追つた。



ボーダー隊員食堂にて。

運良く会議終わりの林藤と忍田を捕まえた二人は手早く手続きを終え、遅めの昼食を摑っていた。

「編入とはいえ入隊日当日にA級つてヤバくない？」

「やばいのか」

自分の支部の支部長と本部長がいて手続きが滞るハズもなく。

あまりにあっさりと、須賀 要は玉狹支部所属A級部隊、玉狹第一の隊員として正式に認められた。

入隊から数時間でB級昇格。A級昇格への所要期間など15分である。

「悪いことじゃないんだけどさあ」

「どこがよ。半分インチキみたいなもんでしょ、こいつの場合」

流石に驚いた様子でぼりぼりと頭を搔いた林藤の言葉に、うどんをつるつると啜つて

いた小南がぼやいた。

まあ正直林藤もそれには同意だ。

要がC級扱いで入隊など、どう考へてもスタート地点がおかしい。

この初心者狩りめ。

「要くんの能力が高い事はわかつていた。編入だつてちゃんと規則に記された正規の手順での昇格だ、何も恥じる事はない」

「……げふ。 そうか」

「あんたほんつとによく食べるわね……」

忍田の言葉に口の中のコロッケを飲み込んだ要が頷く。

既にテーブルのほとんどは要の食べた空の食器で埋まつており、皿のタワーが四つ堂々と鎮座していた。

「……要、ごめん。 そろそろおじさんの財布が限界だわ」

「了解」

大人しく頷いてくれた要に林藤は深く感謝するとともに、とても温かい気持ちになつた。

えらいぞ要、箸の使い方に慣れてきてるな……！

財布を見て落ち込んだり要を見てじーんとしている林藤をよそに、小南が口を開い

た。

「そんなにこつちの食事が気に入つたの？」

「ああ」

「ふーん……あつちの料理つてどんなだつたの？」

「無い」

「え？」

要の言葉に疑問符を浮かべる。

小南には要が言つている意味が理解出来なかつた。

「無いって……」

「体調管理のツールはあつた。たんぱく質、ビタミン、それらの栄養がパッケージされて配給される。味は無い」

「」

「料理とは色々な素材を使つて、味を付けた物の事を言うのだろう。

ならばおそらく、俺が口に入ってきた物は料理ではない……と思う」

誰も何も言わなかつた。

三人の座るテーブルに沈黙が降りる。

小南は小さく「ごめん……」と言つて目を伏せ、林藤が大きくなめ息をついた。

忍田の固く岩のように握り締められた拳が震え、テーブルにカタカタと音を立てた。

「何故だ？」^{ミデン}玄界の食べ物は好きだ。ちゃんと『味がする』のがこんなに良いものとは知らなかつた。向こうでも戦場の近くで動物を狩つて食べたりはしたが、こっちの方が良い……俺も、かつてここにいた時はこんな物を食べて、いたんだろうな」

「…………ああ、そうだよ」

「そうか……これも、忘れていた事だな」

——なんの事はない、戦争だ。

自分たちは死にたくないからと、他所から都合のいい奴隸を持つてきて、おもちゃの様に使い潰す。

そうして感情も日々の楽しみも、故郷の景色や親の顔すら記憶からすり減つていくまでただひたすらに戦つてきた数多の内の一つが須賀 要だ。

別に近^{ネイバーフッド}界だけではない。

この地球にだつて要のような、もしかしたらもつと酷い環境で死んでいく者達が大勢いるだろう。

——それでも

「あー、くそ」

「…………」

「支部長、忍田さん……」

——それでも、もし万が一、要のいた国が我らの住むこの街に攻めて来ようものならば。

血の一滴、骨肉の一片も残すまいとすら思う程の激情を林藤と忍田は静かに心に決めた。

それは、基本的に温厚で知られる二人が、要によつて知らされた「既にその国は滅んだだろう」という情報を本当に、小指の爪程ではあるが、ほんのわずかながら殘念に思う程に。

「どうした、三人とも。…………小南、食わないのか？」

そんな心の内も、この男には関係ないようで。

割と纖細な故に先の自分の発言に落ち込む小南を意に介さず、要は手の止まつた小南のうどんの器をじつと見つめる。

そんな様子がおかしくて、小南はつい笑つてしまつた。

「…………ふふ。なによ、もう。あーいいわよそんな見つめないでもあげるから！」

「ありがとう」

心なしか、いや無表情だが確實に嬉しそうにどんぶりを受け取る要に、林藤と忍田も

思わず頬を緩めるのだった。

「時間こそかかりそうだが、あまり心配はいらないようだな」

「はは、だな」

「……私は、要くんが玉狹に入つて良かつたと思う。もちろん、規則や情勢なんて関わりのない領域での話だ」

「ああ、俺もそう思うよ」

「あわわわわわ何口付けてんのちょっとダメ――！　汁飲むの禁止!!」

「何故だ、こなみはさつき飲んでいた」

「だから！　あたしが口つけたとこから飲むのやめて!!」



帰りの車内。

夕焼けに朱く染まる街並みを眺めていた要は、ふと話しかけてきた林藤の声に耳を傾けた。

「要はさ、玉狹の事どう思つてる？」
「……？」

突然の質問に首をかしげた要だが、特に困る事もないのになんとなしに答えた。

「味方だ」

びくり、と。

左前の助手席に座る小南の肩が震えた気がした。

「そつか」

林藤は静かにそう零したあと、器用に片手でハンドルを操作しながらもう片方の手でポケットを漁り、タバコを取り出してライターで火をつけた。

換気のために窓を開け、タバコの煙が窓の外へ吸い込まれていく。
「……お前は覚えてないかもしれないけどさ。一緒に家の家に住んで、一緒に同じ飯食つて、一緒に笑う奴らの事をなんて言うか知ってるか？」

「…………」

林藤の問いかけに思考を巡らせるが、要は答えを導けない。

考え込む要に、大きくたくわえたタバコの煙を窓の方へ吐き出したあと、林藤が答えた。

「家族つてんだ」

「」

瞬間、要の脳裏に去来する微かな面影。

顔も声も、名前すら忘れていた両親。

ただ狂おしい程会いたかった、その事だけを思い出すことができた、苦しくて痛くて、切なかつた大切な記憶。

「おまえはおれ達の家族だ。これからお前がどこに行こうと、何をしようと」

「……そう、か」

一度失つた。

もう手に入らない物だと思っていた。

あの石碑の前に跪き、機械的に彫られた溝をなぞる事でしか、その残滓を感じる事は出来ないのだと。

「リンドウ、こなみ」

でも違つた。『居場所』は、もつとずっと近くにあつた。

「はいはい」

「……なによ」

林藤が軽く応じる。

窓の枠に肘をついてぶつきらぼうに答える小南の顔は見えなかつた。

「これからも、よろしく頼む」

「こちらこそ」

「……ふん」

相変わらず、二人の顔は見えない。

林藤はいつも通りに飄々とした口調であり、小南はさつきから憐然としている。でも、そんな事が気にならない程、要はなにか、胸の奥が温かい気持ちだつた。窓から射し込む夕日の光が、小南の耳を赤く染めていた。

「さあ、今日は疲れたる、ちょっと寝とけ」

「ああ……」

林藤に言われて、まるでどこからか現れたようにどつと疲れが押し寄せてくる。

向こうでは有り得なかつた事だ。

何せ命に関わる。

（でも、悪くない……）

要は林藤に促されるまま、心地よい疲れに身体を任せ、目を閉じた。

すぐに、後ろから静かな寝息が聞こえてきた。

今まで相当疲れが溜まっていたんだろうな、と思う。

「……ねえ、ボス支部長」

ふと、助手席からずつと窓の外を眺めていた小南が口を開いた。

「ん？」

「みんなが要こいつと同じような生き方をしてきたら、みんな要こいつと同じくらい強くなるのかな」

「それは……」

ほとんどが死ぬだろう。

それ程に要の境遇は死に溢れていた。

「——氣に入らない。だとしたらあたし、強くなくたつていいわ」

「……おまえ」

しばし呆然とする。

小南は弱い奴が嫌いだ。

本人もそれを公言している。

その小南が強くなくてもいいと言った。

そんな強さなどいらない、と。

——そしてそれ以上に、小南は「頑張つてるやつ」が好きだつた。後部座席で眠る少年は一体どれだけ頑張ってきたのだろう。

頑張つて、頑張つて。

耐えて、耐えて。

そんな自覚すら無くなるまで、彼はずつと苦境に身を置いてきたのだ。

「……だから、こいつを10—0でボコボコに出来るくらい強くなる。強くなつて、いつか絶対、こいつを攫つた国がしてきた事は全部無駄だつた、つて言つてやるわ」
ようやく、外を見ていた小南が振り返る。

眦と鼻先が赤くなつており、頬には涙のあとが残つていた。

——小南は先程まで要の詳しい過去を知らなかつた。

ネイバ-近界民に攫われたという事は知つていたが、それだけだ。最早隠す意味が無いと思つた林藤が本人の許可を取り、小南に全てを話した。

要のこれまでを知つた少女は、何も言わず、何も返さず、ただ黙つて窓の外を見てい
た。

まるで、その空の遥か向こうにある何処かを射竦めるように。
小南とて熟練の戦士である。

近界に存在する数々の国に赴き、多くの敵を斬り伏せてきた。

もちろん、反吐が出る程の人間の悪性を見たことだつて、須賀要という例が初めてではない。

ただ、奴隸が急に支配から解放されても、必ずしもそれがすぐに幸せに変わるとは限らないということを、要と接するうちに、否が応でも突きつけられるのだ。

同情したわけではない。

安易な同情という哀れみが、相手にとつて何よりの侮辱であるということを小南桐絵は既に知っている。

知らざるを得なかつたのだ。

ただ、やるせなくて、悔しくて。

無力な自分と、人間の悪性への怒りに、彼女は涙を流していた。

「つははは！　10—0は難しいんじやないか？」

「う、うるさい！　いつかって言つたでしょ！！　一年もしたら完勝してるわよ！！」

「へえ、一年はかかるつて思つてんのか」

「う、う、うー……!!」

「はは、悪い悪い……あつちよつとマジでやめて今運転中だから」
ぽかぽかと殴りつけてくる小南を宥める。

走行中は割とシャレにならないのでやめて頂きたい。

『ボーダー幹部、過失運転で逮捕』とか嫌すぎる。

「…………ねえ、支部長^{ボス}」

「ん？」

もう一度、さつきと同じように小南が話しかけて、林藤が応えた。

「あたし、料理始めてみようかな」

「要にか？」

「……まあ、ね」

小南は思い出す。

『味がする』事を忘れていたと言つた要の顔を。

自分が今、どんな感情を抱いているのかすらわからないとでも言うかの様に、静かに伏せられた目を。

今も後ろで静かに寝息を立てているこいつは、きっと自分があの時悲しさや寂しさを感じていた事すら理解していないのだろう。

周りにいた小南達にすら伝わってきたのに。

——あたしがぎやふんと言わせてやる。

「いいな。何にすんだ?」

「ふふ、決まつてるでしょ」

小南はちらりと要を見たあと、花の咲くような笑顔で言つた。

「お子様はカレーが好きつて決まつてるのよ!」

熊谷友子の後悔

「見ない顔がきたね。いらつしやい」

新しく行動を許可された区画。

コロニー内で最も人通りの少ないエリアの、寂れた店内にそいつはいた。

軍服の上から白衣を着込んだそいつは、顔に乗せていた雑誌を落としながらボロボロのソファから体を起こした。

女だった。

寝ている間にズリ下がったゴーグルを額に戻し、瞼を擦りながら大きなあくびを一つ。

後ろで一つに纏められた、くすんだ銀髪がぼさぼさになっている。

「まあ、ゆっくりしていけよ」

——悪寒。

どうがん！　と。

朗らかな声と共に抜き放つた拳銃の弾丸が、首をひねつた要の頬を掠めた。

「やつぱここに来れるような奴には当たんないよなあ」「俺は可か、氣こぢる事をしたでしようが一

白衣の下に覗く軍服の襟には、煌びやかな金色の階級章。

本国の佐官だ。

本国の軍人が奴隸兵を殺すのはよく見かける光景だが、自分は少なくとも恨みを買う
ような事をした覚えはない。

そう思つて質問した要に返つてきた答えはあつけらかんとしたもので、

これ苦手なんだよなあ、と拳銃をくるくる回して遊ぶ少女の一言だけだつた。

「こうすると一見さんお断りの隠れた名店っぽさ感じるでしょ。え、そうでもない？」
「そ、そう……そうかな……ほんとに？　ああ、これ？　大丈夫、樹脂弾だから死はないよ」

「そうですか」

もはや口調を取り繕うのも面倒になつてきた。

なら別にいいか、と相槌をうつ要に、机にぶちまけられた高官専用の味付きレーシヨンの山からお気に入りの味を選びとつた少女は口を開いた。

「とりあえず奥来てくれよ。最近はココに来れる権限レベルの人達も皆死んじやつて退

屈だつたんだ。新顔が来てもすぐ死んじやうからさあ。君は少しは生き残つてくれよな！」

ほらほら、とを押されながら、要は少女の楽しそうな声に言いしれない悪寒を感じた。「パワーアップは景気良くやんなきやね。向こうの連中、最近はどんなトリガーを作つてんのか気になるなあ」



「…………」

空が白み始めたころ。

要は玉狹支部の自室のベッドで目を覚ました。

身体を起こし、目頭を揉みながらため息を一つ。

大抵の世の地獄を見てきた要をもつてして、最悪の目覚めである。

「いやな夢だ……」

珍しく顔を僅かに顰めながら吐き捨てる。

少なくとも進んで見たいものではなかつた。

アラームをセットしている午前5時まではまだ時間がある。

もう一度眠る気にはなれなかつた。

(……走るか)



「うわあ」

スコープ越しに広がる光景に日浦茜はそう漏らすのが精一杯だつた。

『うつ、く、ぐう……!』

けたたましい激突音とともに、熊谷の苦しげな呼吸が通信越しに伝わつてくる。
その視線の先には、1人の男。

「ふつ……!」

旋風、轟音。

空気を引き裂いて振るわれるレイガストが、最重量の名に恥じない激烈な威力を伴つ

て熊谷の構える孤月に叩きつけられる。

「ぐつ……！」

小南桐絵の『双月』を思わせる尋常ならざる一撃に僅かも足を踏ん張ることができず、熊谷は吹き飛ばされた。

(レイガストの重さが、デメリットになつてない……っ！)

地面をゴムボールのように跳ねながら転がつていく熊谷を追撃せんと要が一步踏み出した。

瞬間。

熊谷を守るように、立ち並ぶ住宅街の向こうから空に伸び、電子回路のように幾何学的な軌道を描きながら猛進する光芒。

——
変化弾。

「……」

視界を埋め尽くす勢いの弾幕を前にして、要は微塵の焦りも見せなかつた。

弾速重視に性能調整チュー二ングされているのだろう、躱す事を許さない凄まじい速度のそれを防ぐべく、目の前に身長を覆う大きさのシールド一枚を展開。

半透明の盾に夥しい光の群れがぶつかる——直前、その軌道を急激に変えた。

「……！」

バイバーイ

変化弾はその全てが、要を囮うように周囲を周りだした。

正に鳥籠と形容すべきそれは、捉えた獲物を決して逃さない。

(足止め……)

ただし、この鳥籠も永遠に続く訳では無い。

ボーダーの弾丸トリガーハンドルは決められた射程を過ぎると空気と反応して消滅してしまう。

要の足を止められるのもせいぜいが数秒だろう。

そして、それだけあれば彼女達には充分すぎた。

そこだ、という誰かの声を要は聞いた。



(取つた!)

それは確信だつた。

周囲を旋回し続け、一步でも動こうものなら全身を蜂の巣にする那須の『鳥籠』。

数秒待てば消えるそれだが、戦闘において数秒の硬直は命取りであり、いくらひよつこでもそこを見逃すほど彼女達は甘くなかった。

空に伸びる変化弾の第2波。一人を緊急脱出させるのには十分すぎる量である。体勢を立て直した熊谷が孤月を振る。煌めく白刃が急激に伸びる。

切つ先に近いほど斬れ味と速度の増す必殺の一閃『旋空』。

「——こ——つ！」

茜が^{トリガーハンドル}引き金を引く。狙い過たず放たれる『ライトニング』の一射。

『ライトニング』は狙撃トリガーにしては攻撃力のないモデルだが、その分弾速は折り紙付きだ。

その攻撃力の無さも今の状況ならば関係無い。

『ライトニング』は狙撃^{スナイパーハンドル}として成功させて当然の技術である。

弾幕が、剣閃が、閃光が迫る。

この状況ならばあの太刀川慶だろうと討ち取れる自信が茜にはあつた。

だが、この状況にあつて尚、スコープの奥の男は顔色を変えなかつた。

「——」

ありえない。

いや、ただ状況に思考が追いついていないだけだ。そうでなければここまで——

す、と。

バイパー
変化弾の大群が視界を横切るなか、要の目が此方を見た。

死ぬ。

「——ひつ」

茜がライトニングを取り落とした瞬間、広くなつた視界の中で、いくつかの事が連續して起こつたのが見えた。

要が何かを握るようにして腕を引く。

「——つ!?

がくん、と熊谷の体勢が崩れる。違和感を感じた孤月を見れば、空中にキラリと反射

（ワイヤー!? いつの間に……っ!）
した光。

困惑する熊谷の脳裏に浮かんだ一つの可能性。
(さつきの一撃……! あの一瞬で!? いや、それより距離を取ったのは誘うためか!!)

戦慄、などという言葉では生ぬるい。

自分達が必殺だと思っていた攻撃は、この男にとつて一手で状況をひっくり返す絶好の間隙だつたなんて！

熊谷の衝撃を知らぬとばかりに、要はシールドモードにしたレイガストを空中に置くように放る。

要の身体すれすれを旋回していた変化弾^{バイパー}は、どかかかつ、と悉くが堰き止められた。
もはや用は無いとばかりにレイガストをオフ^{解除}、迫り来る変化弾^{バイパー}の第2波を、両^{フルガード}防御で防ぐ。

そして、要は壊れた『鳥籠』の中、首を数cm傾けた。

「」

たつたそれだけで最速を誇るライトニングの弾丸は要の髪を掠めながら、道路に穴を穿つた。

（ああ……）

絶体絶命。少なくとも茜にはそうとしか思えない波状攻撃を事も無げに凌ぎながら。

(どうして……)

まずはお前だ、とばかりにこちらへ走り出す要を視界に収めて。

茜は思う。

(どうしてこうなったのぉおおおおおお!?)



ある日のこと。

その日、防衛任務が休みだつた那須玲は自室で読書に耽つていた。指に伝わる紙の質感と、ページをめくる小気味よい音が那須は好きだつた。こればかりは電子書籍では味わえない代物だ。

(そろそろ休憩しようかしら……)

いくら読書が好きとはいっても、流石にずっと字を眺めていては目が疲れる。

休憩がてらにコーヒーでも飲もうかとしたその時だつた。

「あら……くまちゃんかな」

携帯のメッセージアプリに着信が一つ。

病弱なこともあって、あまり友人が多い方ではない那須は親友かつチームメイトと送り主に当たりをつけるが、画面に表示された名前に『くまちゃん』の名前はなかつた。

「あ……！」

『すがかなめ』

それは、あまりに衝撃的な出会いをした最近できた友人。

退院してからすっかり音沙汰無くなつてしまつていたが、おそらく間違いない！

那須は珍しく焦つた様子でアプリを開いた。

すがかなめ	:	ぼ
すがかなめ	:	ぼだにはい
すがかなめ	:	た

すがかなめ　： ボーダーに入つたからこれからよろしく頼む 改めて礼がしたい
すがかなめ　： だそ うだ b y 林藤 匠



「助けてくれてありがとう」

ボーダー本部隊員食堂にて。

正午が近くなつてまばらに隊員たちの姿が見え始めるなか、隊長の招集により集まつた那須隊の面々（一名は突然具合が悪くなつたとかなんとか言つて不参加）を前に、要是開口一番そう告げた。

「ええ、どういたしまして」

「あたしはお見舞いしかしてませんけど、どういたしまして！」

「あんたお礼とか言えたのね……」

那須と日浦がにこやかに応じる横で、熊谷が目を瞬かせて驚いた。

初対面で何が望みだだの情報がどうだの言われた事を彼女はまだ忘れていない。

「林藤がこう言えと言った」

「何よそれ！」

「感謝しているのは本心だ」

「あ、いや、それならその……どういたしまして」

まるで仕方なく礼を言いに来た、と言わんばかりの態度に腰を浮かしかける熊谷だったが、要の言葉にすごすこと引き下がつて所在なさげに感謝を受け取る。どうにも熊谷は要の独特的のペースが苦手だった。

「ふふ、もう仲良しね、一人とも」

二人のやりとりを眺めていた那須が、くすくすと楽しそうに笑う。熊谷ははつとしてわわたと手を振り始めた。

「ちょっと、別にそんなんじゃ……」

「もう友だちか？」

「あ、あんたまで何言つてんの!?」

さらりと小恥ずかしい事を言つてのける要に困惑を隠せない。

いや、熊谷とて要が嫌いという訳では無いが、こうも正直に友達がどうのとか言われる事恥ずかしい。

「違うのか？」

(ああああ絶対落ち込んじゃつてる―――!!)

基本無表情で座つていると微動だにしないため、余計に、ほんの少しだけ伏し目がちに下がられた視線が熊谷の心を抉つた。

「……………と、友達でいいわよ」

「うん、そうか」

結局、数十秒の沈黙の末、落ち込んだ要とにこにこしている那須と茜という空気に耐えきれず熊谷は折れた。

私の親友と後輩がこわい。

ちなみに那須と茜に威圧したつもりは全くないが、それはそれとして笑顔は最古の威嚇手段だとかなんとか。

「ありがとう、クマチャン」

「それはやめろ」

「クマ＝チャン……？」

「何を勘違いしてるので知らないけど絶対違うから!!」

◆ ◆ ◆

そのクマチャンの声色は、初めて要に冷や汗をかかせた。

「話がある」

「え、何?」

林藤からのお小遣いを全部ぶち込んで食堂で昼食を摂つて主に熊谷をドン引きさせた後、要はこう切り出した。

「俺に、何かお前達に出来る事はないか」

ずっと悩んでいた。

自分を救つてくれた人達に返せるものを。

知られて困る事ではないどころか彼女達のためにやる事だ、本人達に聞いた方が早いだろう。

「え？ それってどういう……」

「礼がしたい」

「お礼ですか？」

「つて言われてもね……」

要の言葉に、三人は顔を見合させて言葉を濁す。

別に、感謝されたくない訳では無いが、それを目的に助けた訳でもない。

皆必死で、死にものぐいで、後先なんかまつたく考えてなかつた。

あれはただ、そういう出来事だつたのだ。

だから「あの時のお礼をさせてください」なんて言われても、おかしな話だが実感が

湧かない。

それは三人とも同じだつたようで、那須と茜が一緒に口を開く。

「大丈夫よ、そんな」

「そうですよ！」

「……いや、俺は」

だが、そんな二人を唸りながら見つめる者が一人。

言わずもがな、熊谷友子である。

(なんかこいつ義理堅そうだなー……) ういう奴つてお礼が要らないって言われるのが

一番堪えそうだし……）

熊谷はうーんうーんと唸りながら、那須と茜の悪意の無い、優しい棘によつて要が言葉を詰ませながら黙り込んでいくのを見ていた。

「お礼をしてもらう程の事なんて……」

「はい、一旦ストップ」

「くまちやん？」

なんだか知らず知らずのうちにすれ違い始めた両者を見るに見かねて、熊谷は待つたをかける。

「あんたねえ、命の恩人に『私がお前にした事はまったく価値のないものだ』って言われたらどうよ？」

「えっ、わ、私はそんなつもりじゃ」

「そういう風に聞こえちゃうかもつてこと。いいじyan、何かしてくれるんだから好きにさせとけば」

茜と二人して要に頭を下げて謝る姿を尻目に、熊谷は天啓を得たとばかりに突然立ち上がった。

積み上げられた皿がガチャガチャとうるさく震えるが気にしない。

「そうだ！ なら、あんたが辛くないならあたし達に戦いを教えてよ。あたし達もボー

ダードに入つたからには、人を守るために強くならなきやいけないんだ」

そして、熊谷の言葉をきつかけに要の地獄式ブートキャンプが始まる。

「わかった。シミュレーター室に行こう」

後の熊谷曰く「死ぬほどキツい」らしい。

思い出か悪夢か

まるで、お日さまのような子だつた。

「じゃあ、次はあつち！」

家が隣同士だつたから、いつも一緒に遊んだ。

幼馴染、というやつだ。

最初の友達だつた。

「ついてきて！」

公園で、近所の森で。

泥んこの顔に屈託のない笑顔を浮かべて、あの子は私の手を引っ張つた。
でも、私は泣き虫だつたから。

親から少しでも離れるのが怖くて。

それなのに、君は私が手を離したらすぐにどこかへ消えてしまいそうで。
だから、いつも私はあの子の手を掴んだまま引き止めたのだ。

「どうしたの？」

「いやだ……こわいよ」

知らない場所は怖いと。

君が一人で行っちゃうのもいやだと、そう駄々を捏ねて。

そんな私に、決まってあの子は不思議そうに、私の頭を母親がそうするように撫でて笑う。

「大丈夫、ぼくが守つてあげる！」

そうして、絶対だからね、と震える声で私は折れる。

そして君は楽しそうに前を歩き始める。

今からどんな事が起ころうとわくわくしながら、でもしっかりと私の手を握つて。

それが私たちのいつもの光景だつた。

——私は君がいなきや、外も出歩けないほど怖がりで。

——だから私は、君がいなくなつたあの日から、あんな惨劇があつたにも関わらず、この街を出た事がない。



ある日、私とあの子は喧嘩をした。

本当に些細な事だった。

私とあの子が順番で自分の好きな遊びと一緒にする、という私達だけのルールがあつた。

その日はあの子の好きな遊びをする番で、あの子はいつもの様に探検ごっこをしに私の手を握つて、「今日は川に行こうよ」と言つた。

だけど私は川が怖かった。

身体を軋ませ、鋭い痛みを残す水の冷たさ。

せせらぎの音は、当時の私にとつては少しでも足を取られれば、たちまち絡みついて、抗いようのない大きな力でどこかへと連れていかれそうな恐怖感を与えるものでしかなかつた。

だから私はルールを破つて、絵本が読みたいだの、おままでがしたいだの、確かにそんな事を言つたのだ。

当然彼は不服だつただろうし、私が駄々を捏ねて、小さな言い争いから、喧嘩にまで発展するのは当然の帰結と言えるだろう。

そして私は口にした。

今も私の胸に深々と突き刺さる棘となる言葉を。

「要くんなんて大つ嫌い！　もう一緒にいてあげない！」

「」

その時の彼の顔を、今でも忘れられない。

信じていた相手に後ろから刺されたような。

何を言つているのかわからない、といつたような顔をして。

そして数秒して、彼は小さく「そつか」、とだけ言つてから背を向けてとぼとぼと歩き

出した。

その様子に私は言いすぎてしまつたと思つたものの、幼い私は変な意地を張つて、家に帰つてしまつたのだ。

彼が帰つてきたら、明日ちゃんと謝ろう、謝つて仲直りしよう、と。
そう思つて。

それが最後だつた。

次の日、おじさんとおばさん——あの子の両親——が家に來た。
あの子のいない私の家に、「息子を迎えて來た」と。

私とあの子はお互の家に泊まるのも日常茶飯事だつたので、おじさんもおばさん
も、私の家にいるのだと思つたという。

彼が行つた川の橋の下で、彼の靴の片方が見つかつた。

警察に捜索願を出して一週間経つてもなおあの子は戻つてこなくて、ああ本当にどこ
か遠くへ行つてしまつたのだと、もう会えないのだと幼心に理解して、私は涙が枯れる
まで泣き続けた。

——ごめんなさい、ごめんなさい。

——こんな事なら手を離すんじやなかつた。

嫌わてもいいから、駄々を捏ね続けていれば良かつた。

どれだけ謝つても、その言葉が彼に届く事はない。

どれだけ願つても、もう彼が戻つてくる事はない。

後悔は涙を薪にして際限なく燃えて、いつまでも私の心を炙り続ける。



それからのおじさんとおばさんの姿は、痛々しくて見ていられなかつた。
初めは目に見えて憔悴していくた。

でもいつからか、二人ともけろりとした様子で笑うようになつたのだ。
一目見ただけで分かるような、ぼろぼろの笑顔を貼り付けて。

「大丈夫だよ」「きっとあの子は帰つてくる」「皆に迷惑をかける訳にはいかない」

そう言つて、いつもどこか遠い所を見つめる二人に、私はどうしようもなく胸を締め付けられた。

二人とも、手をこまねいてただ奇跡が起ころのを待つていた訳じやない。全力で、できる限りの事をしていた。

警察に捜索願を出すのは勿論、あの子の顔写真を載せた張り紙やビラを配つて、必死で自分たちの子供を探していた。でも現実は非情だ。

いつだつて不幸の下り坂がすっぱり途切れる事なんてない。

おじさんとおばさんがどれだけ手を尽くしても、警察の捜査以上の手がかりが見つかる事はなかつた。

まるで突然この世界から消えてしまつたかの様に、彼はあの川で完全に姿を消したのだ。

——毎晩毎晩、隣の家から聞こえてくる女性の啜り泣く声に、私はベッドの中で涙を堪えて蹲るしかできなかつた。

ある日、空が裂けた。

虫のような、獸のような、機械のような怪物が街になだれ込み、三門は瞬く間に地獄と化した。

日曜日の午前。

眠っている人の方が多いだろう時間に現れた『それら』は、朝日に微睡む私たちをいつも容易く躊躇した。

——早くから家族で買い物に出かけていた私は、どこからか聞こえる阿鼻叫喚を耳の隅で捉えながら、私たちの家の方角から昇る黒煙を見た。

背筋がすう、と急激に冷えていく感覚。
おじさん、おばさん。

走り出した。

気づいたら身体が動いていた。親の制止を振り切つて一心不乱に足を回す。あまりにも愚かな行動だ。——わかっている。でも、足は止まらなかつた。

『嘘だ』『現実？』

『本当に』『まさか』　『夢かも』『夢だよ』『こ　んなの』

『　おじさん』『おばさ

ん

『いやだ』『要く』『やめて』『待つて』

『出かけてるかも』『誘つておけば』『遅』

『誰か』

浮かんで、浮かんで、埋もれては浮かんでくるおぞましい予感。それを振り切る為に息も絶え絶えになりながら走る。

家が近づいてくる。

もう怪物達は通り過ぎたのか気配は無い。

なのになぜか収まらない胃を押し上げるような悪寒に喉が震える。

そんなの、分かりきつてる事だろうに——そんな心の声に蓋をする。

見慣れた景色、歩き慣れた住宅街。

変わったことといえば、家は崩れ、悲鳴が響き、そこかしこから煙が上っている事だろうか。

そして見た。

まるで紙細工のようにぺしやんこに崩れた家。

折り重なり、積み上げられた瓦礫の隙間から覗く血まみれの腕を。

私は半ば絶叫しながら駆け寄った。

瓦礫の山が崩れないように、上方から瓦礫を退かして、なんとか腕を引っ張り出す。

一目見て、手遅れだと解つた。

大怪我なんて、精々骨折程度しか見たことの無い私でも判る程の致命傷。今すぐ治療を始めれば助かるだろう。

でもこの状況で私に何が出来る?

女性だろうと、意識の無い大人を、たかだか子供の腕力で運べる物じゃない。だからって、何もしないまま見ていられる訳が無い。

落ちていた割れたガラスで上着を裂いて、おばさんの傷を縛る。

出血は止まらなかつた。赤く、紅く滲んでいく上着。

背負うというより、引き摺るような形でおばさんを運ぶ。

——大丈夫、大丈夫だよ、おばさん。きっと助かる。私がすぐ病院まで連れて行つてあげるからね。

意識の無い彼女に必死に語りかける。彼女の美しい黒髪が肩に流れ、そこから血があげるからね。

滴つていた。

——あ

絞り出すような声だった。

——おばさん!

振り向くと、彼女は焦点の合わない瞳で私を見ていた。

頭から流れた血が左眼のまぶたに溜まって固まり、赤黒くなっている。左眼はもう見えられないだろう。

そして彼女は言った。

かなめなの、と。

ひゅつ、と息を呑んだ。

彼女は続ける。

もう焦点の合わない瞳で。

——ごめんね、ごめんね……お母さん、一緒にいてあげられなくて違うよ。

なんでおばさんが謝るの？

私が悪いのに。

私がわがままじやなければ、怖がりじやなければ、要君に酷いことを言わなければ、あなた達が悲しい思いをせずに済んだのに。

——遙ちゃんね、ずっと……あなたのこと謝つてたわ。酷いこと言つちやつた、つてなんで、なんで私なんかが出てくるの？　おばさん、もつと言いたいことあるでしょ

？

毎日毎晩泣くくらい悲しんでたのに、なんで今私の事なの。

——ね……お願い、許してあげましょう？

やめてよ。

——あんなに仲良しだつたんだもの、きつとすぐ仲直りできるわ
私のせいなんだよ。

——あなたも、あの子にいい所見せたかつただけなのよね

だから何よ。

許してくれる訳が無い。
許す理由が無い。

震える私をよそに、「ゞ」ぽつ」と、急におばさんが激しく血を吐いた。

——おばさん！

小さく痙攣し始め、綺麗な桜色だつた唇から血の気が引いていく。

私がどれだけ繋りついても、どんどん心臓の鼓動が弱くなつていく。

ただ残り火、強い思いだけに身体が辛うじて反応しているような、そんな現象だつた。

——お願ひ、要……一度だけで、いいの

地面に寝かせた彼女は、震えながら、私に手を伸ばした。
どれだけ話しかけても、私は私だと言つても、もう聞こえていなかつた。

細い指が頬に触れる。

撫でられた肌に、血の赤が線を引いた。

——ただいまつて言つて

おばさんが、暗い瞳で燃える空を仰いで、大きく息を吐いた。
一瞬前まで頬を撫でていた手が、力なく落ちる。

もう、動く事は無かつた。



「おーい、先輩」

「ん…………」

肩を揺する手と、聞こえてくる声に私は目を覚ました。

身体を起こすと、デスクに広がった書類がはらりと空に踊る。

「ああ……寝ちゃってたんだ」

「珍しいつすね、綾辻先輩の居眠り」

「ふあ……私だつて居眠りくらいするよ」

欠伸を一つ。

横を見ると、子犬のように人懐っこい笑顔が魅力的な後輩の佐鳥くんがいる。いつの

間にか寝ていた私を起こしてくれたようだつた。

「代わりに書類書いといてあげようかと思つたんですけど、先輩もう書き終わつてるみたいなんで起こしちゃいました！」

「あ、本当？　ふふ、ありがとう」

仕事を終えて気が緩んだみたいだ。

「お安いご用ですよ！」なんて屈託なく笑う彼が羨ましい。

いつからだろう、彼みたいに心から笑えなくなつたのは。

「あ、もうこんな時間。暗くなる前にそろそろ帰ろうかな」

「お疲れ様でつす！」

「お先失礼します、じゃあまたね」

まだ残る眠気とあくびをかみ殺しながら作戦室を後にする。

今日も花を供えにいこう。



冬の冷気が肌を刺す。

吐き出した白い息が夕暮れのオレンジに溶けた。

途中、花屋で買った金蓋花の花束を抱えて、私は帰路を外れてある場所へ足を運んだ。

(暗くなる前で良かつたな)

公園に入ると、しんとした静謐が私を出迎えた。

厳かな雰囲気は、この場所だけ周囲から切り取られたかのような印象を与える。

道にそつて進むと、ずらりとならんだ慰霊碑と、その前に供えられた花束が現れた。

もう何度も訪れた場所だ。

花の置き場所も勿論覚えている。

そうして一つの慰靈碑が見えた所で、私は足を止めた。

(あ……)

先客がいたのだ。

男の人�큏んで、慰靈碑を撫でていた。

誰かに会いにきたのだろう。

撫でてゐる場所に刻まれた名前は、背に隠れて見えなかつた。黒のマフラーを巻いた彼は、後ろの私に気づいていたようで、直ぐに立ち上がつた。

「また来る」

最後に一言告げて、彼は私の方へ振り向いた。

「待たせた」

「い、いえ」

同年代か少し上くらいだろうか。

私を見下ろす顔は幼さを残しつつも精悍で、しかし無機質で鋭い瞳に私はたじろぐ。

「お前も家族を?」

私の持つ花束を見て、彼は尋ねた。

「いえ……家族は生きています」

くしゃりと、力のこもった手がラッピングに皺を作った。

「でも、同じくらい大切な人達でした」

私は今、普通の顔ができるいるだろうか。

声が震えそうだつた。

もう泣かないと決めたはず。

足に力を入れて、精一杯彼を見つめ返した。

「そうか……失礼な事を聞いた。ごめん」

「あ、いえ」

私の言葉に、彼は少し目を伏せて謝罪した。

突然の事に言葉を詰まらせる私をよそに、彼は用は終わつたとばかりに私の横を通り過ぎる。

「……」

不思議な印象の人だつた。

研ぎ澄まされた刀を思わせる冷たい眼光が、未だに脳裏に張り付いている。

ボーダーにいると色んな人に出会う。

いつも命を懸けて戦う彼らの事だから、眼の鋭い人にはもう慣れている。

でも、恐らく彼はもつとずっと——
まさか。

半ば無理やり思考を打ち切って、慰靈碑に金蓋花を供える。

暗く、静かに冷たい輝きを放つ慰靈碑は、さつきの彼の瞳を思わせた。

「……久しぶり。おばさん、おじさん」

二人に話しかけながら、私はさつきの彼を思い出していた。

あの頃の夢を見たからだろうか、あの子の黒髪と彼の黒髪が重なる。
黒いマフラーと瞳が印象的だった彼。

——あの子が生きていたら、あれくらいの身長だつたのだろうか、なんて。

そんな意味の無い事を考えて、私はまだあの子の事を引きずつていて自分に辟易する。

「会いたいなあ…………」

どれだけ後悔しても、私の言葉はもう届かない。
どれだけ願つても、もう彼らは戻つてこない。

——キミがいなくなつてから、私はこの街から出たことがない。

獵犬、学校に行く。

140 獵犬、学校に行く。

要が玉狹第一としてA級に昇格して数日。

玉狹支部のリビングのソファで雷神丸をつつきながら要はふと思つた。
暇だな、と。

支部に所属する隊員が本部へ出向するのは特別な事情により呼び出された時かランク戦くらいであり、本部でのチームランク戦に参加出来ない玉狹第一は、基本的に本部へ出向くことがあまりない。

入隊後2時間で玉狹第一のA級になつた要はもう本部の景色を忘れかけているし、本部は本部で「なんかヤバい新人が来たらしい」という都市伝説じみたウワサが広まつている。

仕方が無いので三門市を一周走つてこようかと考えていた要に、コーヒーを啜りながら林藤が話しかけた。

「そりやあ、学校行つてみるか？」



「はい、こちらが今日からこのクラスの一員になる須賀くんです」

「須賀要だ」

担任の初老の男性の言葉に、ザワ、と教室の空気に漣が広がった。

編入生というかなりのレアイベントなのだから無理もない。

突然朝の教室に現れた見知らぬ顔の同級生に、生徒達はさつそく口々にあれやこれやと囁き始める。

「へー、けつこうイケメンじやん」

「でもちよつと怖くない？」

「なんで中でマフラーしてんの？」

「寒がりなんじやね」

ひそひそと始まり、やがてざわざわと膨らんだそれは、担任の言葉に遮られた。

「はいはい、静かに。須賀くんに自己紹介してもらうからね」

それきり教室のざわめきはいつたん静まって、全員分、80近い目がいっせいに要を捉える。

「じゃあ須賀くん、自己紹介お願ひね」

「年齢16。体長1.73、重量72」

「……んん？」

生徒が自分の身体情報を「体長」だの「重量」だの言い出した事に怪訝な声を上げる担任。

実に真つ当な反応だった。

しかし残念、手遅れだ。

「所属は木崎隊、ポジションは攻撃手アタッカー。特技は斥候、陽動、遊撃、強襲、狙撃。作戦に於いて歩兵に要求されうる戦術的行動は全て修得している。問題はない」
大有りだった。

「爆弾発言を氣にすることなく——そもそも爆弾発言と自覚していない——続ける要。

「マフラーはリンドウに貰った」

ちなみにではあるが、林藤やミカエル、ゆり等玉豹の面々も、要にこつちの常識を教

えていない訳では無い。

むしろ要に関する事柄で最も力を入れている要素だろう。

とりわけ彼らが口を揃えて言うのは「（最悪記憶封印処理する羽目になるから）向こうの事を話すな」。

まさにこの場面がその言葉に真っ向から殴り掛かるが如くな状況に見えるが、しかし要にとつてはそうではなかつた。

自分に興味のない要が「特技」と称する戦闘行為はもはやそれそのものが要の人格形成、存在意義、価値観といったパーソナリティに根ざす自分の一部であり、つまりそれは彼にとつて一分の疑いもなく自己紹介だつた。

「セツコー？」

「狙撃つて、ええ……」

「ミリオタ？」

「リンドウつて誰」

「さあ……」

「不思議くんかな？」

「てんやわんやである。

「ボーダーに所属している」という一言さえあれば詳しくとはいかずとも、なんとなく

「ボーダーでの事を言つてゐるんだろうな」というニユアンスは伝わりそうなものだが、そんな予想の斜め上をぶつちぎつて遙か彼方の高校デビューをキメた要は見事天然不思議君としての立ち位置を確立する事になつたのだつた。

「ええと、須賀くんは長いこと外国にいたそうなので、皆さん彼が分からぬことがあつたら教えてあげてくださいね」

「指摘を無駄にする事のないよう最善を尽くすつもりだ」

「記者会見みたいな事言うね君」



朝のホームルームが終わつて小休憩時間。

「須賀一、部活とか入る？ 好きなスポーツは？」
当然といふか、物珍しそうにわらわらとクラスメイト達が集まつてくる。

部活。

昨日まで玉柏支部にて行われていた『勉強はともかく最低限高校での日常生活が送れるようになろう勉強会』のたつた一人の生徒として出席していた要は勿論この単語も抑えている。

「近接かく……ボクシングが得意だ」

危ない。

ゆりによる物騒な言葉を言い換える訓練がなければ致命傷だつたかもしねれない。要は少し安堵した。

そんな要の前で、質問してきた男子生徒が目を輝かせた。

「すげ。代表とか目指してんの？」

「代表……？　ああ、俺達は国の代表として戦っていた」

「ええ！　マジ！　どこの国！」

「知らなー」

「なんで????」

要の返答に男子生徒は肩を落としてしまった。

仕方がない、本当に知らないのだから。

「なんか得意なスタイルとかあるの？　技とか」

今度は男子生徒の横の活発そうな女子生徒が口を開いた。
要は少し考えた。

どんな形で敵を殺したのが多かつただろうか……。

「スタイル、という程のものでもないと思うが」

「うんうん」

「まず相手の癖をよく見る」

「ふむふむ」

「癖を見切つたら、フェイントを混ぜつつ距離を詰める」

「ほうほう」

「相手が俺の攻撃を意識してガードし始めたところで」

「おお！」

「近くの味方が殺す」

「殺す!? 味方!?!」

——いや、待て。

自分のトリガーを使つて木つ端微塵にした方が多いかも知れない。

要が先の言葉を訂正しようか迷つていると、女子生徒は顔を青くして話題を変えてしまつた。

「えっと……勉強は得意?」

「ああ、先日ひらがなを修得した」

「えつ」

「……じゃあ嫌いな科目は?」

「カタカナはまだ途中だ」

「ええ……」

「いやいや、そこは海外生活長いんだししょーがねーべ」

途中まで一緒に顔を青くしていた男子生徒が口を挟む。

どうやらなかなかに都合のいい解釈をしてくれているようだ。

その時、教室の喧騒を破るようにして、ガラガラと音を立てて教室のドアが開いた。荒々しい足取りで近づいてきた人物が、要の前に来て口を開いた。

「あ? 誰だテメエ」

「あっ、影浦君……」

女子生徒が焦ったようにその人物の名前を呼ぶ。

影浦と呼ばれたその男は猛獸のように鋭い視線で要を射抜く。

「今日転入してきた須賀君。海外から來たんだって」

「……そうかよ」

彼はぶつきらぼうにそう言うと、どつかと自分の席に腰を下ろし、それきり俯いて居眠りを初めてしまつた。

「影浦な、むっちゃ恐いけど案外悪い奴じやないんだぜ。この前教科書忘れたら見せてくれたし」

「そうか」

そつけない影浦を見て、先ほどの男子生徒が小声で話しかけてくる。
要の返答に彼はもう一度影浦を見て、

「……多分」

自信なさげに呴くのだつた。

◇

最近、ボーダーで突拍子もない噂が広まつてゐる。

直近の入隊式で入隊した新入りについての噂らしいのだが、曰く『殺し方がボーダー1エグい』だの『殺意が見える』だの『入隊当日にそいつと模擬戦した同期がトラウマになつてその日に辞めた』だの、あまりの言われようだ。

挙句の果てには『玉砕の小南から3本取つた』とか『入隊して1時間でA級に昇格した』といつたものまである。

最後の二つについては直ぐに嘘だと分かるようなモノがよく広まるものだと影浦は思つた。

ただまあ、噂とは得てしてそういうものだ。

なにせボーダー内の事情に極端に疎い影浦の耳にすら入つてくる程なのだから。

他の隊員間でどれだけ話題になつてているのかは何をか言わんやである。

変な奴といえば、と影浦は最近高校に転入してきた男を思い出した。

入学早々、色々な意味で生徒たちの注目を集めることの抜けたやり取りを交わしている。

「ハイ須賀、これ」

「……この鈍器は?」

「いや鈍器じゃないからね」

「そうなのか」

ちなみに今は体育の時間である。

手渡された野球のバット。

それをしげしげと見つめながら大真面目にアホみたいな事を言い出す転入生に、転入してすぐに話しかけてしまつたが故になし崩し的に介護係的なポジションになつてしまつた男子生徒は菩薩のような顔で突っ込んだ。

「で、誰を殴打すればいい?」

「いやだから鈍器じゃないからね」

珍しく（自分でもそう思う）出席した影浦は、学校指定のジャージを着て尚肌寒い冬の木枯らしに顔を顰めつつ、転入生の縁り広げるコントを眺めて、思わず呆れる。「あそこに立つてるアイツ、分かるか?」

「ああ」

「アイツがボールを投げてくるから、それをこれで打ち返すの」「成程、理解した」

「よつしや、じやあやんべ」

「で、誰を狙えばいい?」

「だから武器じやねえって言つてんだろ!!!!」

もうアイツぶん殴つてもいいんじやないだろうか。

影浦はぼんやりとそんな事を考えた。



影浦雅人はあまり人の名前を覚えない。

それは本人の性格もあるのだが、大部分は生まれ持った体質のせいだ。

『感情受信体質』のサイドエフェクトを持つ影浦は、他人が自分に向ける感情が解る。

これがどれだけ心身に大きな傷を与えるか、それはこのサイドエフェクトを持つ本人にしかわかるまい。

そうして、「心の痛み」に長くさらされてしまつた影浦は、人とあまり関わらなくなつた。いや、期待をしなくなつた。

ただ、そんな影浦にとつても、学校であれだけ目立てば少しは印象にも残る。

(確か、須賀だつたか)

世間知らずどころではないクラスメイトの事を思い出しながら、ボーダーの仮想戦闘ブースへ続く通路をだらだらと歩く。

(まあ、どうでもいいか)

自分には関係ない事だ。

クラスメイト以上の関係になることはあるまい。

そんなことを考えながらブースの広場に出ると、そこは妙なざわめきに包まれていた。

「ねえ、あれやばくなかった？」

「なんで見ないで狙撃避けられるんだよアイツ……」

小声で囁きあうC級隊員たち。

その視線の先にはブースから退室してきた数人の男女の姿がある。

「ふええ、私寿命10年縮みましたよお……！」

「手も足も出なかつたね……」

「あんたちよつと容赦とか手加減とか無いわけ？」

「戦闘において手加減をする理由が理解できない」

「そうだけどこれ一応トレーニングだから！」

3人の少女の隣で首を傾げる1人の男。

そいつを見て、影浦は思わず口が開いていた。

「須賀、お前ボーダー入つてたのか」

「かげうら、だつたか」

感情を感じさせない表情で須賀がこちらを見る。

「友達?」

「三門市立第一高等学校一年B組の隣の席だ」

「あんた学校行つてたんだ」

「須賀さんやつぱり年上だつたんですね!」

「敬語にした方がいいかしら」

女3人寄ればなんとやらと言うが、正に字のごとく、といった光景だろう。

きやいきやいと騒ぎ始めた3人の女子を見て、影浦は少し辟易とした。

……ただ、自他共に目つきが悪いと認めている影浦を見て、少しもチクチクとした感情を向けてこないのは意外だった。

「席を外した方がいいでしようか? ……ええと、影浦先輩」

「いや、それにや及ばねえよ。邪魔したな」

「あら、そうですか……」

淡い髪色のたおやかな雰囲気を漂わせる女子の提案を、ひらひらと手を振つて断り、その場を離れる。

クラスメイトが同僚だつた。

これはそれだけの話だ。

「私達はこれから食堂で休憩するけど、要く……先輩はどうします？」

「敬語はいやだ。好きに呼んでほしい。俺はまだ少しここで訓練する」

「ふふ、ありがとう。じゃあまた後でね」

ブースに入る直前、そんな会話が聞こえた。クソが。

「つたくよー、海外から越してきて早々女侍らせやがつて……」

そんなことをぼりぼりと頭を搔きつつ呟き、ブースに入る。

人を判断する時に『顔』という項目をほとんど考慮しない影浦だが、それはそれで女の子に囲まれている男を見ると、なんというか、「ケツ」と吐き捨てる気持になる。そういうお年頃なのだから仕方ない。

適当に自分と同じくらいのポイントの使い手を相手に選び、対戦申し込みを行う。

相手のトリガーはレイガスト。

あまり対戦経験のないトリガーだ。

そのまま相手の了承まで少し待つ。

「お、来たか」

視界が光に包まる。

転送が始まる合図だ。

——丁度いい機会だ、ぶつ潰してやる。

「…………あ？」

「…………ん、さつきぶりだな。よろしく頼む」

目の前には、件の女連れ野郎がいた。



それは、衝撃を通り過ぎて、もはや戦慄だつた。

——何だ、コイツ

空気を引き裂かんばかりに鋭利な軌道で振るわれる二振りのスコーピオン。
ボーダー最軽量を誇るその薄刃は、影浦本人の気性も相まって、いつそ悪魔的な荒々しさで対象に襲い掛かる。

「……」

その、全てを。

眉ひとつ僅かにも動かさず、まるで埃を払うように捌いていく目の前の男は一体何者なのか。

目まぐるしく閃くトリオンの刃の輝きとは裏腹に、落とし穴にでも嵌つたかの様に膠着する戦況。

火花散る剣戟の奥に、暗く冷たく、獲物を見据える蛇の様に、こちらの隙をじつとりと探る男の眼光に気づいたとき、影浦は死神に背筋を撓られたかのような恐怖を覚えた。

こいつは防戦一方だ。

事実『攻撃の感情』が刺さってこない。

このまま押し切れば殺せるはずだ。

だというのに、影浦の脳裏には正体不明の焦燥ばかりが募っていく。

「く、そツツ」

じわじわと足元から蛇の尾に絡め取られているような気持ち悪さを振り払う様に、左の剣でレイガストを受け止めつつ、右足をダンと強く踏み込んだ。

瞬間、右手から消えたスコーピオンが右足から地面を通り、要の喉元を狙つて飛び出

す。

モールクロード
もぐら爪。

しかし地中からの奇襲を、要は半歩身体をずらすだけで完全に躱す。

それを見届ける事なく、体内で枝分かれさせたスコープオンを腹、両膝、両肘から一斉に放出。

要は流れる様な動きで、トリオン体ならではの臂力で以て後方へ跳躍。伸縮する刃の範囲外へ脱出する。

それを見て、影浦は勝利を確信した。

「——くたばれツツ!!」

変型させていたスコープオンを元の二振りの短剣の形へ戻し、合成。

一つになつた巨大な刀を、ムチの様にしならせて振るう。

影浦が最近編み出したスコープオンを二つ繋げて使う荒技だ。

その一連の動作は、粗を残しながらも俊敏かつ迅速に行われた。

そこいらのB級隊員なら、いや、もしかするとA級隊員ですら何が起きたか理解すら出来ないまま首を飛ばされるだろう一閃。

それを空中にいる相手に放つたのだ。対処できる筈がない。

——その、影浦渾身の一撃を

「ん……」

ボツッ!! と空気を震わせる爆発音とともにレイガストからトライオンの爆風が放出、要の体が180度回転する。

上下が逆さになつた状態で、レイガストのブレードを伸長、地面に突き刺し逆立ち。そのまま棒高跳びの要領でジャンプ。

「な――――」

トライオンの光芒を引いて奔る刃は、要の頭髪を数本掠めて空を切つた。
曲芸じみた動きでスコーピオンを回避した要が着地。
ゆっくりとこちらを振り返る。

「……ツツ」

影浦には、それが死刑宣告に見えたとか。

◇

後日、教室にて。

「オイ、須賀ア」

「ん、影浦か」

「今日も付き合え」

「了解」

いつの間にか仲良くなっている二人の姿が目撃され、クラスメイトはコミュ障二人を
にこやかに見守った。

那須玲①

最近できた友達は、なんというかとても個性的だ。

普通にお喋りしている時は天然な所があつて面白いのだけれど、同時に、そういういた
些細な所からも彼の人生の苛烈さが伺えて少し、私が勝手に気まずくなつてしまふ事がある。

——そして、こういう時は全く別の星から来た宇宙人を相手にしているとさえ感じる時もある。

「スラスター起動^{オーン}」

シールドモードのレイガストがトリオンの噴出によつて加速。

前後左右と上から迫る光弾を全て打ち払い、そのままの勢いでブレードモードに変形しつつ発射された切つ先が一瞬で距離を潰し、私の胸に抵抗なく食い込み、内蔵された供給機^{急所}を破壊する。

「く、う……っ」

『トリオン供給機破損、緊急脱出』

視界が光に包まれ、一瞬の浮遊感の後に柔らかいベッドに投げ出される感覚。
『チーム戦終了。勝者、須賀隊』

3人のうちの最後の1人である私の離脱と同時に、模擬戦は終わりを告げた。

「はあ……」

また一撃も入らなかつた。

この前は片腕くらいは奪えていたけど、このところいつもこうだ。

緊急脱出する直前の彼の眼を思い出す。

「…………」

その静謐とは裏腹に、殺意だけを湛えたあの眼。

最近は慣れてきたけど、やっぱりまだちょっと恐い。

最初は無我夢中で、後の事なんて考えていないくて。

ただ、「わからない」と言つた彼に寄り添つてあげたかつた。
綺麗事と言われば確かにそうだろう。

きつかけの感情は同情と哀れみなのだから。

誰から——あるいは彼自身から「偽善者」の誇りを受けたとして、私は反論できな
いし、する気もない。

でも、それでいいと思つた。

友達になろうと言つた時、差し出した手をおずおずと、でも瞳に確かな希望と好奇心を滲ませて取つた彼の手の温かさを感じた時。

くまちやんたちと友達になれた時と同じような嬉しさがあつて。

誰になんと言われようと関係ないと、私がやりたいことと彼がやりたいことを一緒にしているんだと思つた。

友達は対等な関係だから、少しでも彼に近づきたいと思つた。

——甘かつた。

足下にも及ばないどころか、彼から伸びる影に手をかけることすらできなかつた。

強くなれば皆を守れると思う。

要くんと少しでも近い視点になれると思つたのだ。

たとえそれが気休めでも。

でも、彼は何かが変わつたように見えなかつた。

相変わらず、冷たく激しく滾る殺意にたじろぐ事しかできない。

彼は私を友達と思つてくれているのだろうか。

もし、そだとしても。

「…………」

私よりもっと、相応しい人がいるのではないだろうか。



最近、那須の様子が変わった。

要は個人戦フロアロビーのソファに腰掛け何をするでもなくそう思つた。

ここ1週間ほどの彼女は、以前までより明らかに要と話す事が少なくなつた。話すといつても主に訓練でしか話さないのだが、

「まだ続けるか？」

「ごめん、今日はその、もう帰ろうかな」

3、5本勝負だけやつて終わつたり。

『今日はやるのか』

『ごめんなさい、また今度にしましよう』

メッセージを送つても断られる事が増えた。

(いや、そうか。那須にも自分の用事があるだろう。そう変な事でもないな)

普通の人間がやれば割としつこくて気持ち悪いアプローチをしているがもちろん自

覚はない。むしろ相手の事情を慮るようになつただけ成長したとさえ言えるかもしけないのがなんとも言えない。

（今日はカレーだ。早めに帰ろう）

思考が切り替わる。

最近の楽しみになりつつある小南の料理当番に少しの期待を覚えつつ、玉狹支部に帰宅しようと立ち上がった要の耳に、雑談するB級隊員達の声が届いた。

「昨日まで3日くらい風邪でさー、めっちゃなまつててポイントくつそ下がつたんだけど。最悪」

「うわ、めっちゃ萎えるやつじやん……どんまい、俺はさつき50000超えたけど」「はあー!? 裏切り者！」

この時、要に電流走る。

（風邪……そうか、那須は身体が弱いらしい。このところは体調を崩していたのか）

バカは自分の考えを疑わない。

要の脳は戦闘時にフル回転するぶん、普段はかなり残念だというのは寝食を共にする玉狹支部の面々にとつては周知の事実である。

「……行くか」

思い立つたがなんとやら。

地形や建造物の構造・配置の把握は重要な能力だ。那須隊の隊室の場所は記憶している。

いざ、お見舞いである。



そういうわけで那須隊の部屋の前。

(たぶん) ほぼ全男性隊員の憧れの的である秘密の花園だが、この男にはそんな事を気にする感性も躊躇も存在しない。

ちなみに要、意外と「部屋に入る前にはノックする」というマナーは心得ている。
玉狹のマナー講師林藤ゆりの講義はきびしいのだ。

閑話休題。

そうしてノックしようと手を伸ばした要だが、その直前、要の手をかわすようにドアが開く。

「ん……」

自動ドアとはいえロックしていないのか、と不用心に眉をひそめかけた時、目の前に誰かが立っている事に気がついた。

猫背に黒い長髪の少女。

自爆機能でもついているのかと疑う程にガクガクと震える全身からは尋常ではない雰囲気が漂っている。

「お前は」

「オア。」

倒れた。

(…………俺か？ 俺だろうな)

むしろ他の理由を探す方が難しい。

倒れる寸前の彼女は「目をそらすにも体が動かない」といった様子で要を見て震えていた。

(トラウマか)

久しぶりに見る反応だ。

こうやつて発狂した味方を数えるのも億劫になるほど処理してきた。

用事があつたが仕方ない。

それ程切羽詰まつて いる訳でもなし、と少女を肩に担いで立ち上がる。

「医務室へ」

行くか、とつぶやきかけた要の第六感が知らせる鋭く距離を詰める気配と殺氣――！

「うちのオペレーターに何すんのよこの変態があああ!!」

背後から腰椎めがけて放たれただろう蹴り。

いい奇襲だ。

急所を一撃で仕留める意志を感じる。

だが声を出すのはダメだ、下手すぎる。

右肩に少女を担いだまま、要は驚異的なバランス感覚で横へ倒れ込むように回避。聞こえた声の角度、大きさから相手の身長を予測。

そちらの方すら見ずに左手で喉を鷙掴みにして壁に叩きつけた。

「クマチヤンか、何のつもりだ」

友人の顔を認識した要が手を放す。

熊谷は喉を押さえて咳き込みつつ、要に詰め寄った。

「けほつ……クマチヤンつて、言うな……何のつもりだはこっちのセリフよ！」

こつちのセリフ、とは何を意味するのか、流石に考えるまでもない。

「俺を見て倒れた彼女を医務室へ運ぼうとしていた」

「…………えつ」

まあ勘違いするのも無理はないだろう。

誰もいない廊下で少女を肩に担ぐ男、これを世間では事案という。



「さつきは本つ本当にごめん。反省してるわ」

「俺もだ、すまなかつた」

医務室で静かに寝息を立てる少女——志岐小夜子と言うらしい——の横で、お互いに謝り合う。

先の2人の行動はいずれも人を思う気持ちから出たものだ。

運が悪い事故としか言いようがない。

「この子、男の人気が苦手でさ。悪気がある訳じゃないから、あんまり怒らないでくれると

嬉しこうていうか」

「構わない」

苦手というレベルを超えている気がしたが、そこはそれ。

別に要に害がある訳でも、克服しなければいけない状況という訳でもない。逃げたいなら、そしてそれが許される環境ならば存分に逃げればいいのだ。

それはその当人にとって恥でも悪でもあらざるべきだ。

「で、あんたなんで急にうちのオペレータールームまで来たの？」

割とあっさりとしたふうに熊谷が話題を変えた。

こういったさばさばした所は好感が持てる。

「那須の事だ」

「玲の？」

さきほど志岐と出会った時に視界に入ってきた室内の様子だと、那須がいる様には見えなかつた。

やはり体調が悪いのかかもしれない。

要は有益な情報を求めて話し始めた。



「はあ……」

今日何回目のため息だろう。

たぶん数えていたらいたでまたため息をついてしまうだろうな、と思うくらいには繰り返している気がする。

病は気からとはよく言つたもので、最近の暗い気分を引きずつていたら体調まで悪くなつてしまつた。

両親は滅多に家にいない。

気楽で羨ましいと人に言われたこともあるが、それを嬉しいと思つたことはない。

ベッドから身体を起こして読書をしたり映画を観ることは嫌いじやない、けど1人だ。

そんな時、外から聞こえてくる楽しそうな声が羨ましくて、それを1人で聞いている事しか出来ないのが寂しくて。

「……退屈だわ」

こうして1人でいるしかできない事は久しぶりだ。

以前は我慢できたはずなのに、一度別の景色を知つてしまつた途端、こんなにも苦しい。

た。

「あ、くまちゃん」

沈んでいた気持ちが少し軽くなる。

1番の親友から来たメッセージは私の心を温かくしてくれる。

『玲一、遊び行つていい？ 消化にいいもの持つてくよ』

『ありがとう、待つてます、と…………ふふ』

メッセージを返信して、思わず笑みがこぼれる。

今は出られない訳じやないし、こうしてお見舞いに来てくれる友達もいる。不満なんてない。

そう、周りに不満なんてない。

もあるとしたら、それは私自身の――

ピロン。

『あ、言い忘れてたけど須賀もいるから』

「えつ」

えつ。
え？



「うつわあ」

熊谷は戦慄していた。

携帯をスクロールする度にその顔の引き攣りは深くなっていく。

「どうしたクマチヤン、俺は何か間違ったか」

「クマチヤン言うな。……いや、だつてこれはさあ……」

要が不思議そうに尋ねてくるが仕方ないだろうと思う。

『こちら』に来て数ヶ月とはいえる、たかが数ヶ月の要だ。

一般常識の欠如はまだまだあるだろうし、人間関係の距離を測りあぐねているのはあ

る程度当然だろうとも思う。

「玲、これ」

問題は。

「言わないで、くまちゃん…………」

所在なさげにベッドの上で正座で俯いている那須だ。

いくら親友だろうと、いや、親友だからこそ言わねばなるまい。

熊谷は借りた那須の携帯の画面を持ち主に見せながら、呆れたように口を開いた。
『今日はやるか』に『はい／いいえ』しか会話が無いってのはちょっとアレでしょ。業
務連絡じゃないんだから』

「うう……」

熊谷の言葉に那須はますます俯いてしまう。

少し言いすぎたかな。

いや、熊谷が持ってきて切つたりんごをしゃくしゃくつまんでいる。
もつと言つても良さそうだ。

『こいつと仲良くなるんだつて息巻いてたじやん』

「ただけど……」

「俺たちは仲良くなかったのか？」

「ややこしくなるからあんたは黙つてて」

「了解」

会話に滑り込んでくる要をしつしつ、と手で払う。

さきほど部隊のオペレーターについて同じことを言つておいて何だが、「悪気は無いから怒れない」というのはたちが悪い。

要を引つ込めた熊谷は、ふと思いつたかのようにニヤリと意地の悪い笑みを浮かべたかと思うと、わざと高い声で喋りはじめた。

『ならまず、私とお友達になりましょう？ 楽しいわよ、友達』

「わっ、わあああああ！」

要と出会つた時の那須の真似をし始めた熊谷と、それを必死に止める那須。

急に騒がしくなつた一室に、要は「こいつらは何をしているんだろう」と静かに首を傾げる。

『どつちか選べるなら楽しい方がいいでしょ？ 私と楽しい事しましょよ』

「く、くまちゃん！ くまちゃん！ もういい、もういいから！」

「あはは、ごめーん」

「もう……ところどころ悪意のある改変があつたよ」

顔を真つ赤にしながら大きく息を吐く那須に、熊谷は楽しげに目を細めた。

「えー？ こんな感じだつたと思うけどなあ」

「違うつたら！」

からかい続ける熊谷に那須は怒つた様子を装いつつも、滲む笑顔が隠しきれていなかつた。

いつの間にか那須の物憂げな表情は消え、姦しい少女達の笑い声が部屋に響いていた。



そうやつてくまちゃんと要くんがお見舞いしに来てくれたのが3日前。軽い熱はすっかり治つて、私はいつもの——といつても身体が弱いのは変わらないけど——調子を取り戻していた。

トリオン体なら外出して運動しても問題ない。
それはそれとして。

(なんでこうなつたんだろう……)

だからといって道行く人々に投げかけられる視線に、普段室内にばっかりいる私が慣れているはずなんてないわけで。

「仲良くなりたいんだつたら一緒に遊べばいいじゃん?」なんて、くまちゃんは気軽に言つてくれるものだ。

くまちゃんの男性経験は知らないけれど、私だつて近しい男の人なんてお父さんと奈良坂くんくらいの、小夜ちゃんに毛が生えた程度でしかないつていうのに。

しかも提案したくまちゃんは「あたしは柿崎先輩とこの前知り合つたばかりの歌川くん達とバスケするからバス」なんて酷すぎる。

くまちゃんの男性慣れに、私と小夜ちゃんは毎度の事ながら戦慄を覚えるしかない。

(でも、そんなにおかしかつたかしら……)

ううん、と唸りながら自分の格好を確認する。

マフラーにダッフルコート、下はプリーツスカート。

色合いは白系統を多めに、全体的にあまり模様は多くない。

……うん、無難なはず。大丈夫、たぶん。

トリオン体に防寒なんて必要ないけれど、気分で服を設定して着ている。

私だつて全然外に出ないけど、流石に冬に薄着を設定するほど世間知らずじやないの

だ。

いや、そういうのって世間知らずって呼んでいいのかな……。

そんな事をいろいろと考えて暫く待っていると、目的の人物が来た。

「要くん、こつち」

私の声に気づいた彼は、しつかりとした歩調で近づいてくる。
「10時50分着、お互い遅れてはいない。早いな、那須」

「時間は守らなくちゃね」

「その通りだ」

うんうんと頷く要くん。

そんな彼を見て、私はどういうわけか、思わず口をついて出でてしまった。

「ねえ、要くん」

「なんだ」

「待つた?」って聞いてみてくれない?」

「……? 了解した」

要くんは私の言葉に怪訝な顔をしつつも応じてくれる。

良かつた。このやり取りを知らないくて。

知っている人だつたら、流石にきつと恥ずかしくて言えないから。

「待つた？」

似合わない口調で、一字一句同じ言葉で聞いてくる。

そんな融通の利かなさに、それも要くんらしくて、自然と笑ってしまった。

「ふふ——いいえ、今来たところ。行きましょう、要くん」

密かに憧れていたやり取りを交わせて、私の足取りは軽い。

久々に外に出ると、色々な景色が違つて見える。

街の喧騒も静寂も、耳に届く音色はどれも私の興味を惹いてやまない。

少しベッドで寝ていた私でさえこうなのだ。

隣を歩く彼には、どれだけ世界は様変わりしているのだろう。
でも、焦る必要なんてない。

私たちと彼との距離も、彼とこの街との距離も。

海を彩る小波のように、寄せては返して、たまには凧いで。
そうやつて、少しづつ馴染んでくれればそれでいい。

「行きたい場所はある？　歩きながら決めましょう」

そう、焦る必要なんてないのだ。
友達でいることも。
強くなることも。

たぶん、初めてのデートも。

彼の異常／檻の記憶

人っ子一人いない、『閑静』と呼ぶにはあまりに人の気配がしない住宅街。その一角で、見るも無残な光景が繰り広げられていた。

「もう一度だ、クマチャン」

「クマ、チャン、言うな……！」

膝に手を付き、肩で息をする女子を無感情に見下ろす瞳。

常に相手の弱点を探る事を習慣づけられたそれに晒された熊谷の首筋は、ぞわりとした震えで声の主の脅威を伝える。

「ふーつ、はー……よしつ、来い！」

「開始」

瞬間。

ぼつ、とスナップを利かせた左拳が突き出される。

「ん、くつ」

辛うじて首を逸らして回避するも、息もつかせず繰り出される右拳。

それを同じく右腕で防ぐ。

よし、と思つたのも束の間。

引き戻されていなかつた左手が、熊谷の喉を鸞掴みにする。

「ぐうっ！」

鋭く、獣の牙のように喉にくい込む五指の感触。

痛みはないが、それだけにくい込んだ深さがわかつて怖気を煽ることこの上ない。

「1」

機械じみたトーンで告げられる死のカウント。

それを熊谷が認識したと同時に、要が指のくい込んだ首を捻る。

「かつ、は」

猛烈な違和感。

生身で「ここまでいつたら死ぬ」という角度寸前まで捻られてもトリオン体は活動限界にはならない。

ただ、それが今救いになつてゐるかどうかは、熊谷の苦悶の表情が全てを物語つていた。

「2」

再度告げられる自身の死亡。

そのまま背負い投げの要領で地面に叩きつけられる。

「んぐつ」

(まずいっ!)

休む暇などない。

熊谷は死にものぐるいで転がつた。

それとほぼ同時に、だごんつと熊谷の口があつた場所にかかと落としが突き刺さる。

(ひええ……)

思わず顔を青くしてぞつとする。

もし生身だつたら歯茎^{シナガ}こと歯が陥没して口内にめり込んでいた事だろう。

転がつたままの勢いで立ち上がつた熊谷を見て、要が構えを下ろした。

「一度組み合つて距離を取るまでに死んだのは2回。目覚ましい進歩だな」

「こつちは生きた心地がしないけどね……」

いまだに荒い息を抑えるように胸に手を置いて、熊谷が呟く。

要是その言葉に、まるで『よくわかつてゐるじゃないか』とでも言いたげな雰囲気を纏つて首肯した。

「そうだ、戦闘が始まれば自分は死んだものと思え。生きて帰るという目標を持つから生存の可能性と戦意に比例と反比例が生まれる。戦意の不安定は即ち油断や視野狭窄を生み、それが死に繋がる」

「…………」

「ぐくり、と唾を飲み込む音が聞こえた。

あつけらかんと『死』を語る要の目は、ついさつき熊谷に賞賛を送った時のそれと全く同じだった。

「少し状況が悪くなつただけで目に見えて動きに精彩を欠き死ぬ者、逆に僅かな戦況の好転で慢心して死ぬ者。たくさん見てきた。戦意は下げるな、上がるな」

こいつは、たぶんずつとこうだ。

朝食中のリビングに敵が突入して来たつて、こいつは顔色一つ変えずにフォークとバターナイフで相手を殺すだろう。

ソーセージと同じように相手の肉を突き刺し、バターを掬うように眼球を抉り取れる。

やつとわかつた。

こいつの異常性が。

10年戦つてきた事実が特殊なのではない。

飛び抜けた戦闘力が本質ではない。

一手の動きが生死を分ける戦いと、朝食のパンにバターを塗る行為は、こいつにとつて何ら変わりはないのだ。

『スイッチ』が無いとでも言うのだろうか。

冷や汗が出てくる。

動悸が止まらない。

もしかして、自分は思つたより遙かに危険な人物の目の前にいるのではないか？
いや、人物どころではない。

人の生き死にと他の全てを同じ温度で見つめる視線、あれではまるで――――
「んがああああああやめやめ！　あんたとあたしは友達！　そうなの!!　そうでしょ
！」

「そうちだが、突然どうした。医務室へ行くか？」

「あんたそれ他の人には絶対聞くんじやないわよ!!　挑発にしか聞こえないから!!」

「何故そうなる？　理解できない」

「んもう面倒臭い！」

あーやつぱダメ、こいつバカだわ！　バカ！　バカバカバカ！

熊谷は思考を放棄した。

「やっぱ違う顔もできるじゃん」

「んぐ、何の話だ？」

「なんでも。……飲み込んでから話しなさいよ。ほら、汁跳ねてるわよ」

ボーダー食堂にて。

熊谷は要の正面で頬杖を突きながら一生懸命にうどんを啜る少年を眺めていた。
さつきまでのどこを見ているのかわからない目ではない。

今、要の全神経はうどんに注がれており、その視線は一心不乱にどんぶりの中の艶やかな麺（香川産全粒粉）を追っている。

「ほら、箸を持つ手はグージやなくてチヨキでしょ。この前は出来てたじyan
「……まずいな、このところカレーづくしでスプーンしか使っていなかつたから忘れて
いた」

「失態だ……」とグーで握った箸を見て愕然とする要を見て熊谷は思つた。

——アホらし、怖がつてたのが馬鹿みたい。

「そういえば、さつきの訓練だけさ」

「なんだ」

「素手の訓練つて意味あるの？ 普通にトリガー持つて戦つた方が経験になるんじやない？」

純粹な疑問だった。

トリオン体は基本的にトリオンでしか傷つけられないが、それでもとりわけ『打撃』の効果は薄い。いくら同じトリオン体だからといって、打撃でトリオン体を破壊するためには『スラスター』でも使わないと不可能なのだ。

若干1名、要の所属する支部に『スラスター・パンチ』を行う隊員がいるが、特殊すぎて誰も真似しようとはしない。

噂では『弧月キック』なる高度なワザも存在するらしいが、これはまあデマだろう。
デマだよな……？

閑話休題。

そんな訳で、C級のように一つづつ武器を持つて斬り合うならともかく、徒手格闘訓練の有用性をいまいちよく分かっていない熊谷だった。

「意味はある」

うどんを食べ終えた要是コップの水を一口含んでから言つた。

「個人戦で10数回ほどアタッカーの武器、主に弧月を奪つてわかつた事だが」

「あんた何してんの」

「ボーダーの隊員は優れた訓練システム故に、トリガーの扱いそのものには手馴れているが、素手になると何も出来なくなる者が多い」

「はあ」

だつて武器を消してもう一回出せばいいし。

わざわざリーチが少なく攻撃力もない殴打で戦う必要は無いし、むしろ危険では、というのが熊谷の見解である。

「例えば、お前が相手の場合」

「箸で人を指すな。行儀が悪いわよ」

「ごめんなさい」

ともかく。

おもむろに要は熊谷の目を見つめる。

何の感情も読み取れない暗い瞳が熊谷の目を捉えた。

「その『武器を消してもう一度出す』間に、俺ならお前を五回殺せる」

ごくり、というつばを飲み込む音が誰のものだったのかは言うまでもあるまい。

つい十数秒前までうどんを熱心に追っていた微笑ましい雰囲気は嘘のように消え去り、得体の知れない寒気が熊谷の首筋を撫でる。

「その致命的な隙を埋めるために、徒手格闘は必須の技術だと考える。例えそれが数秒しか出番がないかもしれないものであつたとしてもだ」

「うん……それはそう、だよね」

——こいつは『その数秒』への備えが足りずに死んだ人たちを、數えきれないくらい見てきたんだろうな。

自然とそういう感想が浮かぶくらい、要の目には妥協や誇張の類はまつたく潜んでいなかつた。

「それに、スコーピオンや……おそらくレイガスト相手にも厳しいだろうが、弧月持ちのアタッカー相手には効果は高い。うまく決まれば反撃・防御・回避の猶予を与えない絶対的な隙を作れるからな」

断言。

それはきっと、そうやって敵を倒し——殺してきた実績、経験則からくる『事実』だつた。

「あたしなんかがこんなこと言つていいのかわかんないけどさ……なんか、あんたがずっと生き残つてこれた理由がちょっとわかつたかも」

「そうか。俺にはわからない」

「そつか。でもあんたはさ、そういうちつちやな……ううん、大きな『もしものため』を

見逃してこなかつたんだね」

「それはそうだろう。多くの場合死ぬのは一瞬で、一撃だ。武器を再構成するための数秒も、トリオン体を再構成するための一日も、俺からすればどちらも同じだ。訓練を怠る理由にはならない」

熊谷の目を見つめたまま、往時の苦痛など雀の涙ほども感じさせずに要是は呟く。そのシャツの袖口から、肉を抉られたような傷痕が覗いているのを熊谷は見た。果たしてそれは、その『数秒』か『一日』のどちらで負つたものなのだろうか。

そう考へると、こいつがいま目の前にいるのが奇跡のように思えてくる。

「そうだね……あんたにしては珍しく良いこと言うじやん」

「いや、受け売りだ」

「え……」

「どうした」

いきなり言葉を詰まらせた熊谷を見て要が尋ねる。

「いや、どんな人間関係があつたのかな、つて。いや、ごめん！　今のなし！　嫌なこと聞いたよね、ほんと、ごめん……」

当の熊谷はたどたどしく話し始めたかと思うと、「やつてしまつた」とでもいうような表情を浮かべて慌てて謝罪した。

別に、聞きたいのならば聞けばいいのに、何を遠慮する必要があるというのだろう。玉狹の面々や幹部たちに同じことを聞かれた時もそうだったが、要が向こうから来たことを知っている者たちは、向こうの話になると途端にこういう気まずそうな顔をするのが理解に苦しむ。

別に、お前たちがあの場所で苦しんだわけでもないというのに。

「構わないが、長くなるぞ」

こうして前置きするのもこつちに来て何回目だろうか。
そんなことを思いながら、要は記憶の棚を探り始めた。

◆

「はつ……は、あつ……！」

「弱いな、きみ」

心臓が暴れている。

這いつくばりながら空気を取り込もうと喘ぐ要の頭上から、そんな声が聞こえた。

嘲笑や落胆は一切含まれていない、ただ純粹に驚いたといった風な口調だつた。

「普通ぼくの所に来れるんだつたら生身とはいえもうちよつと出来ると思うんだけど……きみ、自分と同等かそれ以上の奴と戦つた事ないだろ」

少し首をかしげて考えていた彼女は、納得したような声で、そんなことを言い出した。
——まさか。

そんなはずはない。

自分より強い奴なんて腐るほど見てきた。

ただ、俺はそいつを見つけるのが早かつただけだ。

だから、そういう奴を見つけたら直ぐに逃げた。

帰投許可が出る前に作戦領域を離れると処理されるから、雑魚が多い場所に移つて誤魔化して、『強い奴』に攻撃が集中し始めたタイミングで便乗して、リスクを少なく戦つてきた。

「別に責めてる訳じやないよ。ただ、今までここに来た連中は強くなろうとしかしてなくて死んでつたからさあ」

「くく、と楽しそうな笑い声が漏れる。

「君のが正解だろ、どう考へても、極めて合理的だ」

まだ息の整わない喉を震わせながら彼女を見上げる。

「君みたいなのを待つてたんだ」

薄暗く、薬品の匂いが鼻をつく室内で、天井のライトの逆光に隠れた彼女の顔が、にんまりと悪魔の様な笑みを浮かべた気がした。



「ぼくの事は先生と呼んでくれたまえよ、きみ

くい、と。

「先生」を自称する女がそんな事を言いながら、ゴーグルを付けて眉間に押し上げる仕草をした。かつこいいと思つてゐるのかな。

「はい、先生」

「わはは！ 素直だなー！」

機械油がところどころを黒く汚した表情を破顔させて、『先生』はそう言つた。

言葉通りにそう呼ぶと、彼女はますます機嫌が良さそうに、おお、と驚く。

「まあなんでもいんだよな、名前とか。ぼくも自分のことよくわかんないし」

からからと笑う彼女は、クソマズいと有名らしいレーシヨンの包装紙を「やらねーぞ」と釘を刺して開けながら、話題を変えた。

「で、ぼくは今しがたきみをトリガーを使つた戦いでボコして、生身同士でもボコボコのボコにした訳だけど」

「…………」

先程の苦い記憶が蘇る。

相手の実力が高いと見るや脱兎のごとく逃げてきた要には、トリオン体を破壊寸前まで追い込まれるという体験が初めてだつた。

「まずトリガーネ。試作型とはいえ最新なだけあつて性能はバリバリだね。でも捻りがないでなくておもんないから3点」

「はあ」

それを俺に言われても。

要はそう思つたが口には出さない。

何が琴線に触れて殺されるかわからないのだ。

迂闊な事は言わないのが賢明である。

この前は穏やかそうな女性の奴隸が士官のシャツの裾がズボンから出ているのを教

えて射殺されていた。恥をかかされたと思つたのかもしれない。

要は殺された女性を哀れんだ。

殺された事にではない。

そんな下らない親切心を持ち、かつそれを己の自己満足のために口に出してしまった事を、だ。

ここでは——少なくとも要たちにとつては——『情』というものはびた一文の得にもならない、と要是思つてゐる。

事実その余計な感情のせいでいらぬ行動を起こし彼女は死んだ。

例は極端だがそういうことなのだ。

「100点にするにはどうすればいいかって？　ぼくにやらせればいいんだよ」

「はあ」

聞いていないしどうでもいい。こいつの話面倒だな。

空返事の要をよそに、先生の饒舌は止まらなかつた。

「どうわけで改造するからトリガー見せて」

「はあ……は？」

ぴしりと固まる。

割と今のトリガーに慣れているのであまりやりたくないが、士官相手に断るという

選択肢はそもそも無い。

「大丈夫大丈夫、失敗したらぼくが作ったやつあげるし。かつこいいぞ！ 光るし喋るし効果音まで鳴っちゃうんだ！」

行動範囲拡張許可が降りたからといって、こんな所に来るんじやなかつた。要是強くそう思つた。



「いつか絶対、自分よりずっと強い奴と正面切つて戦わなきやいけない時が来る」

調整が終わつて、ベッドに寝そべる要の枕元に腰かけた彼女が、クソマズいレーショ
ンを煮詰めて作った悍ましい色の液体を飲みながら、さつきとは打つて変わつて静かに告げる。

その瞳に、口調に、何か得体の知れない薄ら寒さを感じた要是息を呑んだ。
「きみにちよつかいを出したのは気まぐれ。でもその生き汚なさは使えると思つたん
だ」

つぱ、と水音を立ててストローを口から離した先生が、それをじつと見つめながら話を続ける。

「でもまあ言われないでもわかるだろうけど、きみはこのままじや死ぬよ」
「……」

「いくらきみが強くたつて、戦い続ける以上一度も負けないなんてことはありえない。さつきだつてぼくにコテンパンにされたる。きみはぼくの服に埃ひとつ付けられなかつた」

それは、確信に満ちた言葉だつた。

何か、常識的な観点からくる推論とは全く異なる根拠を持つてゐるかのようだ。

「疲れたろ。帰檻時刻までにはきみの独房部屋に送つてやるから、今は寝てなさい」

プシユ、と首元で音が聞こえた。一瞬の痛みの後に、何か冷たい物が首の中に流れ込んでくる感覺。そのどこか心地よい感覺を最後に、要は目蓋を重く閉ざした。



『甲型急7—21段17番に通達、起床時間です。繰り返します、起床時間です』
柔らかな口調の声が独房に響き渡る。

精巧に人間の女性の声を真似ているが、隠しきれない空虚さが滲むこの音が要は嫌いだつた。

ベッドから起き上ると同時に、要はぼんやりと意識を失う前の事を思い出した。

(俺は……そうだ、あの時)

『先生』と名乗る謎の女に半ば無理やりトリガーを改造され眠らされたのだ。

要がそこまで思い出した時、その思考を断ち切るように再びアナウンスが発せられる。

『おめでとうございます。貴方は本日付で所属部隊を異動になります』

「……どういう」

事だ、と言おうとして止まる。

思い当たる節なんて一つしかない。

『つきましては、部隊長からのメッセージをゞ確認下さい』

要の混乱など知ったことかとでも言うように、音声はそこで一旦途切れ、つい最近聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『やほ、これを聞いてるつて事はぼくの申請が受理されたつて事だね。とりあえずきみにはその、ぼくが改造したトリガーのデータ収集をしてもらいます。改造前の使用感を崩さないようにしてるので、そういう使いづらいつてことはないんじやないかな。ぼく

が改造したんだから強いよな？ 強いって言えよオイ……！ 自信なくしちゃうだろ

……！』

ふざけた口調で告げられる命令。

こういつた無茶な要求はもう慣れている。

士官どもはこういう奴らだと納得もしている。

だが、だからといって易々と受け入れられるかと言えば、それはまた別の話だ。まあ、こちらには最初から拒否権なんてものは存在しないのがいやなところだ。

『この要望を通すのにどれだけ苦労したことか。めんどくさいんだぞ、こういうの』何故、とは聞かない。意味が無いから。

ついでに言うと興味も無かつた。

あとちよつとムカついていた。

「俺は何をすれば？」

意識するのは何時だつてそのことだ。

逆らうから傷つく。

だつたら、やれと言われたことにすぐ頷けばいい。

頭を垂れ、傳き、犬のように返事をして命令を実行するのだ。

そうすれば死なずにすむかもしねない。

そしてふと思い出した、この音声が録音だという事に。

またあそこに行かなければならぬのか、と思つたところで、録音の中の先生が続けて話しかけ始めた。

『今頃きみはこう思つているだろうね。『で、俺はなにをすればいい?』って。従順だねえ』

(…………得体の知れない女だ)

『得体の知れないヤツだつて思つた? それはむしろぼくが知りたいんだよなあ』

「…………」

独り言の多い奴だ。

『独り言の多いヤツだつておも――』

要はインカムをひつたくりメッセージを中斷した。



その国は資源にあふれ、その高い技術力は近界においても非常に高いレベルにあつ

た。

しかし不運な事に多数の国の領域と重なる軌道を描くその星は、多くの国家に攻め込まれることとなつた。

その国を暗黒の海から見下ろしながら虎視眈々と好機を伺う複数の遠征艇。

その一つが、一夜にして血の海に沈んだ。

『やつて貰うこと？　今までと変わらないよ。命令を聞くだけ。送り迎えは任せな。遊び相手はたくさんいるから、ぼくが迎えに行くまで退屈はしないだろ』

願いが叶う罰

近界での出来事を一通り話し終えた要は、話が進むにつれ深刻そうな面持ちになつていき、最後の方は普段に似合わないどんよりとした空気を纏っていた熊谷の背を見送った。

「難儀な性格だな」

あいも変わらず自分が経験したわけでもないのに顔を青くしているのには理解が及ばないが、そこはそれ。

要の半生をどう受け取るか、どういった感情、感想を抱くかは要の知るところではない。

好きに受け取ればいい。

(時間が余ったな)

今日は特に予定も無いし、門限の6時まではまだかなりある。

そうして要は食事の息抜きに模擬戦を行うため、再びランク戦フロアへと足を運ん

だ。



「そういえば、桐絵から聞いたんだが……というか俺と充も見たんだが」
会話のきつかけは、隊室にてデスクワーク中に嵐山准が発した言葉だった。
「はあ、なんでしょう？」

デスクに広がった書類をまとめて、トントンと叩いて揃えながら綾辻は返した。

嵐山の率いるA級部隊嵐山隊は、その『ボーダーの顔となる部隊』という成り立ちからして他の部隊よりも圧倒的に――主に広報、メディア関係――仕事が多い。

もちろんその分の報酬は出るのだが、こういった事務作業に関してあまり眞面目とは言い難いこの隊の狙撃手などは、しょっちゅうひいひい言いながらこなしていたりする。

閑話休題。

「この間入隊した新人に、桐絵の部隊に入つた隊員がいるんだ。

まあ玉狹支部への所属で入隊したらしいから、当然といえば当然なんだが」

「玉狹第一に、ですか？」

思わず懷疑的な声を出してしまつた綾辻を責めることはできないだろう。

現アタツカーランク2位（最近二刀流の顎髷に抜かされた。本人はノーカンと言っている）である嵐山の従姉妹の小南桐絵が所属する玉狹第一は、チームランク戦に参加しておらず順位のついていない番外でこそあるものの、他のA級隊員達に聞けば口を揃えて「最強」と称するボーダー随一の部隊である。

入隊して間もないこの短期間にA級部隊へ所属するとは、間違いくる史上最速の昇格だろう。

加えて、B級までは自力で個人戦で勝利してポイントを稼がなければならぬ筈であるから、当然、それも既にクリアしているのだろう。

綾辻は作業中の嵐山にコーヒーや淹れつつ、その隊員へ「凄いなあ」といつたぼんやりとした感想を抱いた。

「それは異例ですね……しかし、大丈夫なのでしようか？」 桐絵ちゃんの隊はランク戦に参加していませんし、いきなりA級部隊というのは……」

「当然、しばらくは以前に比べて連携がぎこちなくなつたり意思疎通に粗が出たりはす

るだろうな。だが、隊員が二人から三人へ増える事で広がる戦術の幅はそれを補つて余りあるだろう」

阿吽の呼吸のコンビネーションによる戦闘を得意とする隊の指揮官だからか、こういった話をする時の嵐山の表情は活き活きとしている。

「それに、玉泊第一に入るならその辺もすぐに修正できるだろう。派手で豪快な戦法に目が行きがちだが、それも各々がお互いの役割や連携を理解していなければできない戦い方だ。桐絵……はともかく、レイジさんの教えがあればすぐにでも化けるぞ……。ただそれにしてもあるの動きは才能だけでどうにかなるようには……いや、考えすぎか……」

さつきの表情から一転、今度は考え込むように言葉がぶつ切りになつていく。

普段は雑談に興じていようと仕事の手は休めない嵐山だが、彼の持つペンも今は静かに紙の上に寝ているばかりだ。

「ふふ、とても有望なんですね。どんな人なんですか？」

戦術への考察を懸命に膨らませる嵐山を微笑ましげに見つめながら綾辻が尋ねる。

嵐山はコーヒーを一口飲んで言つた。

「ん。ああ、須賀君というんだが」



「……はあ」

意図しないため息。

基地内の通路をすれ違つた隊員に心配そうな顔をされたのが申し訳なくて、早足でそそくさと歩き去る。

ため息は幸せが逃げるだの何だの言われているが、私の幸せなんてとつくの昔に壊れている。

他ならぬ私が壊したのだ。

別に、隊の皆や友達、家族といふ事が辛い訳じやない。

私には恵まれすぎているくらいだ——本当に。

でもそれだけに、彼らといて幸せを感じれば感じる程、ふと「私がここにいていいのか?」という文言が、温まりかけた私の心に冷水を浴びせてくる。

私の幸せの入れ物には大きな穴が空いている。

10年前に空いたその穴は、2年前のあの日にもう取り返しのつかない程に広がった。

くしゃり、とこわばつた指が抱える書類に皺を寄せる。

「須賀さん、かあ」

同姓の別人だろう。

そんな事はわかっている。

でももし、という考えはきっと本人に会うまで消えないだろう。我ながら見苦しい女だ。そしてその淡い期待が打ち碎かれる未来もわかっている。

(なんで、よりもよつて『須賀』なの……)

もはや神さまが「忘れさせてやるものか」とでも言つているかのようだ。

この偶然を私は恨めしく思いつつも、同時にどこか「都合のいい罰を与えてくれてありがとう」なんて、度し難い事を考えていた。

「……行かなきや」

なんでもいいから声に出して、無理やり思考を切り替える。

——メディア対策室への書類を届けに行く途中、通りがかつたのはランク戦フロアだった。



「クツソが、テメエ硬すぎんだよ！」

「そうか。良かつた」

「あ、ア、!?」

ランク戦フロアに入つてすぐ、耳に入つてきたのはそんなやり取りだつた。

喧騒の中でもひときわ目立つ彼らは、通路に近いソファに座りながら雑談（？）に興じていた。

大声につられてそちらの方を見ると、ミリタリージャケットに袖を通したボサボサ髪の少年と玉狹仕様の黒いC級隊服の少年が話している。

「つか何でお前まだC級の戦闘服なんだよ」

「変えろとは言われなかつた。必要ならばそうする」

「いや必要つつか普通はB級のに変わつてはなんだよ」

「俺は初日で昇格したからその辺りでシステムに齟齬が発生しているのかもしねえい。

リンドウも初日での昇格は前例が無いと言っていた

「たりめーだろ。ンな漫画みてーな野郎がホイホイいてたまるか」「戦闘に支障は無いから問題は無い」

「まあお前がいいならいいけどよ……」

（あれ、あの人、どこかで……）
ズーコー、とストローでドリンクを飲んでる彼は妙な貫禄を感じさせた。

彼の凧いだ水面のように静かな目と漂う鋭い雰囲気を、私はつい最近どこかで感じた
気がする。

「何か用か?」

「あつ、す、すみません! なんでもないんです!」

無意識に立ち止まつたまま不躾な視線を送つてしまつていたようで、慌てて謝る。
きつと気のせいだろうと言い聞かせて、すぐにその場を離れた。

「なんだあ? また女か?」

「あいつは……」



それからは、ランク戦フロアを通ると必ずと言つていゝ程彼を見かけた。まるで「戦つていないと落ち着かない」とでも言うように、彼はいつもランク戦フロアのソファに座っている。

なんでこんなに見かけるのにフロアで中継されている画面の中に彼の戦う姿がないのかな、なんて思つたりもしたけど。

それがまさか、『だいたい秒殺で終わるから待ち時間の方が長い』なんて、この時の私は夢にも思つていなかつたけど。

閑話休題。

ランク戦フロアを横切るまでの10数秒。

いつものソファに目を向けると、その日は珍しく、そこに彼の姿は無かつた。
(いない日もあるんだ)

そんな当然の事を考えながらふと中継画面に目を移す。

(あ)

『影浦ダウン』

告げられるアナウンス。

画面の中では、彼があのボサボサ髪の少年の首を刎ねていた。

いい動きだ。

少し見ただけでそう思つた。

私は戦闘員ではないが、それでもA級部隊のオペレーターとして数々の戦闘を補佐し、俯瞰してきた。

『慣れている団』とそうでない団の動きの違いくらいは一目で判る。

彼の動きは、敵に損傷を与えるという一点にのみ最適化され、無駄が削ぎ落とされている。

初めて見る彼の戦闘に、また思わず足が止まっていたが、そんなことは気にならなかつた。

(そういえば、名前を知らなかつたな)

ふと、そんな考えが頭をよぎる。

理由としては興味本位、まったくこれだけである。

今後任務等で関わりがあるかもしれないし、覚えておいて損はないという考えも無いではなかつたが、全体の1割も満たすまい。

視線をついと横に動かす。

それだけで中継モニタの横に表示された対戦する両者の苗字が目に入った。

影浦	?	○	○	2
須賀	○	?	○	????????
	○	○	○	○
	○	○	○	8

「」

自分でも、よく声を上げずに済んだと思う。

冷静に考えたらあの子の筈はないけど、いきなりこの苗字を見るとびっくりする。
(あの人気が須賀さんだつたんだ)

奇妙な縁というか、なんというか。

……でも、まだ消えないこのもやもやとした気分は何なんだろう?

そんな事を考へてゐるうちに、対戦を終えた両者がいつものソファに戻つてきた。
「スコープオンの変形がまだ遅い。シールドとレイガストで十分対応できるレベルだ」
「うるせえ、その内抜いてやる」

「受けに回るな、強みを活かせ。今のお前は防御をスコーキオンとする悪い癖がある。銃手にはいい的だ。咄嗟の防御をしつかりとシールドとする意識とスコーキオンを繋げるあの技の精度を高めれば、格段に安定感が増すはずだ」

ボサボサ髪の少年の改善点を挙げる彼の分析力は凄まじかった。
10本で完璧に相手の癖を見抜いたらしく、事実3本目の勝負からは一方的な展開だつた。

「……オイ、もう10本付き合え」

「今日はこれで終わりと言つていなかつたか？」

「なら5本でいい。今お前が言つたのを忘れねえうちに試してえんだよ」

「了解」

不思議な組み合わせの二人組は、もう一度席を立つてブースへ向かう。行つたりきた
りと忙しいなと思いつつ、二人の背を見送つた。

「……いけない、急がなくちゃ」

ついつい最近の癖で立ち止まつてしまつた。

早くメディア対策室へ書類を届けなければ。

——そう、これはただ偶然あの子と同じ苗字の人だつただけ。

そう自分に言い聞かせて、私は今日もランク戦フロアを通り過ぎる。

きつと、いつかこうなる事は決まっていたのだ。

私がいて、あの子が消えて、あの子の両親が死んで、そして今彼がいる。

歯車は全て揃いすぎる程に揃っていて、あとはほんの小さなきつかけでそれは動き出す。

◆
「あ……」
◆

ばつたりと、ランク戦フロアへ向かうであろう彼と、その先のメディア対策室へ向かう私は、その途中の通路で鉢合わせた。

知り合いというほど深い関係ではないものの、お互い顔を知つていて相手を認識しているだけに、少なくとも私に無視する度胸はなかつた。

「こんにちは、今日もランク戦ですか？」

「こんにちは。 そうだ」

顔見知りだけあつて、会話の取つ掛かりには苦労しない。

相槌をうつ彼と一緒に、自然とランク戦フロアへと歩いていく。

「私、嵐山隊のオペレーターをしている綾辻遙といいます」

「あやつじ……」

「任務でご一緒する時はよろしくお願ひしますね、須賀さん」

まだトリオン体に換装していないのか、季節外れの黒いマフラーを巻いた彼は目を瞬かせた。

「なぜ俺の名前を？」

「私の隊は入隊式の指導をしているので、新入隊員の事は自然と耳に入つてくるんです よ」

「なるほど」

須賀さんが合点がいったとばかりに頷く。

たどり着いたランク戦フロアはいつも通り、混雑というほど多くはなく、閑散というほど少ないわけでもないくらいの人数が研鑽を重ねていた。

雑踏にまぎれて、須賀さんがぼつりとつぶやく。

「そうだ、お前に言うことがあった」

「え？」

何を、と聞く暇もなく須賀さんの鋭い視線がこちらを見下ろした。

「お前とは、三門公園の慰霊碑で会っている」

「…………あ」

思い出そう、そう考える前に、その記憶は鮮明に蘇った。

——お前も家族を？

静かな公園の石畳に跪く、大きくて、なのにどうしようもなく小さな背中。視線はきつく鋭いのに、穏やかな雰囲気を纏う彼の姿を。

普段ならば気にもとめない他人との一瞬の会話。

だけどこんなにも印象的な出来事を、なんで今まで忘れていたのだろうか。

(……………あれ?)

彼に対する既視感の正体がわかつたと同時に、今度は別の考えが頭をよぎる。それは、有り得ない可能性だつた。

「」

須賀さん。

嵐山隊長は私と同じくらいの年だと言つていた。

彼と出会つた時の会話を、私は覚えている。

刃物のような鋭い視線に似合わない穏やかな声音で、彼は私に、「お前も家族を失つたのか」と聞いた。

お前も。

彼はきっと、家族を2年前の大規模侵攻で失つているのだろう。

もしかして。

この言葉が脳裏に浮かんだ時、私が抱いた感情は、涙を零す程の歓喜でも、胸を撫で下ろす程の安堵でもなかつた。

心臓を驚撃みにされるような。

首に巻いた荒縄がゆつくりと締められていくような。

私の胸中を占めるのは、ただそんな狂おしい程の恐怖だつた。

いつの間にか冷や汗が噴き出し、心臓が暴れ出す。

唾を飲み込んだ喉がごくりと音を立てて上下し、肺が酸素を求めて呼吸が荒ぶる。

「あ、……」

「…………」

彼を見る。彼はただ、感情の読み取れない、深い海のような黒を宿した瞳で私を見下ろすばかりだつた。

「あの、須賀、さん」

「なんだ」

わかっている。

こんな事は有り得ない。

あの子が生きて目の前にいる、なんて、そんな虫のいい話はない。

名前を聞くだけ。

たつた1回、彼の名前を聞かせてくれれば、ちゃんと諦めは付くだろう。

「名前を、教えていただけませんか？ 下です。

下の、名前」

でも、もし――

もし、なんだ?

そのもしがあつたなら、私は一体どうするつもりなのだろう。
彼を見捨てて、突き放して。

肉親を目の前で見殺しにして。
合わせる顔なんて無いというのに。

謝る?

『酷いこと言つてごめんね。

あなたのお父さんとお母さんを見殺しにしてごめんね』と。
そうやつて私はあの日の出来事から解放されるのだろうか。
私は……

「須賀 要だ。これからよろしく頼む」



「提出の書類は以上ですね。では、私はこれで失礼します」

「ああ……綾辻くん、大丈夫かね？　顔色が悪そうに見えるが」

「ありがとうございます、根付さん。大丈夫ですよ、健康には気を使っているので」「そうか……具合が悪ければすぐに医務室へ行きましたよ」

「はい。　では」

広報の事務仕事を終えてメディア対策室を後にする。

今日はもう特に仕事も無いので、あとは家に帰るだけだ。

(ああ、お花、買っていかなくちゃ)

お供え物は大事だ。

あの悲劇を忘れない為にも、彼らの事を忘れない為にも。

『出身は三門だ。最近まで親戚の都合で海外にいたが』
結論から言えば。

もしかしては、現実だった。

『年齢は16だ』

ずっと、ずっと、こうならないかなと思つてきた。

あの時ああしていれば、あの時あんな事をしなければ。
そのもしもが、目の前にこれ以上ない形で現れた。

喜ぶべきことだ。喜ぶべきはずだ。

なのに私はあの時、「よかつた」とさえ思わなかつた。

私は特に信心深いというわけではないけど、天罰というのは本当に下るものなのだと
思い知つた。

『あの……私のこと、覚えて、ますか？ 公園より前に会つて、とか、言つたら』

『いや、覚えていない。入隊式の時にいたのか？』

願いが叶うという罰を。

いつかの私たちと、さようなら

「そうして、日々は過ぎていく。」

「こんにちは、須賀さん」

「あやつじか、こんにちは」

綾辻遙という少女の世間からの評価はおおむね「優秀」や「聰明」といった言葉に顕れている。

そんな彼女だからこそ、胸の裡にある狂おしい程の想いの丈を欠片も見せずに過ぎずことが出来る。

次の日も、その次の日も、彼女はランク戦フロアを訪れ、少年と会話を交わす。まるで、今はもういない誰かに語りかけるように。

「要エ！　ブース空いた！　オラもつかいやんぞ！」

「うん、わかつた……悪い、行つてくる」

「ふふ。いいえ、どうぞ」

席を立つた須賀さんが申し訳なさそうに此方を見る。

私はにこやかに、そんな彼に小さく手を振つて促した——ようには演じた。

私は今、上手く笑えているだろうか。

普段通りの、人当たりの良い綾辻遙をできているだろうか。
泣き虫で、怖がりで、だけど彼の友達でいられた「遙ちゃん」を、彼に気取られていないだろうか。

言い聞かせる。

——「もしかしたら」なんて、烏滸がましい期待を抱くのはやめなさい、綾辻遙。
全てを失つた彼に、その元凶である私がだいじなものを取り戻してもらおうなんて、
そんな恥知らずな話はないのだから。

モニターに映る彼を見る。

試合開始のアナウンスと共に猛然と斬り合う両者。

思わずトリオン体である事を忘れ、命の危険すら感じさせる気迫でお互いの急所へ刃を振るう様はいつそ異様にすら思う。

「……」

◆
その剣戟の火花の中で、確かに、少し口角を上げる彼の姿。
それを見て、ああ、やっぱり私にできる事は無いんだなと思った。

どれだけそうしていただろうか。

仕事まだ残つてたつけ、とか、そろそろ帰ろうかな、とか考えていたら、私の隣に誰かが腰を降ろした。

「お隣失礼するよ」

「あ、はい……」

なんで周りにいっぱい空いてる席があるのに私の隣に来るんだろう、と思つて隣を見ると、視界に入ったのは意外な人の顔だつた。

「や、綾辻ちゃん」

迅悠一。

黒トリガーの所有者として『S級隊員』と格付けされる二人の隊員のうちの一人だつた。

その立場や備えたサイドエフェクト故に様々な噂が付き纏う彼と私の部隊の隊長は

同じ年なこともあつて良い友人だが、私自身とはあまり接点は無かつたハズだ。

「あの……？」

「あいつ、こつち戻つてきた時とは見違えるくらい表情が柔らかくなつたんだ」迅さんは玉柏支部の所属だ。

誰の事を言つてゐるのかなんて考へるまでもなかつた。

「あいつ、この間まで外国にいてさ」

「そう、なんですか」

そういうことになつてゐるのだろう。

迅さんの口調は白々しかつた。

「この街三門の生まれなんだから知り合いがいても全く不思議じやないよな」

確信した口調で彼は言う。

驚きは無かつた。

迅悠一とはそういうことができる人間だからだ。

「……調べたんですか？」

「そりやあね」

「そう、ですか」

「言わないの？」 昔のこと

「……それは」

いつから見えていたのか。

どこまで見えたのか。

少なくとも迅さんには私と彼の関係の現状はお見通しなようである。

「言える訳、ないです」

「なんで？」

「なんで、つて……！」

とぼけたような迅さんの返答に苛立ちを覚える。

カツと頭に上りかけた血は、こちらを見つめる迅さんの眼を見てすぐさま冷えていった。

「これは持論なんだけどさ」

諭すように、悲しむように、迅さんは私と、モニターに映る須賀さんを見つめていた。「言えるか、言えないかは置いてといて、『言いたいこと』は言えるうちに言つておくべきだと思うんだ」

力チャリ、と音がする。

おそらく無意識に、彼が腰に差した鞘を撫でる。

モニターの中でレイガストを振るう須賀さんから、もう一度私へと視線を移し、彼は

言つた。

「手遅れになることがどれだけ辛くて苦しいか、君ももう知つてゐるだろ?」

その一言が、とどめだつた。



「ふい〜」

地雷原の上を歩くのはいかに実力派エリートといえども疲れる。

迅は深くソファの背もたれに体重を預けた。

「最近、綾辻の様子がおかしい」と嵐山から相談されたのはつい最近である。大抵の問題事は誰に相談するでもなく、自身で解決できる嵐山だが、今回ばかりはそうもいかない

かつたらしい。

なにせ嵐山いわく「綾辻は自分の弱さを人には、特に嵐山隊には決して見せようとしないだろう」とのこと。

付き合いは嵐山ほど深くはないが、こうして改めて話してみて迅もそれには同意するしかなかつた。

——要がこちらに戻ってきたときに素性を調べた際、綾辻遙の一家が隣家であつたことは調べがついていた。

要が綾辻の事を覚えていなかつたのは仕方ないとして、綾辻から要への態度もまた他人行儀だつた。

綾辻の方も要を忘れてしまつてゐるのかとも思つたが、ある日迅は偶然綾辻を見かけた際に”見て”しまう。

墓石に花束を添える綾辻の姿。そしてそこに刻まれてゐる「須賀」の苗字を。

綾辻遙は須賀要に対してもない後悔と罪悪感を抱いてゐる。

そしてそれが彼女の心を今も、いや、今になつて強く苛んでゐる。そう考えるのに疑いはなかつた。

「久しぶりに疲れたな……」

彼と彼女の間にかつてどのような出来事があり、その中のどれが今回の件の原因と

俺たち

なつて いるのかは知ら ないし、迅は自分 が部外者 で ある二 人の思 い出に 積極的 に立ち 入ろ うとは思 わない。

しかも、その思 い出は要 本人から は既に失 われてしまつて いる。
何かの拍子 に思 い出 すかも しれ ない。

だが、『時間 が解 決して くれる』とい う漠然 とし た希望 を抱くのは、死と隣り合わせと はいか ないま でも、他の多 くの人間よりも遙かに 命の危険 が あるボーダー の人間 には、あまりよろしくないと迅は思 うのだ。

(まあ、後は本人達 に任せるしか ないかな)

少なくとも、手遅れ にはなら なそ うだ。

そう一息 ついた迅は、持つて いたぼんち揚を 口に放り込みながら ランク戦 フロアを後 にした。



「話 と は 何 だ?」

影浦との個人戦を終えた要は、何やら自爆特攻を仕掛ける前の兵士のような顔をした綾辻に連れられ、嵐山隊の作戦室へと足を運んだ。

時刻は5時を回つたころ。

嵐山や他のメンバーは非番だつたりもう上がつたりしているらしい。
『今日はおくれるかもしけない。『ごはんはたべる』とだけ玉狹のグループチャットに書き込んで一息つく。

対面のソファに座つた綾辻は、緊張した面持ちで深呼吸している。

「あ、あの！」

「うん」

初めて聞く綾辻の大声に若干驚きつつ促した。

「前にも同じようなこと、言つたと思うんですけど」

「うん」

要の相槌を聞いた綾辻は、もう一度息を整えてから、打ち明けた。

「私達、昔に会つてゐるんです。ずっと、ずっと昔に」

「……」

「と、友達、だつたんです……私の初めての……」

じわ、と目尻を潤ませながら、震える声で絞り出される告白。

要は困惑した。

だから何だと言うのだろう。

綾辻の口ぶりからして、多分要が向こうに拉致される以前の事を言つてゐるのはなんとなく理解した。

ただ、こんな悲壮な面持ちで打ち明けられても「そうですか」以外の感想が浮かばない。だつて覚えてないから。

記憶とは、脆く纖細なものだ。

人体実験によつて全ての記憶を失つたもの、逆に他人の記憶を植え付けられたもの。戦闘中、または戦闘の跡の光景を見て発狂し、前後の記憶を無くしたもの。

そして、長い戦いの中で故郷の景色すら失くしたもの。色々な壊れ方をした人間を見てきた。

そんな彼らの中で記憶を取り戻したという話はついぞ聞いたことがない。

要にとつて、記憶を失うということはそれだけ不可逆的なものだつた。

だからこそ、もう二度と会えない両親の墓の前で「ただいま」と言えた事は、とても大きな出来事だつたのだ。

だから。

「悪い。覚えてないし、思い出せない」

ひゆ、と綾辻が息を乱した。

だから、繕うのはなしだ。

気遣うのもだめだ。

「たぶん、これから思い出すこともない」

もう須賀 要は、あの日独房で蹲つて泣いていた須賀彼

要とは全くの別人になつてしまつたから。

「う――――う」

ついに、ぎりぎりの所で堪えていたものが溢れた。

ぽろぽろと、とめどなく零れる滴が綾辻の胸元にしたたり落ちる。

「う……ごめ、なさ……つ」

耐えきれずに、俯いていくら拭つても、涙が涸れる気配は無かつた。

「…………」

要は謝らない。

その権利は自分のものではないから。

そして唯一それを持っていた男の子は、もういない。

「う……、つ……く」

ただ静かに、窓から差し込む夕日の朱が一人を照らす中、嗚咽が静まるのを待つていた。



「ありがとうございます……」

「問題ない。小南がよく玉ねぎ切って泣いてるから慣れてる」

それはちょっと違うんじゃないだろうか。

渡されたティッシュ箱を受け取り、鼻をかみながら私は思った。

「で、だ」

「？」

——「すみません、一人でこんなに騒いじやつて」と言いかけた私を、須賀さんの声が遮った。

「俺は、俺と綾辻が友達だつたことも、この街に住んでいたことも、両親のことも思い出せない」

言い聞かせるように突きつけられる現実。

でも、続く彼の言葉はこれまでとは少し違つた。

「思い出せないけど、これから知ることはできる」

私の傍で腰を落として、目線を合わせて彼は言う。

「父と母はもういない。だから、お前だけが俺を知っているんだ」

励ますように、願うように。

懐かしくて頼もしい、優しい熱を秘めた瞳が、私を捉えた。

「教えて欲しい。俺が、俺とお前が、父と母が、どのようにこの街で暮らしていたか」

その眼は、かつて私が憧れて、追いかけていたあの子の眼と、とてもよく似ていた。



「来ちゃいましたね、警戒区域」

「いいのか、つて？ 須賀さんが言つたんじゃないですか、教えてくれつて」

「大丈夫ですよ。私『いい子』で通してますし、1回くらいこういうことしても……嘘です！ ちゃんと申請してきましたから。はい、中身はないけどそれっぽい理屈を並べ立ててきました」

「はい、ここが須賀さんと、私の家があつた場所です……もう、何も無くなつちやいまして」

「（こ）は近界民の被害が特に酷かつた地域ですから、建物の形を留めている家の方が珍しいですね」

「向こうの通りには駄菓子屋さんがあつて、よくお小遣いで買ったお菓子を交換とかし

たんですよ。何味が出るかわからないガムとか、飴とか」

「ここの公園で毎年夏祭りがやつてて、一人でよく夏祭りの翌日に落ちてる小銭を拾つて駄菓子屋に行つてました。それでお父さんとお母さんに怒られるんですけど、須賀さんは『次はバレンないようにしてようぜ』って言つて、やっぱりおじさんとおばさんに怒られてました……私？　私は次の年からやめましたよ。須賀さんには『裏切り者！』って言われました」

「うちと須賀家でよく花火もやつたなあ……ふふ、全部の指に花火を挟んで『八刀流だ！』とか言つてむせてました」

「あ、こ……」

「ここの貴方の靴が見つかって……おじさんとおばさんはずっと、貴方を……」

「ちが、違うんです！　わ、私……貴方に酷いことを言つて、それで！　貴方は一人で、貴方を一人に、したから……」



「それは違う」

綾辻は一人生き延びた者の典型的な状態だ。
必要以上に自罰的。

なんでもかんでも自分のせいにして、そして最後は後を追う。

自分を一人にしたから？ それがなんだと言うのだ。

「俺一人だろうが綾辻と二人だろうが、十にも満たない子供がいくらいた所でトリオン
兵の障害ではない。十人以上もいれば隠密行動を主とし人間を拉致するトリオン兵で
あれば騒ぎが大きくなるのを嫌つて助かつたかもしれないが、俺の場合こんな人気のな
い所に入つて攫われているんだから、結果は変わらなかつただろう」

要は慰めるつもりなどなかつた。

ただ状況を的確に判断した結果を口にしただけだつた。

ただ、目を見開く綾辻の雰囲気が予想と違つたので、要は少し首を捻る。
(ん…………?)

そして、自分の言葉を思い出して、

「ああ」

と思わず声が漏れていた。

「やつぱり、そうなんですね…………トリオン兵って」

(まずいな、バレてしまつた)

林藤に怒られる。



「――そして、半年ほど前に玄界……三門市に戻ってきたんだ」

要は全て話していた。

もうどうにでもなれ。

というか綾辻が前の知り合いであるなら『外国に行つてました』などというカバーストーリーで誤魔化すのは不可能である。

俺悪くないし。

『玄界ココでは殺される心配がほほない』と半年のミーテンライフで理解した要は平和ボケしていた。

でも罰としておかげとか減らされたらどうしよう。

要是有り得てはならない恐ろしい結末に思わず身震いする。

ここまで恐怖を感じるのは大規模誘導装置破壊作戦以来であった。

「……」

綾辻はおおよそ要の境遇にアタリをつけていたようだが、想像以上のモノが要の口から出てきて絶句している。

「綾辻、今の話は秘密に——」

「なんで」

恐る恐る切り出した要の声を、綾辻が勢いよく遮る。

その口調はおおよそ彼女らしくない、責めるような口調だつた。

「なんで、私を、近界民彼らを恨まずにいられるんですか？…………なんで、そんな事があつたのに、さつきみたいに『それは違う』って言えるんですか！」

警戒区域独特の生氣のない静寂を、綾辻の叫びが引き裂いた。

綾辻はまた泣きそうだ。

このままでは『女を泣かした』という噂が広まつて林藤とかレイジとかに怒られてしまうかもしれない。

綾辻が泣きそうになつてゐるなか、要是要で切羽詰まつてゐるので、返答がぶつきらぼうになつてしまふ。

「知らない。誰を恨んでいたかとか忘れた」
「な……」

静寂。綾辻が息を飲んでいる間にこれ幸いと要是畠み掛ける。

「どういか最初は怖いとかばつかりであんまり恨むとかなかつたし、そもそもそれどころじやなかつた」

「それどころじや、つて」

「恨み憎しみで戦う奴はいつか『こいつを殺せるなら死んでもいい』って死んでいく。俺が今ここにいるのはずつと『生きるため』に頭を使つたからだ」

その言葉は、途方もない実体験に裏打ちされた重みに満ちていた。
ずっとずっと、念じ続けてきた。

『死にたくない』と。

何故死にたくなかつたのかすら戦いの中で擦り切れていつても、ただそれだけは消えなかつた。

そして、そうしてきたから、

「だから今、こうしてお前に会えている」

「」

「お前はさつき俺を一人にしたのがいけなかつた、と言つたな。繰り返すけど、それは違う。お前がいても二人一緒に攫われていただけだつただろうし、そもそもトリオンが低いオペレーターのお前は、攫われていたらすぐにトリオン器官を抜かれて死んでいたか、半死半生のままトリオンタンクにされてしまう」

つらつらと、身の毛もよだつもしもの話をしながら、しかし要は最後にこう締めくくつた。

「だから、うん。これでよかつた。帰つてこれたし、向こうに行つたのが俺でよかつた」

そう言つて、彼ははじめて綾辻の前で屈託なく笑う。

「う……」

その笑顔が、いつか見たあの子の笑顔と重なつて。

「なんで、なんでええ…………」

「こつちの台詞だ。なんでまた泣く」

狼狽える少年をよそに、少女はうわあん、と泣き出してしまった。
その光景は、いつかの二人の日常と同じだつた。

來訪者

空閑遊真①

玄界故郷に流れ着いて早二年。

呆れるほど平和な環境での生活に、すっかり要の牙は抜け落ちていた。

目が覚める。錠剤を胃に流し込んで出撃。程々に殺して、たまにたくさん殺して戦闘を終えた後は独房に戻つて泥のように眠る。

昼夜の感覚すらゴチャゴチャになるあの5m四方の箱での生活に比べて、今なんど幸せなことか！

目覚まし時計の音で起きる。（この音だけは嫌い。まだイルガーノの爆撃で目が覚める方が100倍心地いい）

顔を洗つて歯を磨く。

信じられないくらい美味しいベーコンエッグとかトーストとか、ごはんとか味噌汁とか、あるいは昨日の残りのこなみのカレーとかの朝ごはんを食べた後は、林藤がコーヒーを淹してくれるが、要は苦くて飲めない。

そのままだと飲めないが、これに牛乳を大量に入れるとたちまち有り得ないくらい美味しい飲み物に変化するのだ。

玄界最高、先生が見たら喜んだろうな。野蛮なサルとか言つてた奴らに「かげうら」のお好み焼きを食わせてやりたい。というか朝からこなみカレーが食えるならサルだのヘチマだのどうでも良いのではないか?

この時点ではすでにMAXだつた玄界への好感度は上限をブチ抜いて画面外へ飛び出した。

——だが、牙が抜け落ちようと獸は獸だ。

「ぐ、うつ!?

苦しげな少女の呻き声。額に浮かんだ脂汗は間違いなく要によるものだつた。

——牙が無くても爪がある。爪が無からうが単純な筋力で人間を轢き殺す。

「…………」

慈悲なんか今までの人生で持つた覚えすらない。無感情に、無感動に、ねじ伏せて、す

り潰すだけだ。

——ぬるま湯の中に沈んでいようが、『それ』は確実に要の中で燻つていた。
「終わりだ……！」

「ちよつと！ そいつの球動きすぎなんだけど！ こんなのは無理ゲーじゃない！」

「無駄だ。俺が国近と共同開発した最強ピッチャー『スーパーまたかくん』の『ハイパーホーネットボール』は複数回軌道を変えつつミットに吸い込まれる。……フ、キヤラクター名『小南』か、開発元に感謝して名前をアルファベット表記にしてから出直してこい」

「むき————!!!!」

あれ、何考えてたんだつけ。

まあ楽しいからいいや。ごはんまだかな。

「じゃあね！」

「うん、また」

一緒に下校していたクラスメイト達と別れて玉泊支部への帰路を進む。

二年も経てばさすがに色々と生活にも慣れてくる。今ではバスだつて一人で乗れるし、ツイツタードのインスタだのアカウントもある。使い方はよくわからない。影浦がフォローしてくれているらしい。

学校と玉泊支部との距離が遠いので、林藤やレイジに言えば迎えに来てくれるらしいが、要はこの長い道のりを歩きながら三門の街並みを眺めるのが好きだった。

二年経つた今でも、何気ない日常の風景の一つ一つが要にとつては新鮮なのだ。

道端の道路標識。

空にかかるひこうき雲。

コンクリート塀の上で寝転ぶ猫。

赤信号に変わる横断歩道の信号機。

『ごしゃつ』という鈍い激突音。

車に吹き飛ばされる白髪の少年。

なかなか衝撃的な光景だ。これがインスタ映えなのだろうか。風情がある。

(あれは死んだな)

ゴロゴロと車道を転がる少年。よしんば生きていたとて重篤な後遺症は免れまい。
直撃の瞬間腰がヘシ折れていたし。

「く…………空閑!!」

友人らしいメガネの少年が、吹き飛ばされた少年に駆け寄る。
それを見て、要も横たわるクガ少年に駆け寄った。

「救急車を呼ぶ。少し待つていろ」

さすがにこれを見て静観はできない。ゆり達からも困っている人がいたらなるべく
助けるように言われているし。

まさか超平和世界だと思つていたこの街でゆり達から教えて貰つた「119」が役に
立つとは。スマホにこの番号を打ち込めば最寄りの救護所から衛生兵が駆けつけてく
れる優れものである。

「あ、ありがとうございます！　おい空閑、しつかりしろ！」

(望み薄だが、応急処置はしておこう)

そもそも救急車が来るまで保つかどうかすら怪しい。

見たところ出血は無いので、ダメージが体内に集中しているのだろう。下手に外傷が
あるよりこちらの方が致命的だ。

そう考へてゐると、

「あちやー……やつちやつた」

むくり、と力なく横たわっていた少年が、何事も無かつたかのように体を起こす。

「な……！」

(なんだ、トリオン体だつたのか)

絶句するメガネの少年。

その横で要は得心していた。あれだけの事故で平然としていられるなど、トリオン体に換装していくに違ひない。

しかし次の瞬間、今度は要が絶句することとなつた。

「…………!?

ひび割れた少年の顔。

彼のトリオンが黒い煙となつて噴き出すその傷口が、パキパキと音を立てて塞がつていく。

(どういうことだ……?)

確かに先程の衝突事故は、生身の人間が死ぬには十分な衝撃があつただろうが、トリオン体ならばあれくらいでは傷はつかないし、ついたとしてもトリオン体の損傷は塞がらない。

故に一般的にはトリガー使いは替えのきかない貴重な戦力であり、通常兵器に対しても無敵の切り札なのだ。

「だ、大丈夫ですか!?」

悲鳴のような声で、要はようやく思考の海から浮上する。

見ると、少年を跳ね飛ばした車の運転手が顔を真っ青にして駆け寄つて来るところだった。

「いえいえ、大丈夫です」

「えつ!?

「こちらこそもうしわけない。これで足りますか?」

「えつ!.....えつ!?

おもつきしふつ飛ばした相手が無傷で札束を差し出してくる光景に、運転手の女性は思考が追いつかずに目を回している。

(すごい。ひやくまんえんくらいありそうだ)

あれだけあれば当分おやつに困らなさそうだな、などと、要はすっかりお札に目を奪われていた。



「お前はボーダーの隊員か？」

運転手がペコペコしながらベコベコになつた車で事故現場を離れたあと、救急車を呼ぼうとしてくれた少年が修達に声をかけてきた。
修がその事に感謝しようとしたのもつかの間、彼の質問に修は一気に冷や汗をかくこととなる。

「そ、それは……」

よりもよつて、彼はボーダー隊員だつたのである。今の質問は、事故直後の空閑の様子を見てのものだろう。

——まずい。

ここで「空閑はボーダー隊員だ」と嘘をついたところで、本部に確認されればすぐにバレる。しかし、正直に言つてしまえば今ここで空閑は彼に最悪殺されてしまうかもしない。

必死に考えを巡らせる修の横で、当の空閑はあつさりと白状した。

「こつちはただけど、おれは違うよ」

「おい、空閑！」

「オサムだつてわかつてるだろ。もう誤魔化したつてしようがないよ」

「う……」

思考を見透かしたような空閑の言葉に、修は黙り込むしかなかつた。

「ボーダー隊員ではないがトリガーを所持しているとなると、近界民か？」

「うん」

終わつた。修はそう思つた。空閑自身が近界民だと認めた以上、このことが本部へ伝えられることは避けられない。そしてこうなつた以上、空閑がろくな目に合わないのは確実だ。

空閑の返答を聞いた少年が、ポケットから携帯を取り出した。

「ま、待つてください！　こいつは近界民でトリガーを持つてますが、誰も傷つけたりしてません！」

修は無意識のうちに空閑を庇うように、大声で少年に訴えていた。

空閑は修や市民を他の近界民から守つてくれた。過激で常識を知らないところがあるが、それはこの世界に慣れていないからだ。そんな友人が近界民だからという理由で殺されるかもしれないという事実が、修には我慢ならなかつた。

少年が携帯を操作する手を止めて修を見る。

「……」

修にとつて、永遠とも思える長い数秒が過ぎた。気づけば冷や汗が頬を伝っていた。

「そうか」

とだけ言つた。



「「いただきます」」

「い、いただきます」

玉狹支部のリビングに開戦の号砲が響き渡つた。要にとつて食事とは家族や友人と
の戦いである。

悲しい事だ、なぜ家族や友人同士で争わなければならぬのか。

要は世の理不尽を嘆いた。自身が殿を務めることになつた撤退戦の時ですらこんな気持ちはにならなかつた。しかし仕方のないことなのである。血の涙を流し、心を鬼にしなければ、おかわりは勝ち取れないのだ。

今日はレイジの肉野菜炒めだつた！ 箸が止まらない！
しかし要は焦らなかつた。

当然だ。血で血を洗うような戦場で幾度も死の危機を脱してきた兵士にとつて、皿に盛られた標的を処理していくことなど容易いのだ。

これまさにまな板の鯉、加古隊と戦う辻、炒飯の前の堤である。

これにより炒飯×堤大地 ॥ 米×B級中位 という式が成り立ち、つまり餅ばつか食つてる太刀川がB級より強いA級であることに確固たる証明がなされたという訳だ。

今後はB級ランク戦前にゲン担ぎとして餅や炒飯を食べるのが流行するかも知れない。力が欲しいか？ ならば米を食え。加古隊の部屋に行けば炒飯が食える。

はやくいっべい食べたいのは山々だが、行儀が悪いと怒られる。

四苦八苦しながら最近ようやく綺麗に使えるようになった箸を、しつかりと、それでいて迅速に口へと運んでいく。

「おかわり」

綺麗に平らげた皿を持つて宣言する要の声に、重なる声があつた。

「ほう」

「む……」

声の主は要を見てにやりと口の端を吊り上げる。それを見て要も自然と微笑を浮かべる。

「なかなかやりますな、かなめ先輩」

「お前もな、遊真」

フツと笑いながらお互ダチいを称えあう二人。なんと美しい光景だろうか。二人はもう親友であつた。

要と友達になるのにめちゃくちゃ苦労した少女達がこれを見たらどう思うだろうか。

「ほら、おかわりだ」

二人分の肉たっぷり野菜炒めをよそったレイジがキツチンから戻ってきた。友達だろうと負けるわけにはいかない。遊真と要は再びお互いを見て再戦の予感にニヒルな笑みを浮かべるのだつた。

「遠慮するな、三雲も食え」

「あ、はい……」

「それと、食い終わつたら上に行つてくれ。支部長がお前たちと話したいらしい」

「……はい」

なんだかすごい疲れたような修が、レイジに言わされてから、もそもそとゆっくり箸を口に運ぶ。

要是「食欲無いんだつたら修のぶん食べていい?」と思つた。



「いやー、いい人たちだつたな、タマコマの人たち」

玉泊支部からの帰路。

すっかり暗くなつた空の下で、空閑はたらふく食べたおなかをさすりながら、満足気につぶやいた。

「ああ……」

修が心ここにあらずといった様子で応えた。

そもそもそのはず、修にとつて今日という日は今までの人生で最も密度の濃い一日だったのだから。特に、玉狹支部へ行つてからの話はあまりにも衝撃的なことの連続だった。

迅悠一、修の恩人との再会。

空閑の過去、そしてこちらの世界に来た目的。

最上宗一の死と空閑の目的が果たされることがないこと。

玉狹支部への誘いと、それを空閑が断つたこと。

そして、空閑の相棒であるレプリカから伝えられた、「空閑にはもう生きる目的がない」という事実。

しかし、それを知つても修に出来ることなどなかつた。修はただのC級隊員。訓練生だ。

近界民を一撃で粉碎できる空閑に手助けできることなんて、せいぜいこの世界の事を教えるくらいしかない。それだけ修にしかできないことではない。

そしてなにより、空閑の人生に自分が口を出すことが正しいとは思えなかつた。

どうすればいいのか悩みこむ修の横で、空閑が玉狹支部での話を振り返る。

「でも、迅さんが言つてたおれに手伝つてほしい事つてなんだろうな」

「わからない。でも、未来が見える人が言うんだからきっと起ることなんじやないか？」

「だな、まあおれもそれが終わるまではこっちにいるから、あとちょっとだけよろしくな、オサム」

「……ああ」

迅は空閑に「数日後にちょっとめんどくさいことがあるから、遊真とレプリカに手伝つてほしい」と言つた。それに対しても空閑も修や玉狹支部のごちそうを理由に快諾したのだ。

(ぼくは一体、どうすれば……)

楽しそうに隣を歩く空閑とは対照的に、修は俯きながら思考の海に溺れていく。

本来は悩むべきことではない。友人がこの街を離れる決断をしただけだ。修はただそれを「じゃあな」と言つて送り出してやればいい。

ただ、修の頭に浮かぶ光景がある。

最上宗一の形見である『風刃』をそつと撫でる空閑の横顔だ。

これで終わるのが正しいとは修は思えなかつた。いや、思いたくなかつた。従うべき信念は決まつていた。

空閑の過去を知つた修に、玉狹の支部長室で再会した恩人はこう言つた。

知らずのうちに自分の歩く速度が落ちていたのか、前を歩く小さな白い友人の背中を見て、迅の言葉がリフレインする。

『メガネ君はこれからも、自分がするべきだと思ったことに従えばいいよ』
修の迷いは、少しだけ晴れていた。

空閑遊真②

——めきよ。ばきん。

「……」

今日の要は上機嫌だった。なぜなら昨日、友だちが増えたからである。それも二人。空閑遊真。「向こう」出身の少年。おかずを取り合つた仲で、レイジの料理を美味しそうに食べててくれた良い奴だった。

三雲修。ボーダーのC級隊員。おかずを分けてくれた良い奴だった。
——ごしゃつ。ざくつ。

「……」

そして同時に、今日の要はちょっと不機嫌でもあつた。その新しくできた友だちが、早々に「向こう」に帰るらしいからだ。

なんでも、要たちとご飯を一緒に食べた日に、「こつち」に来た目的が果たせない事を知つてしまつたのだとか。
不機嫌というか、悲しいというか。表現としては「寂しい」が最も適切なのだが、本人はそれに気づいていない。受け取つたマイナス感情が十把一絡げに「不機嫌」として

出力されがちな、子ども特有の情動である。

たやすく両手の指で数えられる年齢から、10年近くをただ戦うことのみ費やしてきた少年にとって、自身の感情を正確に把握するには、玄界で過ごしたまともな時間は、あまりにも短すぎた。

——べきん。ばきん。ぐしやり。

そういう訳で、要は不機嫌である。と、自分では思っている。

思わず、振るう腕に力も入ろうというものだ。

「おーい、要」

「迅」

聞き慣れた声に振り向くと、見慣れた顔が、街の大通りから要のいる細い裏路地へと足を踏み入れるところだつた。

車のエンジン音や、青信号の電子音がわずかに届く路地裏に現れた迅の顔は、要の位置からはちょうど逆光で見えにくかつた。いいな、ソレ。なんか暗躍つぼくて。
「どんな調子だ？」

「ん」

がさり、とパンパンになつた業務用90Lのゴミ袋を小突く。中にはぼろぼろに碎けた灰白色の残骸と、ぎよろりとした無機質な朱色の目玉が覗いている。

よく見ると同じようなゴミ袋が、薄暗い路地裏のあちこちに転がっていた。

「おおく、大量じゃん。稼ぎ頭だな」

「うん」

小型トリオン兵「ラッド」。近界からのゲートを開くための装置の役割を担うトリオン兵であり、両手で持てるほどの小型ゆえ危険度は皆無だが、いかんせん数が多い。

現在、要達ボーダーは三門市に大量に存在すると判明したねずみを、ほぼ総力をあげて文字通り狩っている最中だ。

「お手柄だな」

迅の言葉に、要是つい先ほど考えていた友人の顔を思い出し、静かに首を横に振つた。

「一番の手柄は遊真だろう」

「それはそうだけど、要も頑張つてるよ。ありがとうな」

「……うん」

実は、この状況を作つた原因、というより功績は件の空閑遊真にあつた。近界に帰る前に、色々とお世話になつた恩返しをしてくれるらしい。街に潜む数千ものラッドを余さず探知、おおよその位置情報を提供してくれたおかげで、随分とボーダーの仕事は捲つていた。

要是遊真と、レプリカと名乗る炊飯器みたいなトリオン兵がぽんとその情報を提供し

てきたことに驚愕した。

ラツドは雑魚だ。しかし、ラツドを1匹打ち漏らせば国が滅ぶ。

近界の知識が豊富なボーダー上層部がこれを理解していないはずがない。遊真是、やろうと思えばありとあらゆる要求をボーダーにふっかける事だつてできたはずだ。でも、彼らはそうしなかつた。遊真是たぶん、修へ義理を立ててくれたのだ。最近ようやく、要にも少しづつそういったことが理解できるようになつてきた。

「……迅」

「なんだ？」

「遊真是、もうすぐ帰るのか？」

路地裏をかすかにぎやかしていた街の喧騒をかき消して、要是言つた。

「要是寂しいか？」

寂しい。せつかくできた友だちだ。でも、遊真には帰る方法がある。帰る場所がわかつていてる。

そしてなにより、そうできる自由がある。

「うん。でも、俺は……」

自分と遊真では状況が違う。彼は玄界にいる事に、また向こうに帰る事に焦つていてる様子ではなかつたし、ここには遊真が帰郷を急ぐ理由になる事態はほぼ起こり得ないだ

ろう。

それでも。

「……俺は、あいつが帰りたいなら、帰らせてやりたい」

もし、遊真が故郷に帰りたいと思うなら。

そう思う人を引き止めることだけは、須賀要にはどうしてもできなかつた。



「さてと、これで迅さんの手伝いも終わつたな」

ラツドの残骸のつまつたビニール袋を片付ける修の横で、白髪の少年が伸びをしながら呟いた。

「そろそろ帰るかー」

「……」

まるで散歩にでも出かけるような気軽さで、遊真は言う。すでに傾き始めた陽の光に照らされたその横顔には、少しの迷いも見て取れない。遊真是既に、「こっち側」に来た目的を、いや、生きる目的を失つた事を割り切つてすらいるようだつた。

言いようのない、不安とも焦りとも少し違う不快感が修の胸中に燐つていた。彼を引

き留めたい。そうしなければ。いや、そんなこと本当はしたくない。

ぐるぐると、浮かんでは消えていく言葉と思考。けろりとした様子の遊真とは対照的に、その全てに纏まりをつけないまま、修の口は動いていた。

「空閑、悪いけど明日ももうちよつとぼくに付き合ってくれないか？」

「ほ？ なんで？」

「会わせたい奴がいるんだ」

最低だ。修はそう自分を罵倒する。遊真を引き留める理由に、自分の幼馴染を使っている。しかし、一度彼女を遊真に合わせたかつたのも事実だ。正確には彼とレプリカの持つ知識を借りたかつただけだが。

「う——ん……でもなあ……」

修の言葉を聞いた遊真是、腕を組んでうんうんと唸っていた。遊真の考えていることは修にも少し理解できる。ネイバ-近界民が恐怖の対象となっているこの世界では、自身の存在が悪影響であると考えているのだろう。修達に迷惑をかけるからと。

修としては友人にそんなことを気にしないで欲しかつたが、意外と義理堅い遊真のことだ、こうやつて悩んでいるのも修にとつては不思議なことではなかつた。

「…………いや、やっぱりおれは」

「おい、修、遊真」

組んだ腕を解いて口を開きかけた遊真を、横からぶつきらぼうに入ってきた声が遮つた。

「かなめ先輩……」

振り返った二人の先には、先日知り合つた隊員の姿がある。

ボーダー玉柏支部所属A級隊員、須賀要。

愛想という言葉を知らないのかと思うくらい無愛想な先輩だが、悪い人間ではなかつたし、話してみると意外と優しかつた。修と同じレイガストをメイントリガーとして使うそうなので、修としては少し興味があるところだ。

巨大なゴミ袋を両脇に抱えて、さらに頭の上にも器用に一つ乗せている要は、二人を見つけるなりこう言つた。

「明日焼き肉いくぞ。用事はその前に済ませておけ」

「え？」

「は？」



「あ、あの、私も行つていいんですか……？」

「うん。そもそも今勝手に着いてきているのは俺の方だし、遠慮しないでいい」

「いやあの、まず先に千佳のトリオングル能力の事を……」

「そうか。そうだった」

人っ子一人いない住宅街を、自転車を押した遊真とともに歩く。遠慮がちに話しかけてくる隣の少女に対して、要は言葉を返した。それに対して修がこれまた遠慮がちに言葉を挟む。

「いいじやんチカ。奢つてくれるつて言うんだし食べてこうぜ」

「空閑、おまえは遠慮しなさすぎだ……」

修達は、空閑への「頼み事」のため、修の幼馴染である雨取千佳を連れて歩いている最中だった。

用事を手早く済ませておけと話した要だつたが、今日の焼肉が楽しみでいつもより早起きして日課のランニングをしていたところ、河川敷で遊真と千佳が自転車の練習をしているところを発見。今に至る。

要はつい最近補助輪なしで自転車に乗れるようになつたため、ここぞとばかりに見本

と称して渾身のドヤ顔でチリンチリンと自転車を乗り回していた。遊真は割と本氣で悔しがっていた。

「オサムもよかつたなー。B級に上がれて」

「ぼくの力じやない、空閑の手柄を横取りしただけだ……」

「まだ気にしてんの？ ハゲるぞ」

空閑がすっ転びながら自転車を練習していると突如バンダーが出現。要は処理しようとしだが、B級隊員の戦闘服を纏つた修が合流したため彼に任せたところ、中々良い動きでバンダーをぶつた斬つていった。

ぎこちないながらも良い動きをした修を見て、肩の出っぱり邪魔じやない？ と要は思つた。

「……つと、ここら辺でいいだろ。人もいなさそудだし。レプリカ、出てきていいぞ。みんなも行こうぜ」

『承知した』

「わつ」

『はじめまして、チカ。私はレプリカ。ユーマのお目付役だ』

「は、はじめまして……」

自転車を止めた遊真は、レプリカに驚く千佳や修を置いてさっさと言つてしまふ。少

し遅れて、二人も遊真の後に続いた。

場所は旧弓手町駅。ゴーストタウンと化した閉鎖区域に佇む、もう電車の来ない無人の駅だ。ここで千佳の悩みをあれこれするらしい。ボーダーでもそのあたりの検査は勿論できるだろうが、本人があんまりボーダーには頼りたくないそうだ。

「…………」

ともかく、そういう事ならあまり要は力にはなれなさそうだ。要はヒマなので廃墟探検することにした。

「……あれ、須賀先輩は？」



パシャリ。

——須賀要が画像を送信しました

『バスケットボールが落ちてた。いるか？』

『汚なつ！ いらんわ！』

『そうか』

『それでどこよ、ここ』

『1日ゆみてまちなんとかと書いてあつた』

『旧弓手町駅ね、きゅうゆみてまち。1日じやないから』
『てか閉鎖区域じやん。あんた今日任務入つてたつけ？』

『いや』

『探検してる』

『あ、そ』

『そうだ、明後日個人戦できない？ 一条くんの対策しどきたいんだけど』

『本人に言えбаいいだろう。俺に雪丸のような戦い方はできない』

『嘘つけ！ それに、本人に言つたらお互いフェアじやないでしょ』

『わかった。行けたら行く』

『絶対来い！』

『こんどバスケもやろ！』

『うん』

「……よし」

満足気に携帯をポケットにしまつた要是、待たせていた正面の二人組に向き直つた。

「それで、何の用だ？」

「……ふざけているのか？」須賀さん

その手に愛用のハンドガンがあれば、今にも引き金を引きそうなほどの声音でA級7位三輪隊隊長、三輪秀次は要を睨みつける。その手にはしつかりとトリガー・ホールダーを握りしめており、要の返答次第では即刻戦闘体へ換装することも辞さないだろう。

「いやあ、びびつたー。まさか近界民(ネイバ)と一緒にいるのがスガセンとはなあ」

おちゃらけた様子で三輪の隣の少年が口を開く。

「米屋、久しぶりだな」

「うつす」

要の言葉に片手を上げて応える米屋。彼も三輪隊の隊員であり槍の名手、どちらも間違ひなく猛者だ。

「お前達がいるなら古寺と奈良坂もいるな。隊で動いているのか？」

「質問しているのはこちらだ。なんで貴方や三雲が近界民(ネイバ)と共にいる？」

有無を言わさぬ口調で三輪が食いつく。やはり話は通じそうにない。もつとも、それ

を期待しての発言ではなかつたが。

「お前達が近界民だというのはどつちの事だ？」

「とぼけないでくれ。俺たちはあの白髪のチビが黒いトリオン兵を出現させたのを見ている。時間を稼ごうとするのは無駄だ」

うーん、平行線だ。要としてはほぼ無関係・一般人の千佳が巻き添えになるのを避けるための確認だつたのだが、三輪には遊真たちを逃すための時間稼ぎを図ろうとしているように映つたらしい。

もうめんどくさいので要はさっさと話を終わらせにかかった。

「友人だ。ネイバ-近界民といいうのはつい最近まで知らなかつた。先程もう一人いた女の子のトリオン資質を検査するため、彼の力を借りようとしていたところだ……以上だ。質問はあるか」

「なんだと……？」

ぎり、と拳を握りしめる音。三輪の顔には、「質問なんて山ほどあるに決まつていて」といった表情がありありと浮かんでいた。感情に追いつかず、逆に固まる口を閉じて、三輪は自分を落ち着かせるように目を閉じた。

「……いや、そうだな。一つ聞きたい」

「何だ」

「貴方は、俺たちを邪魔するつもりか？」

す、と右手に持ったトリガーホルダーを上げて三輪が言う。その瞳には、先ほどまでの燃えるような激情はなく、ただ静かに冷たい怒りだけがとぐろを巻いていた。

もう何を言つても無駄だ。

「おつ、ようやくか！」

三輪の隣の米屋も戦闘の匂いを嗅ぎ取り、楽しそうに口の端を上げた。

要は静かに、懷に手を入れる。

閉鎖区域特有の、人気のない冷たい雰囲気に、さらに重く、息苦しささえ覚えるような空気が混じる。

粘ついた風。目の前には二匹、蛇がいる。

「ああ」

返答。反応は劇的だった。

ばつ、と。要と米屋が同時にホルスターから引き金を抜く。

——要は思い出す。昔、捕まえて食べた蛇の事を。頭を押さえ、首をもぎ取る。首から尻尾の方まで一気に皮を剥ぎ取り、炙つて食つた。

示し合わせたかのように、三人の声は自然と揃つた。

トリガ一、オン』

——蛇つていうのは、歯ごたえがあつて美味しいもんだ。

三輪秀次①

早朝。

まだ日が昇り始めて間もないころ、要が日課のランニングをしようと家を出ようとしたらところで、寝ぼけまなこの迅がリビングへ降りてきた。

「ふわあ……お、要。おはよう」

「おはよう」

「走り行くの？ お前すごいねえ。毎日10kmくらい走ってるじゃん」

玄関で座りながら靴紐を結ぶ要に、迅は目を擦りながら心底感心したように要を褒める。

褒められたのが嬉しくて、要是少し機嫌を良くしながら応えた。

「うん。体力がない奴から死ぬから」

「そうか」

「うん……行ってきます」

靴紐を結び終えた要が立ち上がり玄関に手を掛けたところで、何度も大きなあくびをしながら迅が言つた。

「行つてらっしゃい…………ああ、そうだ。要」

「何だ？」

「気をつけて行けよ」

外の朝焼けが美しかった。

須賀要と三輪隊が戦闘を開始するおよそ7時間前の事である。



◆ ◆
トリガーリー起動開始 ◆
起動者 実体走査 ◆

ボーダーのトリガーに設定された機械的な音声が要の脳内に響く。

——模擬戦の場合を除く、ボーダー隊員同士の戦闘行為は固く禁止されている。

ボーダー隊員における常識であり、もちろんこの場の全員もそれは承知の上である。そもそも大前提として三輪隊には城戸司令の直轄で動いているという大義名分があり、その彼らを攻撃すれば、要がペナルティを受けるどころか玉砕にも迷惑をかけかね

ない。

(受け身の時間稼ぎが必須かつ最大限。あとは迅と遊真がうまくやるだろう)

人の気配の消え失せたゴーストタウンの街並みをトリガーの光で染め上げながら、要の脳内を戦闘のための情報が駆け巡る。

この戦闘で要に課せられた条件は四つ。

- ・勝利条件 空閑遊真を護衛しつつ戦闘状態の終了。これを契機に、遊真に関して玉狹と本部との交渉の機会が得られればベストだが、これは迅に任せることはない

- ・敗北条件 黒トリガーの奪取＝空閑遊真の死亡

- ・撃墜禁止。総司令直轄任務に従事する部隊への妨害の影響は未知数。事によつては玉狹支部が今後動きにくくなるどころでは済まない

- ・逃走禁止。遊真の黒トリガーの性能は知らないが、三輪隊の他にも同任務を遂行中の部隊がいるかもしれない以上、できるだけ要一人で相手を足止めしておきたい。尤も、遊真が戦わなくて済むならそれに越した事はないが。

(実戦で逃走できないのは初めてだ。面倒だな)

自分より強い相手からは一瞬で逃げて別の雑魚を潰しに行くのを幾度となく繰り返してきた要にとつてこのようなケースはあまり記憶にないことだった。
(迅はどこまで読んでいる?)

——氣をつけて行けよ

今朝の迅の言葉がリフレインする。

(なぜ俺にこの事を伝えなかつた?)

もし信用されてないんだとしたら、要はちょっと寂しかつた。

未来を教えてくれたら、こんな喧嘩みたいな戦いしなくて済んだかも知れないのに。

いや、三輪の様子からすると何を言つても無駄だつたか。

どうせ今回の事態にも色々と手を回しているだろう友人の顔を思い浮かべ、要はあとであいつのぼんちあげをかつぱらおうと決めた。

『 戰闘体換装終了 トリガー起動完了 』

戦闘準備の完了が告げられ、戦闘体のものに切り替わった視界が晴れた——

——瞬間。

発光

視界の端

ビル 屋上

思考の上澄みが脳裏に走つたその時には、要の身体は後ろに跳んでいた。

——

要が空中に身を躍らせた瞬間、要の頭部と心臓のあつた位置を切り裂いた二つの光弾が、コンクリート舗装がボロボロになつた放棄区画の道路を深く抉る。

換装完了の瞬間の隙を突いた狙撃。

要の回避が0・1秒遅れていればその場で決着していた。

おそらく狙撃手は三輪と要が会話している時には既に要の姿を照準に納め、引き金に指をかけていただろう。なんとも甘いことだ。

撃つ気があるなら換装前にさつさと撃てばよかつたのだ。

ボーダーのトリガーには安全装置があるから死にはしないし、死んだところで死体は適当に近界にでも捨ててしまえばいい。

そもそもトリガーはこの世界にはない技術のものだ。凶器の詳細な特定は困難だろう。

邪魔する奴はみんな殺して、そいつの関係者に記憶封印措置を施せば証拠隠滅なんて造作もない。ボーダーの連中にはそれができるのだ。

奈良坂、古寺の判断で撃つたのか三輪が指示したのかは知らないが、どちらにせよ優しいんだな、と要は思つた。

いや、優しいのはこんなぬるいやり方をする城戸司令の方か。

「あつはつは！ なんであれが避けられんだよ意味わかんねー！」

「チツ……！ 行くぞ陽介！」

目標、白兵2、狙撃手2。

増援の可能性有。

目標の撃墜及び戦線の離脱、共に不可。

「……レイガスト」

さあ、正念場はここからだ。



た。

1年半ほど前、ボーダーにとんでもない新人が入隊してきたと話題になつた事があつ

た。彼は全ての試験で圧倒的な成績を残し、新入隊員同士の個人戦をことごとく蹂躪し

更にC級程度で天狗になつた鼻を折つてやろうと騒ぎを聞きつけて絡んできた数人

のB級隊員達をも1人残らず秒殺し（訓練生と正隊員の試合だったためポイントのやり取りは行われなかつたが）、入隊当日でB級へ昇格、そのまま玉泊第一へ配属されて異例中の異例のA級昇格を果たした。

所要時間は約2時間。

忍田本部長をして「今後彼を超えるスピードでA級へ上がる者は出てこないかもしないな」と言わしめる程の才能だつた。

個人戦フロアで見る彼の戦いは凄絶の一言に尽きたといふ。とにかく殺す。詰めて押して近づいて殺す。

相手のトリガーだろうが周囲の環境物だろうが何でも使う。

殺意の塊としか言いようのないその戦い方を見て恐怖する隊員は多いらしい。

その一方で、鬼気迫る様相で近界民だろうが試合相手だろうが構わず斬り捨てる彼に対する、共感を抱く隊員も少なくはなかつた。

その多くは、近界民に親しい人間を殺された者達だ。

加えて、本人が「両親が近界民に殺されたために海外の親戚に引き取られていた」というカバーストーリーを浸透させるべく、初対面の人間に自己紹介する際に「家族は近界民に殺された」と初手で爆弾をブツ込むムードをかましているため、「須賀要是近界民に家族を殺されている」という話が広まるのに然程時間は掛からなかつた。

——ああ、この人もかと。

三輪秀次はただそう思つた。

べるわけがない。

ただ、自分と同じような人間がここにもいるのかと、そう思つたのは確かだ。
近界民を殺したい。

殺された家族の仇を取りたいから？ わからない。

ただ同じ目に遭わせてやりたいから？ わからない。

同じだ。

きつとこの人も。

そう思つていたのに。

「……邪魔をするな、玉狹ア！」

絞り出したような怒声がゴーストタウンに響き渡る。

——なぜだ、なぜ！

——なぜあんたは玉狹そににいる！

「親近界民派」などというふざけた連中が存在している事そのものが、三輪秀次には我慢がならなかつた。

忘れたのか、四年前を。

いや。そもそも玉砕の連中は親しい人間を近界民に殺されてなどいからネジのユルんだ世迷言を吐けるのだ。

近界民は敵だ。

奴らは人を殺す事を厭わない悪魔だ。

その悪魔が今再び、最愛の姉が生き、そして眠るこの故郷の土を踏んでいる。しかも今度は、トリオン兵などという人形とは違う、生身の足で。

——逃奔して、たまるか。

◆
「……」

要は三輪に応えない。

腰のホルスターから抜いた玉狛仕様のレイガストをナイフ状にして逆手に構え、たゞ静かに三輪と米屋を見据えるだけだった。

「おおッ！」

米屋の気迫が再戦の火蓋を切る。
ボーダー唯一にして最高の槍使いの踏み込みは、容易に彼の戦闘体を目標の下へと運んだ。

三輪もハンドガンを構え、左に展開。射線を確保し、射撃での連携を狙う。
「らツ！」

刺突。光刃が空を引き裂き要へ迫る。

ボーダーの誇る傑作トリガーの切つ先が要の喉元を捉える、その直前。

「——エスクード」

「つと！」

ゴツ、と。

地中から射出されたかという勢いで出現したバリケードが、槍ごと米屋の腕を跳ね上げた。

「スラスター起動」^{オン}

すかさず噴き出したトリオンの奔流が、要の刃を加速させる。

ブレードを伸長し、薄い光の尾を引きながら振るわれた下段斬りが、目前のエスクードを根元から斬り飛ばした。

そのまま勢いを殺さず、回転りながら隊服の右足首に設けられたホルスターにレイガストを装着。

——ギャリツツ！

軸足が響かせる擦過音。

スラスターの勢いで放たれた破壊的な後ろ回し蹴りが、宙に浮いたエスクードを正面へ吹き飛ばす。

「どいてろ」

「やべつ！」

槍を跳ね上げられ、体勢の崩れた米屋へ、ボーダー最硬を誇る巨壁が殺到した。

「う、おおおおおおお!?」

ドガガガガガツ、と吹き飛ばされた先に展開された無数のエスクードが米屋を大の字で押しつぶし、さらにダメ押しとばかりにその周囲をわずかの隙間も許さずに囲み、埋めていく。

エスクードからエスクードを生やし、天井まで作られたその「建造物」は、監獄とも言える有様だった。

ガード。

「旋空」発動中の弧月の斬れ味は、切つ先に近いほど高まる。

なら、武器を振れないほど狭い場所に閉じ込めたら？
まず一人。

唯一の旋空持ちは潰した。
これでもう出られまい。

「くそっ！」

逆手に持ち替えたレイガストで、首を落とさんと振るわれる白刃を受け止める。

エスクードによつて射線が通らなくなつた三輪が弧月を抜き、米屋とのポジション差
故のタイムラグの後にカバーに入るまではほんの一瞬だつた。

そしてその一瞬こそ、要が求めていたものだつた。

(……そろそろだな)

続け様にエスクードを2枚。

要の左右を守るように盾がせり出した瞬間、再度飛來したトリオン弾が壁面の玉狛の
エンブレムに弾痕を残した。

「そこか」

要が呟く。

スコープの奥の相手が息を呑む気配が要にも伝わって来るようだつた。

狙撃手は同じ場所で撃ち続ける事を好まない。

旧弓手町駅付近。

このロケーションにおいて、戦闘前に狙撃手の好みそうなポイントに日星をつけていた要は、「要の視界外の狙撃地点の中で最も前回の狙撃地点から近いポイント」までの奈良坂と古寺の移動時間を概算。

こうしてまんまと釣れたわけだ。

狙撃地点の洗い出しは要が三輪隊との戦闘を予見して行つたモノではない。
要の目には、世界は常にそう映つてゐる。

しかし相手は精銳。

そう何度も同じ手は通用しない。

ならばどうするか。

——こうする。

「……!?

息を呑む三輪。

背景そのものが変わつていく。

地響きさえ轟かせて出現した10m級のエスクードが、三輪と要の四方を囲つた。

要が最も足止めしておきたかつたのは三輪だ。

非実体トリオンを透過する三輪の鉛弾は、これまで見てきた全トリガーの中でも、未

知の相手に対する最適解であると要は考えている。

相手が防御手段をボーダーと同系統の非実体型シールドに頼つていた場合、慢心すれば黒トリガーでさえ封殺してしまう可能性があるというのが鉛弾の恐ろしさだ。

國近風に言うなら「ぶつ壊れ」だろうか。

——故に、こいつだけは留めておかなければならない。

「あんたは……」

「ん？」

氣を取り直してサンドバッグ役をやるか、とレイガストを構えた要に対し、三輪は弧月の切つ先を下げたまま声を漏らした。

「あんたは勘違いしている！ 玉狹の連中に何を吹き込まれたのか知らないが、近界民は排除しなければならない敵なんだ！」

「…………」

「あんたも四年前を覚えているはずだ！ 奴らは人間のことなんか家畜ほどにも思つていいない！」

憎惡。

堰を切つたように溢れ出す。

悲鳴にも似た三輪の叫びが、壁に囲まれた10m²に満ちていく。

「そうだな」

四年前は三門にいなかつたから知らないが、家畜云々はその通りだな、と要は納得していた。

——なんにせよ、お喋りで時間をかけてくれるのなら、要には願つてもない事だつた。「胸を抉られてボロきれの様に捨てられる死体の山に家族を見つけた時の感情を、なぜいつもこいつもなかつた様に振る舞うんだ!!

何のための武器だ!?

何のためのボーダーだ!!

近界民は排除しなければ……手遅れになつてから後悔したつて、意味がないんだ!!

要は両親を殺された。

三輪は姉を殺された。

要は、親の死に目にすら会えなかつた。

三輪はあろうことか目の前で殺された。

それぞれに、それぞれの辛さがあるだろう。

要だつて、街を歩く親子を見て「もう一度くらいああしてみたかった」と思うこともある。

三輪だつてそうだろう。

だからこそ、三輪の気持ちはわからない。

——それは、おまえにだけ許されたことだから。思

「無差別な復讐は、疲れるぞ」

「何……!?

だから、要は「そういう奴ら」を見てきた先輩として、少しのアドバイスくらいはしてやろうと思った。

「お前は近界民を全て殺したいようだが、彼らは俺たちと全く変わらない見た目で、言葉での意思疎通が可能だ。もし仮にお前の言うように「心を持たない」連中だつたとして、言葉の通じる相手を無差別に殺して回るのは疲れるぞ。お前は人間と完全に同じ表情・言動・仕草をする人形を壊せるか?」

「そんなこと……!」

「復讐の相手くらい特定しておけ。四年前の連中とやらを見つけたその時は、俺はもうお前を止めない」

「」

「尋問・拷問好きにしろ。ただ、お前を止めようとする他の奴を俺が止めることもない」

「俺は玉狹の思想をそのまま持つてる訳じゃない。お前が復讐したいならすればいい

……玉狹のみんなは、少し優しすぎる」

わずかに寂しさを滲ませながら、要は最後にそう呟く。

それは要にとって、初めてできた心の拠り所と要自身との間に、どうしても埋めがたい距離を感じてしまうたつた一つの部分でもあつた。

「なぜ……」

——ならなぜ、貴方は。

その言葉を発する前に、要は既に元の無表情に戻っていた。

もはやその顔には、先ほどの悲しそうな面影はカケラもない。

ヴァーツ ヴーツ

「ん……」

沈黙を破った、どこか場違いなバイブルーション。

要は武装している三輪に目もくれずにポケットをまさぐりはじめた。

「……終わったな」

そういうて要が取り出した端末には「迅 悠一」と表示されている。

また奴の手のひらの上か。

——そんな言葉すら出てこない程、三輪の裡にはあらゆる感情が渦巻いていた。

鬼怒田本吉①

「だから、太刀川さん達と戦う時に要は連れて行けないんだつて」
申し訳なさげな迅の言葉に、要は少しだけムツとして返した。

「なんで」

三輪隊との戦闘の一部始終を報告し終えた要と迅は、現在ボーダー本部の廊下の壁に背を預け、ぼんち揚をバリボリと貪っている。

普段なら幸せな筈のおやつの時間も、要のご機嫌はやや斜めといつたところだ。
話題はもちろん、空閑遊真のこと。

彼を取り巻く"この先"について、修がトイレで少し席を外した隙に、迅が要に話をつけていたのだ。緊張で催したのかな、と要は思つた。

「たつた今、三輪隊との戦闘の事で城戸さんから厳重注意受けたろ？　また戦闘行為起
こしたらペナルティくらつちやうぞ」

「……俺は、構わない」

「おれらは気にするの。……さつき足止めしてくれただけで十分だよ。ありがとうな」

尚も言い募ろうとする要の頭を、柔らかに笑う迅の手がわしやわしやと撫で回す。

「……」

こいつは、いつもこうだ。

思わせぶりな言動ばかりしておいて、本当に大事な事は自分一人でやろうとする。でも迅は、他に手が無いのなら他人の力を頼ることができる人間だ。

より良い未来を掴む為の努力を、彼は一瞬たりとも怠らない。

——つまり結論を言えば、今回の小競り合いに要の力は必要ではなかつたかも知れない、という事だ。

あらゆる未來の枝葉を見通す規格外の副作用。

少なくとも今回の一件において須賀要の力は、空閑遊真の護衛、そしてその先のもつと大きな目的のために、迅が幾重にも幾重にも張り巡らせた保険の内の一つでしかなかつたのだ。

それが、悔しくて、情けなくて。

保険として扱われた事が、ではない。
もつと俺を使い潰していくのに。

「……よこせ」

「あつ、おまえ袋ごと！」

「すみません、お待たせしました……どうしたんですか？」

バリボリ、と乱暴にぼんち揚を噛み碎く音がトリオン製の廊下に反射する。丁度戻ってきた修が、ドカ食いする要の様子に困惑していた。

(迅、お前は……)

いつか、もつと俺を頼ってくれるだろうか。

いつか、もつと俺を使ってくれるだろうか。

いつか、もつとお前の力になれるだろうか。

それは規模スケールとしては異常だが、方向として正しい方を向き始めた、少年の家族への献身欲だった。



「おい、須賀！ 貴様、今日は定期メンテナンスの日だという事を忘れてないだろうな！」

開発室で待つていろ！」

ふと、背後からそんな大声が聞こえてくる。

廊下の先で既にやや小さくなっている司令室から響くその声は、ボーダーにおけるト
リオン技術の研究・開発事業を束ねる鬼怒田本吉のものだ。

「……」

正直、つい先ほどまで長々と迅と城戸派連中の腹芸を真横で見せつけられた要として
は、一刻も早く家へと帰りたかった。

「だつてよ、要」

「……面倒だ」

「おい」

迅からかつぱらつたぼんち揚の袋に手を突っ込んでいた要だつたが、渋々といった様
子で大袋を迅に手渡し、振り返る。

「修も、先に行ついてくれ。遊真と千佳も待つていてるだろうから」

「あ、はい……あの、須賀先輩」

「何だ」

「……本当に、ありがとうございました」

要の目を真つ直ぐ見た後、修は深く頭を下げる。

要と三輪隊との戦闘をギリギリまで知らなかつた修にとつて、「知り合つたばかりの
人間が、自身の危険や立場を省みずに自分達を助けてくれた」という事実は、深く大き

な感謝を抱かせるのに十分なものだつた。

——それが普段、自分が他人にしている事だと自覚しないままそれに対して要はゆつくりとかぶりを振つた。

「お前が頭を下げる事じゃない」

それは謙遜などではなく、偽らざる要の本心だつた。

要が守るつもりだつたのは遊真であり、あの場に修がいようがいまいが要の行動に変更はなかつただろう。

千佳の事といい遊真の事といい、自分より他人を優先する修の心理を要は理解できない。

——それが「こっち」に来てからの自分と似通つたものであると気づかねいます。

「じゃあ、また」

「はいよ」

「はい！」

迅と連れ立つて歩く、最近できた友人の背を見送る。

いくら遠ざかつていく修の後ろ姿を見つめても、彼の心理を要は理解できなかつた。ただまあ、悪い気はしないのが不思議だつた。



要が元々所持していたトリガーのメンテナンスは、定期的に玉狹支部と本部開発室の両方で行われている。

などといふものは建前で、實際はただの保存データのサルベージ・解析作業である。

近界最高峰の技術力の一つと言われた国の產物を、何とかしてモノにできないかと試行錯誤しているのだ。

得られたデータは本部と玉狹で相互に共有されており、本部の潤沢な設備や、玉狹独自の近界民(ネイバーズ)からの視点による多角的なアプローチが試みられているようだ。

「ホレ、さつさと出さんか」

「はい」

言われるままにトリガーを差し出す。

鬼怒田はそれを一度忌々しそうに見つめながら、作業に取り掛かつた。

「まつたく、今回もまた余計な手出しをしくさりおつて……」

「すみません」

「お前達の形だけの謝罪なんぞ耳にタコができるほど聞いとる！」
玉猪

ぶつぶつと、要が見る限り常に不機嫌そうな鬼怒田は、しかし愚痴に夢中になつて手元が疎かになるということではなく、慣れた様子で機材を動かしていた。時おり開発室のエンジニアに遠まきに指示を出す鬼怒田を見ながら、要は相槌を打つだけだった口を自分から開く。

「……三輪は」

「ん？」

「三輪は、近界民^{ネイバ}は全て敵だと言つていました」

「……奴の事情を慮れば当然じやろう」

いつもより幾分か穏やかな聲音で鬼怒田が応える。

それが三輪への哀れみによるものなのか、要にはわからない。

「なら、俺は？」

「」

鬼怒田は何も言わなかつた。

言葉に窮したという様子ではなかつた。

ただ、要の口からこういう質問が出てくる事を初めからわかつていたかの様に、彼は落ち着いた手つきでトリガーの解析を進めていく。

「俺は、長く「むこう」で生きてきて、多くの人間を殺しました」

死なないために殺した。

殺される前に殺した。

殺して殺して、時には味方さえ手にかけて。

「最近、考えます。彼らにも当然、家族がいたのだろうと」

——手遅れになつてから後悔したつて、意味がないんだ!!

三輪の言葉を思い出す。

そういえば、残された者の声を聞くのは、あれが初めてだつた。

とつぐに「手遅れ」になつてしまつた要にはそもそも、三輪を止める権利など無いのかかもしれない。

「もしかしたら彼らは、俺と同じように無理やり戦わされていたのかもしれない」

気づくのが遅すぎたくらいだ。

「そんなこと考える暇なんてありませんでした」などという言葉は詭弁に過ぎない。

目蓋を開けばそこにある問題から、顔を逸らしていただけだ。そうしているという自覚がなかつただけで。

「そんな彼らをたくさん殺してきた俺は、三輪の言う近界民（ネイバ）と何が違うのでしょうか」
びくり、と。

機材をいじる鬼怒田の指先がこわばり、そして止まる。

「俺の過去を知った三輪は、俺を……殺すでしようか」

絞り出すように紡がれた言葉が、開発室の無機質な空気に溶けていく。

この言葉をどんな表情で口にしているのか、要は自分でもわからなかつた。

「お前は、殺されたいのか」

「いえ」

死にたくない。

死にたくない。

「むこう」にいた時からずっと、ずっとと思い続けてきたことだ。

そう思い続けていたからこそ、戦い抜いてこれたとさえ考えるほど。

「……そういう訳には、いきません」

——でも不思議なんだ。よくわからないんだ。

三門は「むこう」に比べて遙かに平和なはずなのに、「むこう」にいた時より今の方が
ずっと死にたくない、いや、生きていたいと思つている。

「でも」

だけど。

「三輪の気持ちは、少しだけわかります」

自分の両親のためにわざわざ花を供えてくれる幼馴染がいる。

その子は自分の事を死んだと思つていて、自分が生きていたこと、その子の事を忘れてしまつた事を知つて、泣いてくれた。

どれも人を想う気持ちが織りなす、綺麗で、そして悲しいモノだつた。

人を想う気持ちは、それが大きければ大きいほど、壊れた時の反動はそれに比例するものなのだ。

同じだ、三輪だつて。

「……だから、三輪が俺を殺そとをするのなら、それは仕方のない事だと思います」

「無差別の復讐は疲れるぞ」と、要は言つた。

知つたことか。

もしあの時、そう返されてしまつていたら、要にはもう言える事など無かつたのだ。

疲れようが傷つこうが血反吐を吐こうがその果てに死のうが、それでも近界民ネイバという大きなくくりを、どいつもこいつも誰彼構わずぶつ殺してしまいたいのなら。

それはもう、要の手に負えるようなモノではない。

復讐に取り憑かれた壊れた獸を、せめて殺してやるか。

「お前の気持ちもわかるよ」と言つて友人が殺されるのをだまつて見ていくか。

その分かれ道しか残されない。

それらの道は崖つぶちに造られていて、間や周りにもう一つの道なんてないのだ。

「……やはりワシは、お前達のことが気に食わん」

要の話を静かに聞いていた鬼怒田が、いつもの不機嫌な様子で吐き捨てた。

「お前も、三輪も。……本音を言えば、お前達小僧っ子を戦わせるボーダーの体制も、すべて気に食わん」

力タカタと、機材の操作パネルを叩く鬼怒田の指先にわずかに力が籠る。

「どいつもこいつも何の疑問もなく武器を手に取り、訓練と称してゲーム感覚で人を斬り、撃ち、その感触を手に残したまま化物を斬つて捨てる。

ワシの娘とそう変わらん歳した子供達が人間の首を刎ね飛ばしているのを見るたび、寒気がするわ」

——そして何より気に入らないのが、「子供の方がトリオン器官が発達するから」などと言う理由で子供達が戦うことを許し、そんな彼らに頼らなければならない自分達だ。

「子供なんぞとつとつこの街を出て、勉強でもして暮らせば良いものを……」

忌々しそうにそう締めたあと、鬼怒田はちら、と要に目を移した。

「ワシは件の空閑とかいう小僧を始末し、黒トリガーを押収する事に否やは無い。微塵

もな。近界民^(ネイバ)を排除し街を守る。それがボーダーの仕事だからだ」

鬼怒田の視線が要を刺す。

それはまるで、玉砕が本部とやり合うこと、空閑遊真を守る事の覚悟を問うかのような眼差しだった。

「やるというからには徹底的にやることだ。準備不足で負けたのを相手のせいにすれば、後悔するのは自分だぞ」

その、脅すような視線がどうにもおかしくて、要は鉄面皮を少し緩めて言つた。

「室長は、優しいですね」

「やかましいわガキ。言つとくがワシも城戸司令も容赦なんぞせんからな。迅のヤツにもそう伝えておけ」

「理解しています」

いつのまにか鬼怒田の操る機材の動きは止まつていて、要の言葉に頭をはたいた鬼怒田の平手の音だけが、基地を構成するトリオンの壁に溶け込んでいった。



「おお、これは……！」

解析結果、いわばトリガーのカルテのような書類を眺めてながら、鬼怒田の感嘆の声が要の耳朶を叩いた。

「素晴らしい！ ブラックボックスのデータサルベージが一步進んだ！ まつたく、手間をかけさせおつて！」

ひどく興奮した様子の鬼怒田が、嬉しそうにデータを見比べていく。「何イ!? 解凍に200時間!? ええい焦らしむる……！」

かと思えば、頭を抱えてモニターへ怒鳴っている。忙しい人間だ。

(少し、似てるな)

その姿に、重なる面影があつた。

記憶は擦り切れ、喉が焼け、目が潰れて耳は溶け落ちた鉄色の記憶。

その中でただ一人異彩を放っていた少女の姿が、ふと脳裏に蘇った。

他の奴隸と飼い主のように、全くの一方的従属関係だった。

面倒な絡み方をしてくる事は時々あつたが、要が面倒くさいと思えばすぐに引き下がるような、妙なところで気の利いた人間だつた。

しかし所詮は奴隸と飼い主。

ろくに話をすることも無いまま、戦争は佳境へと突入し、すぐにコロニーは攻め込まれ、そして要は世界を飛んだ。

(こんな事なら、もう少し話しておけば良かつたか)

本当の名前も知らない彼女。

人となりも知らない彼ら彼女ら。

ろくに誰かと交流する事もせず、ただ死から逃げるために命を擲つように戦っていたかつての自分。

今だからわかる。

そう、要は逃げていたのだ。

死からも、生人からも。

人と関わり、愛し、愛され、そして喪う事を。

それも良いだろう。そういう生き方もある。事実要がかつてそうだった。
でも、もう。

『ならまず、私とお友達になりましよう?』

知つてしまつた。毒の味を。

『やるじやない。ま、玉狹うわの前衛フロントなんだから当然よね』

毒だと、そう思つていた。

『なんで、私を、近界民彼らを恨まずにいられるんですか？』
があつたのに、さつきみたいに『それは違う』って言えるんですか！』

實際、毒なのだろう。

『——家族つてんだ』

だつてもう、あいつらの為なら死んでもいい、なんて。

『要エ！ ブース空いた！ オラもつかいやんぞ！』

たつた一つだけ貫いてきたものさえ、今の要はもう捨てかけてしまつてゐるのだから。

須賀要は、きつとこれから弱くなるだろう。

情という病に冒され、他人の痛みさえ分かるようになつてしまつた。

判断は鈍り、決断は遅れ、振り下ろす手さえ固まつてしまふかも知れない。

それでも、大切と思った、そう思わせてくれた人達と一緒にいたい。

(何かが少し違っていたら、貴女にもそう思えていたのか、先生)

応える者は、もう居ない。

開発室の窓の外、遙か眼下に見える木から、枯れた葉が一枚、舞つて落ちた。



「今日はここまでじゃ。ご苦労、とつとと帰れ」

「はい」

一通りデータを漁り尽くしたのか、すっかり落ち着いた様子で鬼怒田がデータを書類に纏めながら要を見やる。

デスクの上に置いていたコーヒーカラ立ち上っていた湯気はとつくに消えていた。

「おい、お前のトリガーの^{オブショウ}拡張機能についてだが……」

「……？ 何の事ですか？」

要は首を傾げた。

要のトリガーに拡張機能などない。

そもそもアレに拡張の余地などない。

その必要もない。

十年来の相棒だ、それくらいは分かる……と言いたいところだが、要の知らない機能

が眠っているという可能性も無いわけではない。

そうであれば、要是十年以上使つてきたトリガーすらまともに使いこなせないということになる訳で、それはそれで複雑な思いだつた。

「？」

しかしそんな要の言葉に、今度こそ鬼怒田は目を見開いて絶句した。

鬼怒田から見ても要に惚けている様子はなく、ただ純粹に鬼怒田が何を言つているのか理解していらないようだつた。

「お前、まさか」

「？」

零された言葉が宙に解けて溶ける。

鬼怒田は怪訝な雰囲気でこちらを見る要を無視して一度目頭を揉み、そのまま思考の海へと潜つていつた。

「……いや、有り得る……移行か、いや、保存する理由が……そもそもボーダーとて……」「……」

要を放り出してぶつぶつと独り言を呟く鬼怒田。

もうこれ以上いても無駄だろう。
情報は知るべき時に知らされる。

要はさして「向こう」での記録や情報に興味は無いので、上層部で勝手に役立てて欲しい。その上で要が知る必要のある情報は適宜共有してくれるだけでいい。

要は荷物をまとめて帰宅の用意を始めた。

「失礼します」

「んん……ああ、ではな」



開発室の扉を出て、遠ざかっていく須賀要の背を見送りながら。

「…………」

鬼怒田本吉の裡には畏怖と侮蔑がごちや混ぜになつた、どす黒い感情が蟠つていた。

「…………チツ」

——倫理を捨てれば、技術の進歩は飛躍する

獅子身中の

「ありがとう……ござい、ました……」

ぜえぜえと息を切らす修がなんとか言葉を絞り出した事で、模擬戦の終了の合図となつたようだ、という事に要は気がついた。

どさりとソファに倒れ込む修を見下ろしながら、ドリンクのストローを咥えた烏丸と、その横で二人の模擬戦を先ほどまで観戦していた要がほぼ同時に口を開いた。

「修、おまえ弱いな」

「どうするんだ、こいつ」

うぐ、と固まつた修が居心地悪そうに冷や汗を流しながら横たわる姿を見ながら、要是二人の模擬戦を思い返していた。

動きが遅い。

判断も鈍い。

そもそもトリオンが低い。

総評、どうしようもない。

要のいた国ならばトリオントンク一直線コースの低スペックである。

「鍛えるには時間がかかるな」

まあそれは現時点での評価であつて要に修の伸びしろなんて分からないし、修がそれでも戦闘員をやりたいなら口出しする事もない。自分の好きな道を選べるのが玄界の良いところだし、危なくなれば自分が守ればいい。

「どうか須賀先輩。同じレイガスト使いなんだから先輩が教えればいいじゃないすか」

「すここー、とストローを咥える烏丸が不思議そうに見やる。

「うん、時間があつたら代わる」

要とて、この先輩思いのよくお菓子をくれる後輩を楽させてやりたい気持ちはあつた。

修の指導が面倒だからという理由の会話ではない。烏丸の思考は先の言葉の通りだつたし、要は、バイトをがんばっているとりまるの負担を減らしたいのだ。

しかし要にも目先の問題が差し迫っていた。

「…………」

小南は遊真と、レイジは千佳と修行の真っ最中だった。遊真の実力は想像通り、いや

想像を超えるものだつたし、千佳に到つてはあれほどのトリオン量を持つた人間がいるのかと要でさえ絶句した程である。

ちらりと壁にかけられた時計を見る。

もうすぐ日が落ちる。

迅はない。

玉泊付近の警戒区域ではきっと、派手な戦闘が起ころう。



要はずつと考えていた。どうすれば遊真の件をやり過ごせるだろう、と。

遊真が近界に帰ろうとしていればただ帰郷を急かすだけで十分だつたが、彼がボーダーに入隊しようとしている以上話は変わつてくる。

城戸をはじめとした上層部の面々は、要にとつては氣の良いおじさんであるが、
ボーダー^{ボーダー}
境界防衛機関として近界民の問題に対する時の彼らは氷の眼差しを持つた司令官でも

ある。

彼らが要にとつて優しいおじさんでいてくれるのは、単に林藤達の尽力により要が玄界民であると上層部に見做されたからにすぎないのだ。出生からして間違いなく近界民である遊真はその限りではない。

立場と責務故に遊真に対処しようとする司令部に要は共感する。自分が同じ立場なら同じことをするからだ。

そして、一度は退けた三輪もまだ諦めてはいないだろう。

結論として、どうあつても衝突は避けられなきそuddつた。

(…………死ぬかもな)

——空閑遊真と三輪隊の衝突から始まる黒トリガー争奪戦。その最終局面。要が心中でそう呟いたのは、遠征部隊と迅悠一が対峙する僅か前日の事だつた。



「嵐山…………ツ」

ギリ、と三輪の拳が強く握りしめられ、グローブが軋む音が響いた。

玉泊にいる近界民の排除、及び黒トリガーの確保のため玉泊へと向かつて太刀川隊・風間隊・冬島隊・三輪隊からなる襲撃部隊は、予想外の足止めをくらっていた。

「嵐山隊がいればこっちが勝つよ」

黒刀の柄に手を掛け、憎らしい笑みを浮かべる迅悠一の背後には、ボーダー全体で見ても屈指の連携力を誇る手練である嵐山隊が武器を構え、三輪達に相対している。

「おれのサイドエフェクトがそう言つてる」

『未来視』のサイドエフェクトによる勝利宣言。

他人が口にすれば挑発でしかないそれも、この男が言えばそれ以上の意味を持つ。

「面白い」

迅の言葉に誰もが警戒を深める中で、唯一、闘志を露わに白刀の鯉口を切った男がにやりと笑つた。

「久々に、おまえの予知を覆したくなつた」

「太刀川さん……」

鞘からぬるりと引き抜かれていく刃が、淡いトライオンの光で警戒区域を妖しく照らし

始めた、その時。

「なんだ、まだ始まつてないのか」

丁度向かい合う両者の間に位置する細い路地から、一人の男が姿を現した。

林藤匠から譲り受けたといいういつもの黒いマフラーに、学ラン姿でスクールバッグを肩にかけたその出立ちは、どこからどう見ても帰宅途中の高校生にしか見えない。

だ。
「何……!?

驚愕の声を上げたのは恐らく三輪だろう。だろう、といいうのはその場にいる全員が隣にいる者の顔さえ意識の外に追いやりるまでに路地裏から現れた男に注視していたから

「須賀……!」

「おー」

少し遅れて、風間と太刀川がそれぞれ『らしい』反応を返した。

その様子に少し安心しつつ、要はざくざくと歩いて迅の隣に立つた。

「これもお前の予知の通りか? 迅」

「……まあ、ね」

迅の返答は歯切れが悪い。

それは自分の暗躍がばれた後ろめたさというよりも、「要が此処に来てしまったこと』そのものに対する諦観が大きいように要には思えた。

「須賀、退け。俺達は今城戸司令直属の任務で動いている」
迅、嵐山隊に続けて三度目の予定外の闖入者に対しては流石に混乱も一瞬だったのか、風間がまず警告した。

「知っている」

「……三輪隊との戦闘ではお咎め無しだった様だが、今度はそうは済まんぞ」
要の短い返答に、風間は目の前の少年が事情を知りつつ自ら首を突っ込んできた事を悟り、続く言葉が脅しめいたものへと変わる。

それでも一応は警告の体で話しかけてくれるあたり、この男もまた優しいやつだ、と要は思つた。

「こちらの台詞だ。この任務を証明する司令部の令状等に類する証拠はあるのか?」

とはいえ、それとこれは別である。付き合いが短いとはいえ友人の命がかかっているので情に流されている場合ではない。
要の言葉に風間はびくりと眉を動かした、よう見えた。帰還早々即出撃しているあたり、そういった用意をしておく暇も無かつたのだろう。

巧遅より拙速を選んだという事は、そうしなければならない理由がある筈。
もしかしたら遊真の黒トリガーは、例えばチャージ式の機構を備えたモノのように時
間が経つほど強化されていくタイプなのかもしれない、と要は思つた。

休題。

「……無い、と言えばどうする」

「信じるに値しない。出直せ」

「おまえ……！」

風間の応えをばっさりと切り捨てた要に、三輪が怒りを露わにした。

要はそれを視線すら合わせずに無視した。三輪のことは嫌いではないが、戦闘中なら
与し易いのでともかく、会話の場で怒った人間を相手にするのは基本的に面倒くさいか
らだ。

「おいおい要つち、久々に会つたと思つたら随分ピリピリしてんじやねーの」

「当真」

一触即発の空気が更に張り詰めてきた時、風間の横にぬつ、と長身の影が並び立ち、要
を宥めるようにして茶化した。

やや獨特な髪型の同級生の戯けた様子にイラツとした要が、やや不機嫌に言葉を返
す。

「どーしたよ。そんなんじや那須に嫌われるぜ?」

「だまれ。その変な髪型を千切るぞ」

「酷くねえ!」

「それとおまえには遠征期間中の課題がたんまり溜まっている」

「あれえ!? おれ先生にちやんと言つといたよな!」

「確認書類の提出を忘れていただろう」

「…………」

当真は押し黙つた。長い沈黙だつた。

やがて当真は胸の内ポケットから櫛を取り出すと、ゆっくりと丁寧に自慢のリーゼントを梳き、手で軽く形を整えたあと、風間を見て言つた。

「風間さん、おれ帰つて課題やつていい?」

「真木、こいつを黙らせろ」

恐らく通信越しに何かを言われたであろう当真が一瞬にしてナマコのようにふにやふにやになつて落ち込んでいるのを尻目に、要は背後でずっと成り行きを見守つていた男を見る。

「迅、俺はやっぱりおまえの態度が気に食わない」

「…………」

要は、自分が近界から来たという事実をどいつもこいつも腫れ物のよう扱つてくる事にいい加減辟易していた。

百歩譲つて他のやつにどう思われていようと構わないが、よりもよつて玉狹のメンバーからそういつた扱いをされる事に、ついに我慢の限界を迎えたのだ。迅が他の玉狹の面々にこの再襲撃を知らせなかつたのは何か考えがあつての事だろう。

要に、「おまえは連れて行けない」と言つたのも、何か考えがあつての事だろう。そして、迅の言う通りに動けば要が無い頭を振り絞るよりも遙かに良いのだろう。わかつてゐる。全部わかつてゐるのだと、そんなこと。でも。

要は遊真にまつわる今回の一件について多くの情報を有し、実際に対処してきた。迅は未来視であらかじめ知つていたのかもしけないが、それでも三輪隊の襲撃に最初に気づき、そして退けたのは要だ。

それを、負ければ遊真が死ぬ戦いに理由も言わずに「連れていけない」？指をくわえて見ていろというのか。また失えというのか。

ようやく、守るために戦いたいと思えるようになつたのに。

そんなんのはゞめんだ。

「俺は好きにさせてもらう」

もう一度正面の敵に向き直ったあと、要は告げた。



まだ肌寒い三門の夜。
戦場と化した住宅街。生身のままでそのど真ん中に立っている少年がマフラーに手
をかけた。

「あ？」

「何だ……？」

明らかに雰囲気の変わった少年の様子に、相対する襲撃部隊と迅の背後に控える嵐山
隊が困惑の声を上げる。

(違うんだよ、要)

完全に流れの変わった戦場にあって、迅悠一は未来を見通す眼に諦観と悲しみを湛えて少年を見ていた。

——迅の予知では、要が迅の言いつけを破つて現れる可能性は極めて低かつた。

実際のところ、要が戦いに加わればほぼ勝ちだろう、と迅は読んでいた。

それは要の戦闘力への評価もあるし、上層部との駆け引きにおける影響力を加味したものもある。

そして後者こそが、迅にとつては問題だつたのだ。

要是常識が無いだけであつて頭の回らない人間ではないが、腹芸の得意なタイプではない。

普通なら、交渉のテーブルに縁のある様な人間ではないと思われる事だろう。
しかし、須賀要という人間は普通ではない。

(おれは、おまえにそんな事言わせたくなかつたんだ)

抜き放ちかけた師の形見を、迅は再び鞘に収めた。

勝負は終わりだ。

最早自分の出る幕が無い事が、迅には既に見えていた。



「俺は、この街の出身じゃない」
三門

異様な雰囲気の中、要が口を開いた。それは要にとつて嘘であり、真実だ。
要がマフラーを解いて、肩にかける。

「他所からスカウトされて来た訳でもなければ、そもそもこの国の出じゃない」
きつちりと着込まれていた制服のボタンを外すと、そのままワイシャツのボタンも外
して上半身の衣服を脱ぎ去つた。

「おまえ、一体なに

要の突然の奇行に疑問の声を上げようとした風間の動きが、完全に止まる。

それは、太刀川をはじめとした他の襲撃部隊の面々も、嵐山隊の四人ですら同じだつた。

傷痕。

夥しい程の、悍ましい迄の傷痕。

爛れてグズグズになり、赤黒く変色した火傷の痕。くつきりと残る歯型。身体を縦横に引き裂く蚯蚓腫れ。ひときわ大きく、左肩から右脇腹にかけてレールの様に刻まれた縫合痕。その他無数の銃創、刺創、切創。

傷のない場所を探す事が難しい程に、須賀要の身体はボロボロだつた。

「う、うつ」

あまりに醜い惨状に、木虎が顔を青ざめさせて口元を覆う。

トリオン体でありながら生理的嫌悪感に抗えずに嘔吐く音が生々しく響いた。

『…………』

そんな木虎の背をさする嵐山と時枝は通信越しに、かちかち、と歯の震える音を聞いた。

顔を擡める者、目を細める者、表情を変えない者と反応はいくらか別れたが、その場

の全員の視線は数瞬の後にある一点に注がれていた。

「チヨーカー……首輪、か……？」

風間の呟きが静まり返つた放棄区画に響き、動搖していたメンバーを我に帰らせる。黒く、冷たく、無機質な首輪が、須賀要の首に取り付けられていた。

無骨なデザインに赤のラインが淡く光るその装具は、要の過去を知る者からすれば正に囚人や奴隸のそれに見えるだろう。

パチン、と、要が首輪側部のスイッチを弾いた。

『安全装置、解除。付近の市民の皆様は速やかに退避してください』

「トリガー、起^オ動」

囚人が呟く。

一瞬トリオンの放電が走り、夜を照らした。

「やる気か!?」

「チツ……！」

襲撃部隊が身構える。

流石と言うべきか、速やかに武器を抜いた面々が最大の警戒を以て目前の男を見据え

るも、そこにいたのは数瞬前と変わらぬ要の姿だった。

「あ……？」

「油断するな。狙撃手（スナイパー）、いつでも撃てるようにしておけ」

怪訝な顔をする太刀川の横で風間が指示を飛ばす。

目立つた武装は見えない。

ただレーダーに映る強力なボーダー未登録のトリオン反応が、要がトリオン体に換装した事実を証明していた。

「これで証明は済んだだろう」

「は？」

「トリガー、解除（オフ）」

ふう、と一つ息を吐いて、少年はすぐに換装を解いた。再びトリオンの放電が瞬き、光が収まつたとき、レーダーから要のトリオン反応は消えていた。

「須賀、君は……」

背後の嵐山が小さく要の背に声を掛ける。迅は、悲しそうに要を見ていた。

要是呆気に取られる周囲を気にする事なく、いそいそとワイシャツに袖を通して、

「俺は近界民だ」
〔ネイバ〕

朝の挨拶の様にそう言つた。

「な……………に、を」

その場の全員が絶句するなか、辛うじて三輪が声とも言えない音を絞り出す。

「何を』？ 寝ぼけるな。自分達の責務を忘れたか？」

少年はワイシャツのボタンを締めるのに手こずつて いる様で、もぞもぞと手を動かしながら、本当に不思議 そうに疑問を返した。

ようやくワイシャツのボタンを締め終わると、今度は学ランに袖を通しながら話を続けた。

「遊真を殺すなら俺を殺してから行け」

そして要は、当然の成り行きの様に自分の命を差し出した。



気が狂いそうになる感情の濁流に飲み込まれながら、綾辻遙は辛うじてモニターから目を逸らさずにいる事に成功していた。

綾辻は、初めて本当の惡意を見た。

人間の罪と、邪惡の凝固が、一人の少年の身体にへばりついているさまをこの目で見た。

彼の身体に刻まれた傷痕過去そのものが、綾辻にとつては後悔と憎悪の対象であるという事を、彼女ははつきりと自覺したのだ。

『俺は近界民ネイバだ』

通信から、彼の声が聞こえる。

嘘だ。

おそらくこの場で、綾辻と迅だけが要の嘘を知っている。

すぐに否定したかつた。

私は知っているのに。

あなたはこの街の人間だつて。

あなたの故郷は此処だつて。
でも。

狂おしいほどに叫びたくなる気持ちと喉をどうにか抑えて、綾辻は要を見た。
『遊真を殺すなら俺を殺してから行け』

いや。

そんなのいや。

どうしてそんなこと言うの？

冗談でもそんな事言わないでよ。

また失えつていうの？

ようやく、今度こそ守れるように戦おうつて思える様になつたのに。

そんなのはいやだ。

「…………」

嵐山の視界を通じてモニターに表示される要の姿を見て、綾辻は俯いて目を閉じた。
そうして次々と湧き上がつては膨らんでいく感情を押し込んで、綾辻は黙つて事の成
り行きを見守つた。

綾辻は既に要のやろうとしている事に気がついていた。
そこに、余計な口出しが無用だと言うことも。



「そんな事、信じられる……訳が……」

震える声が漏れ出す。

冬の夜の冷たい空気が三輪の口を震わせたわけではなかつた。

「証拠なら出した。お前のレーダーには未確認のトリオン反応が映つていた筈だが」

呆然とうわごとの様に拒絶の言葉を繰り返す三輪に対して、要は遮る様にして現実を突きつける。

「それに、俺の入隊は城戸司令に承認されている。俺が許されて遊真が許されない理由は何だ？」

「それは……」

「要の質問に、三輪は答えられない。

もはや三輪は、正常な判断力を持ち合わせていない。

「そもそも、なぜ近界民である俺の入隊を許可したのか。そこを城戸司令に聞いてみたらどうだ」

怒り、憎しみ、困惑、疑問。

最大の近界民被害者だと思つていた須賀要が、近界民そのものだつた事。

城戸司令が、その須賀要を近界民と知りながら入隊させていた事。

自らの信じていたものが次々と精神とともに揺るがされていく状況に、もはや暴れる動悸と乱れる息を収める事にしか意識が割けなくなつたとき、三輪の右肩にぽんと大きな手が置かれた。

「まーまー、落ち着こうや」

三輪にとつて不愉快な声だつたが、今は肩に置かれた手が暴れる心臓を直接押さえつけているかの様に、三輪の動悸が不思議と収まっていく。

「動搖して向こうのペースに乗せられてるぞ。そもそも、須賀の言葉が本当だつて根拠がどこにある？ それに、おれ達の今の目的は『玉狹の』近界民なんだから須賀については後回しでいいだろ」

「確かに……」

太刀川の言葉に歌川が反応する。みるみるうちに平静を取り戻していく隊員達を見

て、要は面倒くさそうに目を細めた。

「さつきのトリオン反応も根拠としては弱い。遠征部隊おれんせいぶたいが近界から持ち帰つたボーダー未登録のトリガーを使つてゐるだけの可能性もある」

「あー、そうそれ。風間さんやるう」

「うるさい」

太刀川の言葉を補足するように風間が続ける。太刀川がおどけて風間を茶化した。

——二人とも、要の身体の傷については触れなかつた。今は部隊の士気を保つ事が最優先だからだ。

「ハツタリとしちゃ上等だが、任務を中断する理由にはならないな」

動搖を見せず、濶みなく。A級一位部隊隊長、太刀川慶はバラバラになりかけた自軍の士気をまとめ上げた。

主に若い隊員達がどこか安心した様に武器を握り直し、再び強い眼差しで要を見据える。

「……」

先刻よりもさらに強い意志で向けられる切先に感心しながら、要は足元に置いたスクールバッグをこそごと漁り、紙のファイルケースを取り出した。

「それは……」

「本部から抜き出して来た俺の情報だ。この街に来るまでの近界での経歴が全て記されてある」

「それの、何が」

風間が訝しむ。要について後回しでいいとわかつた以上、今此処で要が自分の言葉の真偽を証明しようとする事に意味は無い筈だつた。

『機密』の二文字が赤く記されたファイルケースを前に掲げながら、要はさらりと告げた。

「俺の要求を飲まないのなら、これを警察、政府、メディア各社、そしてボーダーの全スポンサーにばら撒く」

な

幾度目かの激震が警戒区域に走る。

「言うまでもない事だが、ボーダーは終わる」

お前ツ

【近界民の排除】を旨としていた筈の組織の内部に、既に近界民が存在していた。

この事実がいきなり明るみになつた時、果たしてボーダーが被る損害の総量はどれだ

けのものとなるのか。

「簡単な事だ」

淡々と告げる声に抑揚は無い。

「お前達が引くなら俺はこれを持つてお前達と共に本部に戻り、今回の件に関して司令部の裁定を待つ」

この場にいる全員の知る須賀要の、いつもと変わらない姿そのものだった。
誰もが理解した。

——こいつは、本気だ。

「だが引かないのなら、俺はボーダーを壊してでも空閑遊真に付く」

要の狙いは最初から城戸派と正面から戦う事ではない。戦わずしてこの場を收め、『須賀要個人の暴走による事件』とすることで玉狹と本部だけでなく、本部内部での摩擦も最小限に抑える。

二度通じる手ではないが、少なくとも今回だけ『いつかはこういう事をやるかもしない』と思っていたが、案の定須賀要がやらかした』とさえ思つてもらえれば儲け物程度の認識でしかない。

「ん——……」

「………」

太刀川がため息と共に顎に手を当て、髪を撫でた。

他の隊員も突然の流れについていけず、太刀川と風間の指示を待つ様に二人を見る。

「やはりハツタリだな」

しかしそれも、風間を丸め込むには不十分だつたらしい。かけら程の迷いも見せず、風間は沈黙を破つた。

「おまえの素性やその書類の真偽はともかく、そんな事をすればとばつちりを受けるのは他のボーダー隊員達だ」

きつぱりと要の言葉を嘘と断じた風間が淡々と根拠を述べる姿は、要の目にはまるで小南の観ていたミステリー映画の探偵の様に映つた。

「お前がその空閑とやらに執着する理由はわからん。が、ボーダーを壊しても構わないと言つたが、おまえは玉砕の連中にそんな事が出来るような人間じやない。それくらいは俺にでも分かる」

風間は確信した様に断言する。

その顔には何の疑いも動搖も無かつた。

「俺たちは任務を続行する。おまえについては太刀川の言う通り、その後に対応すればいい」

「試してみるか？」

要はそう言つてファイルケースを掲げたまま、自分の首に黒く光る首輪をコツコツと突く。

要の持つ書類だけではなく、その首のトリガーもまた、多くの情報が詰まつてゐる事は確実だろう。

メディアの連中が『あることないこと』書いてボーダーが揺らぐには十分に過ぎるようと思えた。

「俺はどちらでも構わない」

「……」

わからない。

この場では判断ができない。

しかし一度本部にさえ戻れば事の真偽がハッキリする。ボーダーそのものを左右する爆弾について、だ。

「これが最後だ」

要はファイルをスクールバツグに仕舞い、冷たく言い放つ。

「引け」

お互ひ、言うべき事は全て言つた。だらだらと会話を引き延ばすつもりなど要には毛頭無い。あとは今ここで結論を待つだけだ。

「…………」

風間が口を開くまでの束の間、沈黙が場を支配した。

太刀川は判断を完全に風間に委ねたのか、一度は刀を抜いた弧月を收め、腕さえ組んでつまらなさそうな目で事の成り行きを見守っていた。

三輪の瞳には未だに、ぎらぎらとした暗い炎が闇に浮かんでいる。

「……行くぞ。確かにこいつの話は俺たちの手に余る」

「風間さんツ!!」

三輪が声を張り上げる。胸ぐらに掴みかからんばかりの勢いで詰め寄るも、じろりと冷たい眼光が身体を貫き、三輪は思わずたじろいだ。

「三輪。これは組織そのものを左右する判断だ」

風間が口にしたのは慰めでも謝罪でもない。ただ簡潔な事実のみだ。
おまえの感情に付き合っている暇は無いと、風間は言外に切り捨てた。

「受け入れる」

それをあえて口にしなかつたのはせめてもの気遣いか。しかしそんな事は三輪に
とつては関係無い。

「…………ツツ!!」

声なき叫びと共に行き場を求めて振り抜かれた拳が、警戒区域のコンクリート壆の一

部を粉碎した。



「悪いな。無駄足を踏ませた」

「気にしないでください」

「俺達の事はいい。でも君は……」

「気にするな」

襲撃部隊に同道、もとい連行される直前、ついぞ戦闘が起きず出番の無くなつた嵐山隊の方へ歩みよつた要は、嵐山に対しても小さく頭を下げる。

嵐山と時枝の二人と会話する横で、木虎が気丈に振る舞いつつもやや怯えた目で要を見ていた。

「木虎も、悪かった」

「い、いえ」

木虎は目を合わせない。それは目を逸らしたというより、要の制服の下にある身体、

もつと言えばそこにこびりついた夥しい数の傷痕に思わず目が行ってしまうのだろう。そもそも血を見る事自体が希少なこの世界では、要のような身体は珍しい筈だ。木虎には悪い事をした。

「こんどとりまるに一緒に遊んでやれって言つておく」

「えつ、あつ、えツ!?」

慌てている。たぶん嬉しいのだろう。

木虎はとりまると遊ぶのが一番楽しい様だつた。

まだボーダー入隊間もない時、やたらと喧嘩をふつかけてくる木虎を返り討ちにしていた頃はこんな風ではなかつたのだが、この反応を見るによつぽどとりまると遊ぶのが樂しいらしい。

普段何をして遊んでいるのか、要は少し気になつた。

そして、最後。

通信の向こうで未だに言葉を発さない友だちに向けて、要は呼びかけた。

「綾辻も、ありがとう」

――「だまつていてくれて」という最後の言葉を口にすることは無かつたものの、通信越しの少女に意図は伝わつた様で、「うん」とか細い頷きが要の耳に届いた。

『……ねえ、須賀さん』

「うん」

『もう、あんなこと言うのはやめて』

あんなこと、とはおそらく「遊真の前に自分を殺せ」という趣旨の発言のことだろう。普段の要であれば「近界民である事の自白」や「経歴を使つた脅迫」を加えた三つのうちどれについて言つているのかわからなかつたかもしれないが、なぜだか要は、綾辻のあいまいな言葉の対象が何なのか理解していた。

確実な勝算があつたが故にやや誇張した発言になつていたかもしれないが、それは綾辻を随分——おそらく——心配させてしまつたらしい。

「今日はそもそも——」

『須賀さん』

いずれにせよ説明をしない訳にはいないうだろ、と口を開きかけた要を、ゆっくりと、静かに、重く、冷たく、縋るような声音で綾辻が遮つた。

『やめて。お願ひ』

「…………」

綾辻が、ここまでつきりと怒りを露わにする様子を要は初めて経験した。

おそらく、もう消えてしまつた過去の記憶にすら、そんな綾辻の姿は無かつただろうと半ば確信できるほど。

「……わかった」

『うん。約束ね』

気づけば、要は綾辻の頼みに了承していた。

何の根拠も無い言葉だ。口約束なんて何の意味も無いと考える要にとつて、取るに足らない言葉のはずだ。

それでも、なぜかはわからない。

合理的でない自分が要の言葉を絞り出し、要自身、それを守らなければいけないと感じているのだ。



「余計な世話をしたな」

「…………まさか」

「おまえの役に立てるつてわかつてほしかつた」

「…………知つてたよ、最初から。でもお前にあんな事言つてほしくなかつたんだ」

「俺はおまえに扱いにくい奴みたいに扱われる事の方がずっと嫌だ」

「…………ごめん」

「いい。俺を使つてくれれば」

「わかつたよ…………ありがとう」

「どういたしまして。それと今日のご飯当番おまえだぞ」

「え、マジ？…………読み逃したか」

「カレンダーチやんと見てないだけだろ」

「…………ごめん」

「いいつて。用事を終わらせてさつさと帰ろう」

須賀要③

- 目覚まし時計に起こされる。小南や陽太郎、林藤や迅に起こされる。
- 決められた制服を着て、決められた時間に決まった場所に行く。
- 学校に行き、学生の本分たる学業に勤しむ。
- 基地へ行き、技を鍛え、策を練り、街を守り、人を護る。
- 家に帰つて、ご飯を食べて、明日に備えて眠る。

要が今こうして生活していられるのは、要が玄界の民であると上層部に見做されたからにすぎない。

逆に言えば、要の素性を知るのは上層部や一握りの例外を除いて他にいないという事だ。

ならば、ボーダー未登録の兵器トリガを所持する自称近界民が、正式な手続きを経て既に内

部に所属していたと知った時、彼らはいつたいどうするのだろう？

少なくとも、快くはあるまい。近界民の排除を謳つておきながら、組織のトップ部隊には近界民が素知らぬ顔で在籍しているなど、矛盾もいい所だ。

上層部が慌てて要は玄界民だと言つた所で、彼らの一體誰が信じる？

仮に今回の一件が一般隊員まで露呈して最も反感を持たれるのは間違いなく城戸派だろう。

むしろ視点を変えてみれば、ある程度ボーダーの内情を知つている者からすれば玉砕が長期的に見て近界民とともに相互的な安全保障を目指していたであろう事は想像に易いし、今回の件もややキッカケが唐突だった感は否めないものの、「玉砕のやりそな事だ」と納得できるものだつた。

そうなれば「須賀要近界民の入隊が既になされていた状況」は、「それをすんなり受け入れていた本部と玉砕の力関係が既に逆転していた」と捉えられる可能性すらあり、それが嫌ならば内々に処理する——つまり遊真の入隊を受け入れるほかない。

それが結果論でしかないという事は重々承知しつつも、彼らの言うところの「つらい過去」だの何だとやらを持っていると、玄界では随分と楽に生きられるものだな、と要是思つた。



「さて」

司令室の巨大な卓上に置かれた紙のファイルケースを前に、城戸は重々しく口を開いた。ヒリついた雰囲気の司令室に声が溶けていく。

「どういうつもりか説明してもらおうか」

半開きのファイルケースからは中の書類が覗いている。

一眼見てそれなりに使われていたであろう事がわかるその紙は、少なからずシワが寄つていた。

――等間隔で罫線の引かれたその書類の上部には、拙い字で「げん文 3ねんCぐみ 須賀要」と記されている。

「それは授業で使う紙です」

「ふざけているのかね?」

針の筵の中に居てなお素知らぬ顔で惚ける要に対して、思わず苛立ちを隠せなかつた根付が声を張り上げた。

タバコに火をつけようと口元を手で覆う唐沢、瞑目し腕を組んで深く椅子に腰掛ける忍田の両名を除き、ボーダー司令部の面々はみな苦虫を噛み潰した様な表情をしてい る。

——わかっているのだ。この青年のハツタリにまんまと踊られたという事は。

「俺は機密情報を持ち出してなどいませんし、その権限もありません。襲撃部隊が撤退したのは、彼らがそれを機密情報だと勘違いしたが故の判断ミスです」

「よくもぬけぬけど……！」

ぎり、と握りしめた拳とともに絞り出すように、鬼怒田が声を漏らした。

「それに、貴様のトリガーは使用を厳格に禁止していたはずだ!!」

「換装しただけです。俺のトリガー固有の兵装又は機能の一切を展開していません

「そんな言い訳が罷り通るか！ 決まりは決まりじゃ!!」

「だんつ！ と叩きつけた拳がテーブル上の封筒をびりびりと振るわせる。

その剣幕に微塵も顔色を変える事なく、要は悪びれもせず言葉を続けていく。

「事実としてトリオン体への換装しかしておらず、兵装の展開も戦闘行為も行われなかつた以上、起動したトリガーが何かという点は問題にならないのでは」

「屁理屈を……！」

とどめの様に告げられた要の言葉に、今度こそ鬼怒田は頭に上つた血を抑える様に眉間に手を当てて黙り込んでしまつた。もつとも、まだまだ言いたいことは山の様にあるとその形相が物語つていたが。

「また、換装による被害も出ていません」

「うん？ それは違うよ、須賀くん」

ダメ押しに付け加えた要の言葉を、今までなかなか火の点かないライターに苦戦していた唐沢が遮つた。

最初の一服を大きく吸い込み、ほう、と紫煙を燻らせた唐沢は、「どうぞ」とでも言うように城戸に目配せをして、もう一度ニコチンを肺に送り込んだ。

「君の目的は理解している」

場を譲られた城戸が、テーブルに肘をついた左手の指で、顔を縦に奔る傷を抑えながら要に舌鋒を突きつけた。

「君は眞実とは異なる情報につき悪意を以てこれを摘示して他隊員を混乱させ脅迫し、

よつて更にボーダーの運営及び市民の保護に関する重要な任務の遂行を著しく妨害した。どちらも重大な隊務規定違反だ」

城戸が滔々と罪状を読み上げる。

厳しさと鋭さを宿す城戸の瞳が、うろの様にからっぽな黒で塗りつぶされた要のそれとぶつかり、冷たい火花を散らした。

「空閑遊真は玉狹支部への入隊手続を終えています。隊員同士の戦闘を避ける為のやむを得ない行為です」

「正式入隊日までは本部ではいかなる者もボーダーの正隊員とは認めていない」「知りませんでした」

「そんな言い分が通るとでも?」

素知らぬ顔で言い放つ。

要にとつてここまでただの確認作業。『予想通りの展開』以前の問題でしかない。

本番は此処からだ。

「俺は二年前の入隊時、玉狹で入隊手続を終えた日から本部でも正隊員と同等の待遇を受けています」

「…………！」

「そう来たか……」

要の言葉に城戸が僅かに眉根を動かし、唐沢が面白そうに煙草を咥え直した。

正式入隊日以前から実質的に本部で正隊員として扱われていた——もつとも、『ランク戦ブースや開発室といった施設設備の利用』といった一般的な隊員と同じ行動ではなく、『事情聴取に伴う生体およびトリガーデータの収集・登録などの処置のために特例としてボーダー本部を訪れた即日に正隊員としての登録が為された』というケースではある。

「俺が『正式入隊日までは本部では正隊員と認められない』という規定を知らなかつた事は酌量に相当すると考えます」

「もう…………」

要は、自身を取り囮む険しい視線を受け止めた上で敢えて囁々しく、きつぱりと言つた。

要の言葉を受けた鬼怒田が苦々しく渋面を作る。それは、要の言葉に正当性がある何よりの証拠だった。

——要には『即日で入隊手続及び正隊員としての登録が可能である』という認識を信じるに足る境遇があり、またそれに関して要自身には責任が無い。

「善意無過失だな。私は、彼の言い分に理があると思う」

「正気ですか、忍田本部長!？」

「正気? 規定どころか人道に悖る行いを推し進めたのはどちらだ?」

腕を組みながら、言葉を選ぶ様に沈黙を保つていた忍田が口を開く。

忍田はもはや感心した様子で、要を擁護する立場を隠すつもりも無い様だつた。

「また、封筒についてですが」

形勢が自分に傾いた事を悟った要が、本題で勝負するためにやや強引に話を戻す。

あらかじめ大まかに台本を決めていたお陰で渡り合えているが、そもそも要是こういつた場に慣れている訳ではない。

話が脱線しそぎるとたちまち言いくるめられる恐れがある。

「三門市民は市の条例により近界民に関わるボーダーの捜査に対し可能な限りの協力義務が定められています」

このためにわざわざ三門市ホームページから市条例を探し出した苦労が報われる時が来た。まさか誰かに言うわけにもいかず、使い慣れない機器でネットを使い、難しい漢字を辞書片手になんとか読みながら条文を頭に入れるのは控えめに言つて地獄であつた。

休題。

「あの時の俺はボーダーとしての任務・訓練のいずれにも従事していない一市民でしかなかつたのだから、彼等はただ一言、『その封筒の中身を見せろ』と俺に要求すればよかつた」

勿論、そう言われたとして見せる気はさらさらなかつた。

『要を無視して作戦を強行することで自分の責任で組織が崩壊する可能性を取りながらS級隊員+A級5位と戦い、それに勝利したとしても恐らくはボーダー最強部隊+未知の黒トリガーとそのまま連戦し任務の達成を目指す』か、『今回は退く』かという二択を突きつけた時点で、要の勝ちは殆ど決まつていたのだ。

「現場の指揮権が実質的に太刀川・風間両隊長に委ねられており、また俺に対する協力要請を怠らなければ任務の遅延が発生し得なかつた以上、自発的な撤退による任務遅延の責任については両名に発生するものと考えます」

「…………」

あくまで強気に『お前らが悪い』と叩きつけた要は一步も引かずに城戸を見つめる。

その堂々とした振る舞いに、司令部の面々は気押された様に息を呑んだ。

「ただ、あなた方が空閑遊真の入隊を認めてくれるのであれば、もう二度とこの様な事はしません」

ようやくだ、と静かに心中で氣を引き締めつつ、要は本題を突きつける。

最早ここ以外にタイミングは無い。ここで遊真の入隊を勝ち取れなければ要は終わりだ。

でも恐ろしくはなかった。他の玉狹みんなに迷惑は掛からないから。

「それを信じろと?」

「まさか」

呆れた様に聞き返した城戸に、要は静かに首を振る。

「俺の近界での記憶に関する封印措置を提案します」

取引の材料くらいある。

新しく何かを差し出すわけでもなく、今あるものを捨てるだけで誰かを犠牲にする事もない。要にとつては安いものだが、それでも要の暴走を気にするのなら間違いなく採つておきたい提案のはずだ。

「な……」

「そうすれば、今回の様な事は起き得ないでしよう」

近界での経歴をダシに交渉ごとを出来ない様にするとは、つまり近界の記憶を丸ごと消すということだ。

やや過激派のきらいがあるとはいえ、根付と鬼怒田の両名も流石に躊躇せざるを得なかつた。

「今すぐにでも構いません」

完璧に近い勝利を得られる筈だ。ボーダーを意のままに操る事すら可能になるかもしない爆弾を要は持つてゐる筈だつた。

しかし要は、心の底から『もうしない』と誓つた。

以前までの要ならば決してこんなもつたいない事はしなかつた。『使う』と決めたら自分の過去さえいくらでも使つて気に入らない要求を突っぱね、好き勝手に要求することを厭わなかつた筈だつた。

だつて死にたくなかつたから。

怖いのが嫌で、痛いのが嫌で、一人は嫌で、いつそ死んだ方が楽なのは明らかだつたのに、それでも死ぬのだけは嫌だつたから。

だから生きることもしないまま、死なないだけを続けた結果、怖いのにも、痛いのにも、一人にも慣れてしまつた。

でも玄界（こころ）では違う。

『つらい過去』があると生きやすいこの世界で今日、要は更なる自由を手に入れられる筈だつた。

過去を盾に、過去を武器にして、ボーダーの命運を人質に取り、いかなる要求も出来る立場に立てるかもしけなかつた。

死ぬことも無い、怖いことも、痛いことも無い、完全な自由を手に入れられる筈だつたのだ。

でも、要はいつしか気づいてしまつた。

——目覚まし時計に起こされる。小南や陽太郎、林藤や迅に起こされる。

——決められた制服を着て、決められた時間に決まつた場所に行く。

——学校に行き、学生の本分たる学業に勤しむ。

——基地へ行き、技を鍛え、策を練り、街を守り、人を護る。

——家に帰つて、ご飯を食べて、明日に備えて眠る

今こうして生きている自分は、完全な自由にあるのか？
違う。

大人の決めた勉強を大人の決めた場所と時間でせつせと励む。鍛え、戦い、死を遠ざけるために死に近づいていく。

これらは要の立場と役割に付加された義務だ。自由とは程遠い。自由を手に入れたかった。手に入れられる筈だった。なのに。

でも。

家族も、友達も。此處で自分を受け入れてくれた人達をもめちゃくちゃにして得られるたつた一人の自由は。

多分、あんまり楽しくないのだ。

目覚まし時計は嫌いだけど、小南や陽太郎、林藤や迅に起こされて一緒に朝ごはんを食べるのは楽しい。

制服を着て、通学路で見かけた友達と話をするのは楽しい。友達に教えてもらいながら、苦労してようやく問題が一問解けた時は大変だけど楽しい。昼休みにお弁当を食べながら友達と過ごすのは楽しい。

基地で友達を鍛えてその成長を見るのは楽しい。街を守つて、人を守った時、友達が

笑ってくれると楽しい。

ベッドに入り、明日は何をしようかと考えながら眠るのは、楽しい。
やらなきやいけない事が沢山あるこの毎日が楽しくて楽しくて、この毎日を壊したくなくて。

でも、遊真を見捨てる事も出来なかつた。

「俺は個人的な理由のためにボーダーの任務を妨害しました」

最後の最後に、手に入れた勝利を手放す様に。

要はあっさりと自分の行いを認めた。

遊真は、レイジの料理も小南のカレーも美味しいと言つてくれて、一緒にご飯を食べると楽しくて、もうとつに『毎日』の中にいて。

そして何より、初めての向こうから来た友達だつた。

だから要は、「色々やつた後で、許されなくてもちやんと謝ろう」と思つた。

いつか聞いたことのある弓場の言葉がふと要の脳裏に過つた。

ケジメを付ける。

やつた事の後始末をきちんとしなければ、この世は渡つていけないので。

「本当にごめんなさい」

ボーダーをめちゃくちやに荒らしてハイおしまい、では、此処でできた家族にも、友

皆の居場所

人にも…………そして此処で眠り、此処で生きていた父母の誰にも顔向けできないから。

「……記憶封印措置は君の要求に対する交換条件でしかないだろう。今回の隊務規定違反についてはどう責任を取るつもりだ？」

「司令部の裁定に従います」

「我々には君を除隊する事もできるが」

「それは…………」

要は言葉を詰まらせた。城戸の言葉を恐れた訳ではない。

除隊すれば要を野放しにする事になる。

その提案のリスクを指摘する事が、今の要の立場では憚られるような気がしたのだ。

「…………」

沈黙が一時その場を包む。

城戸がそのリスクを理解していない筈がないというのが要の考えだったが、図々しくそれを口に出して良いものか、と要は口ごもつた。

「…………まあ、いい」

永遠にも思える静寂は、城戸の一言で終わりを告げた。

「記憶封印措置は行わない」

「…………宜しいのですか」

「辻褄合わせのために君以外の隊員にも記憶封印措置を行わなければならぬ可能性のコストとリスクを勘案すれば致し方あるまい」

「…………」

城戸の言葉は、もつともらしい理屈だ。

表情のない城戸の思考は、そもそも人の感情すら読むのが苦手な要には読み取れない。

ただ、その言葉の裏には何か理屈を超えたものがある様に思えた。

「無論、このまま免責という訳にもいかない」

「承知しています」

組織には体裁がある。

体裁には強度がある。

強度には限界がある。

好き放題やらかした奴がお咎め無しでは、いずれ組織は崩れ去る。

要是組織を回す立場の人間ではないが、それがわからない人間でもない。

「記憶封印措置を行わないとなると、我々としては君が今後このような事を起こさない為に……起きたとしても即時に対応できる環境を構築する事が望ましい」

「意味は理解るな？」

「…………」

城戸の確認に要が首肯で応える。

妥当な落とし所だ。

扱い方を誤れば暴走しかねないという事が判つた犬に対して、文字通り司令部直々に首輪を付けておきたい、といったところか。

「いいだろう。特例として、空閑遊真のボーダー入隊を認める」

要の返事を聞いた城戸は、ひとつ息を吐いて要の要求を飲んだ。

そして、刃物のように研ぎ澄まされた眼光を向けて、さらに言葉を続けた。

「そして君には玉狹支部を脱退し、本部の部隊へと編入して貰う」



「はあ～～!? 本部に転属するう!?」

「……急すね」

「ええ～～!? そんなあ～～!!」

「うん。あ、とりまる、しいたけ取つてくれ」

「どうぞ」

玉狹のリビングで、迅の作つた豆乳鍋をつつきながらぶち込まれた特大の話題に、テレビを見ながらやいのやいのと肉団子を頬張つていた小南と烏丸と宇佐美がそれぞれ反応を返した。

レイジは雷蔵と飲みに、迅と林藤は支部長室で色々と手続きの整備をしてくれている。陽太郎は寝た。

「まだ要せんぱいに眼鏡かけさせてないのに……あ、魚入れちゃうね」

「麺も入れていいですか？」

「えく、シメじやない？」

「あんた何だつていきなり…………そういう事はもつと、ていうか…………んもく

「くく！」

「しいたけが詰まる」

ほろほろと涙ぐむ宇佐美とともに何度も口に出しかつた言葉を飲み込んでわしやわしゃと頭を掻いた小南は、どたどたと要の背後に回り、首を絞めてぽかぽかと頭を殴つてくる。

「…………」

「…………何よ」

「いや……お前はもつと怒ると思つていた」

「怒つてるに決まつてるでしょ！」

少し困惑した様子の要の言葉を受けた小南が耳元で叫ぶ。うるさい。

小南の連打にぐらぐらと頭を揺らす要是、『なんか思つていたのと違う』と考えてい

た。

「はあ、もう…………なんで誰にも相談しなかったのよ、おバカ」
びたりと必殺小南パンチが止んだと思えば、ため息と共に耳元から呆れた様な声が聞こえてくる。耳に息がかかつて鬱陶しい。

呆れた様な、諦めた様な、しかし『でもまあなんとかなるか』というような感情がこもった様な呟きだつた。

「ん……」

「そういうの、あんた迅の真似のつもりならやめときなさい。ろくな人間になんないから」

哀れ迅、小南からの評価は散々である。

要としては今回の件で少々思う所はあるものの、普段いくらでもぼんち揚をくれるの
で「ろくな人間じやない……？」あいつが……？」と思っている。

「あたしにくらい相談しなさいよね」

「…………悪かつた」

「何があつたかはこの際聞かないけど、相談してくれたら俺も乗りましたよ」「もちろん私もだよ！ これからでもいいからさ、何か悩む事があつたら私達にも言つ

てね、要先輩」

「…………ありがとう」

三人とも、何も聞かなかつた。ただ、要の味方であると言つた。

要はその言葉を噛み締める。

要にとつて、派閥を移るという事はおそらく三人よりも大きい意味を持つてゐる。

近界での感覺で言えば、敵軍へ寝返るようなものだつたからだ。

近界と玄界は違うという事を理解しつつも、派閥を移るという事実を告げて尚要を心配する姿勢を見せる三人に対して、やはり要は今回の行動を起こして良かつたと思つた。

こいつらは凄い。こんなに優しい。

だから遊真が襲撃されると分かれば自分と同じように城戸派と対峙しただろう。そなれば要とは違ひもつと重い処分が下されたかも知れない。
そんなのは嫌だ。絶対に。

でもやつぱり、三人を心配させてしまつた事が、要にはとても悪い事をした様に思えた。

要は先ほどの小南の言葉を反芻していた。

——あたしにくらい相談しなさいよね

「…………悪かった、本当に」

「今度は何」

「どうしたんすか」

『2対2でやるなら須賀と小南が一番強い』。いつからかボーダー内で言われる様になつた言葉だ。

迅と太刀川にだつてギリギリ勝ち越していはるし、影浦と村上にも、里見と弓場にだつて勝つてはいる。そもそもあんまり2対2をやつていはないというのは言いつこなしである。二宮と出水の射手コンビとはやつた事は無いが、負けるつもりはない。

小南と組めば誰にだつて勝てる気がした。向こう近界でだつて一緒に組んでこんなに動き

易かつた奴は一人もいなかつた。

「もう玉砕じゃなくなる。だから、もうチームじゃなくなる」

「はあ？ それこそなんですよ」

「？」

でもそれももう終わりだ、と要は目を伏せた。

しかし小南は、心底不思議そうに要に問い合わせた。背後から要の首に腕をかける小南の顔は伺えないが、怪訝そうな表情をしてはいるのがありありと伝わる様だつた。正面の烏丸と宇佐美さえ小さく首を傾げてはいる。

「あたしの相棒はあんただけよ。隊がどうこうで変わるとと思つてはるわけ？」

1

「あんたよりあたしに合わせられる奴なんていないし、あたしよりあんたと一緒に動ける奴なんかどこにもいない」

要の感情を考慮して近界遠征への参加が見送られた去年。小南は要と共に玄界に残り、二人は『ヒマだから』と警戒区域のパトロールをしまくり出現したトリオン兵を片つ端からぶつた斬つた。他の追随を許さない勢いで灰白色の残骸を積み重ねていった二人は、コンビでの撃破数ランディングでも一位を搔つ攫つていった。

熊谷に訓練している時、話の流れで小南は言つた。「最初から双月を繋げられるのは要がいる時だけ」と。

影浦とお好み焼きを食べている時、要はこう漏らした事がある。「何も言わずに最高の連携が取れるのは小南^{あい}と組んだ時だけ」と。

い
な
い
の
だ。

こいつ以上に動ける奴なんて。

「もしかんたがあたしより組んで動きやすいつて奴がいたらいつでも玉狹タガに連れて来なさい。ボコボコにしたげる」

「いやそれは意味わかんないすか」

「その人がかわいそうだよ、小南」

「言葉の綾よ！」

ようやく解放された首をさする要の後ろで、烏丸と宇佐美に茶々を入れられた小南がぎやあぎやあとわめいている。

いつもの玉豹だ。

このために、戦つたのだ。

遊真はここで暮らす事になる。楽しんでくれればいいな、と要は思つた。

そして、代わりに自分は此処を出ていく。

せめて出ていくまで囁み締めようと思つた。

「要」

「ん……」

いつの間にか隣に座つていた小南が、煮えた魚の切り身を要のお椀によそいながら話しかける。

「またカレー食べに来なさいよ、あんた」

「」

未だにうまく箸を使えない要の代わりに、魚の骨をうまくより分けて小皿に移しながらかけた言葉に、要は動きを止めた。

「また此処に来ていいのか」という言葉が思わず口をついて出る前に、小南がお椀を突き

つけながら急かした。

「へんじ！」

「え、うん」

「毎回あんたと陽太郎のぶん甘口で別に作つておくの面倒くさいんだから、あんたが来なくなつたら余つちやうでしょ！」

向こう界には当然ながら香辛料なんて無かつた。

初めて要が小南のカレーを食べた時、ただ熱いのとは違う辛さという刺激を舌の上に感じた要はすぐにカレーを吐き出した。

野草や木の実を食べるとき、舌の上に乗せて刺激を感じたらまず間違なく毒だつたからだ。

それ以来、小南は要のぶんのカレーを陽太郎と一緒に甘口で別の鍋で作る様になつた。平静を装っていたが、小南が隠れて泣いていたのを要は知つている。

後日要は小南に謝るとともに、小南に対して何かを返さなければならぬと感じる様になつた。

もしかしたら要が今回動いたのも、遊真を守るために小南が戦う事で、小南が处罚を受ける可能性を無意識のうちに一番恐れていたのかもしれない。

「引越しそうだっけ？　急だよねえ」

「来週レイジさんがケーキ作るらしいんで来てくださいよ、先輩」「次の日焼肉じゃなかつた？ こいつ連れてくわよ」

「賛成！」

ああだのこうだと、三人があつという間に勝手に要のスケジュールを埋めていく。それはもはや「また此処に来ていいのか」と聞こうとしていた自分がバカらしく思えるほど、なんの疑問も抱いていないように、当然に。

でもなぜ、もはや玉砕でなくなる自分にここまでするのだろうと疑問に思つたとき、ふと要是二年前に林藤からかけられた言葉を思い出した。

——おまえはおれ達の家族だ。これからおまえがどこに行こうと、何をしようと関係ないのだ。

こいつもにとって、要がどこにいても、何をしても。それは決して見放されているのではない。

「食べ放題のコース一番安いのでもいいでしょ？」

「あたしはどんなお肉でも満足なのだ」

「プレミアムコースじゃないんすか？」

「修たちも連れてくのにぜいたく出来ないでしょ!? 言つとくけどあたしが払うんですけど!! 安いやつね、ハイ決定!!」

わちやわちやと、鍋を囲んでいつものやかましい光景が広がっている。

「要も文句言わないでよー!」

鳥丸と宇佐美の「割り勘でもいいのに」「修くん達にいい顔したいんじゃない?」という小声の呟きを耳聴く拾つた小南が「とりまるはお金貯めなきやでしょ!」と返した後、釘を刺す様に要に言い放つた。

——良かつた。玉狹に居られて、本当に良かつた。

「…………ありがとう」

「や、安いので素直にお礼言われるとそれはそれで複雑ね……」

「あ。あとあんた、瑠花にも今回のことちゃんと言つときなさいよ
わ、わかつた」

ボーダーについて語るスレ

須賀要さん不祥事を起こして電撃移籍してしまう wwwwww

??このスレはボーダー支給の携帯端末専用のチャットアプリの一機能です。ボーダー外部の人間には見せないで下さい。

??上層部も閲覧できる機能です。常識と節度を守り、くれぐれも発言には気をつけましょう。

??荒らしは何も言わずに通報してスルー。悪質であればそのうち上層部から呼び出しがかかるでしょう。

1 : 名無しのボーダー隊員 ID : Z v Q m y S k T r

本日の玉砕第一の名アシスト須賀要さん

・隊務規定違反で個人ポイント9000点減、攻撃手ランク7位から圏外へ
 ・隊務規定違反を犯しただけなのに何故か玉泊第一から冬島隊へ出向になつてしまふ

3：名無しのボーダー隊員 ID：a+98.iOc3Z
 逝つたああああああああああああ

7：名無しのボーダー隊員 ID：j2YKpb4G3
 フア――――wwwwwwww

12：名無しのボーダー隊員 ID：V1miHXAb7
 遂に玉泊一強時代も終わりか

17：名無しのボーダー隊員 ID：fzyc/mQ/w
 これマジ？ 具体的に何やらかしたんや

22：名無しのボーダー隊員 ID:kP5/cfXCH
 詳細は知らんけど9000pt減点+移籍だから結構重そう。確か影浦が根付さん殴った時もこの位じやなかつたか？

25：名無しのボーダー隊員 ID:oV6t+/drU

>>22

影浦が根付さん殴った時は8000pt←+影浦隊のB級降格な

29：名無しのボーダー隊員 ID:WQSie907f

>>25

はえーサンガツ

33：名無しのボーダー隊員 ID:6TVZ5UL8p

てことは影浦事件とどっこいか？ 本人だけが処分を受けてる分他の玉砕メンバーは関係無くて須賀本人の問題行動が原因なのは確実っぽいな

34：名無しのボーダー隊員 ID:dy5ur38gk

そう考えると実質連帯責任でB級降格させられたゾエ達って可哀想だな

40：名無しのボーダー隊員 ID：X L d Y T l v + k

>>34

今回みたいに部隊が崩れてないから一概には言えんやろ。むしろ突然メンバー抜けで戦術の練り直ししなきやいけない今回の玉砕の方が不憫まであるわ

43：名無しのボーダー隊員 ID：9 c T x f 9 Q x T

玉砕はチームランク戦出禁だからまだいいけど、これがもし他のA級部隊で俺がそのメンバーだったら普通にキレると思うわ

45：名無しのボーダー隊員 ID：6 4 H e h i 8 6 r

影浦に続いて須賀もやらかしたのかよ。弟子が弟子なら師も師だな

50：名無しのボーダー隊員 ID：1 2 U r z R W c E

やらか師弟

54：名無しのボーダー隊員 ID : Q3UQMilgK
 ▷▷50

* * * * 亭みたいに言うんじやないよ

58：名無しのボーダー隊員 ID : 6j98iChat
 ▷▷54

N G ワード貫通

63：名無しのボーダー隊員 ID : w4g09ccgs
 読めないのに読めて草

67：名無しのボーダー隊員 ID : y4EK4jBvf

見える見える……

71：名無しのボーダー隊員 ID : ctg+oo/B4
 ▷▷54

普通に上層部も見てるスレで * * 漫画家の名前出すな

74 : 名無しのボーダー隊員 ID : m b n I 6 A w R n
影浦はアレ弟子じやなくね？ 米屋みたいな我流だろ

77 : 名無しのボーダー隊員 ID : r 0 E 3 S 6 e A x
ほぼ須賀とのスペーだけであんだけ成長したんだから弟子でいんじやね。本人曰く
「アイツが勝手に教えてきた」らしいけど

82 : 名無しのボーダー隊員 ID : a A Z a + x K / F
まあ諸説ありそう

85 : 名無しのボーダー隊員 ID : P n d A b D V h Z
元のポイントどんだつけ？

90 : 名無しのボーダー隊員 ID : 7 Z b r T Q 5 X n
10700あたりだつたはず

94：名無しのボーダー隊員 ID : r17eH0zs1
 じやあ今1700wwwww

95：名無しのボーダー隊員 ID : qEaViMiFD
 >>45

那須さんへの熱い風評被害やめろ

100：名無しのボーダー隊員 ID : W2tSZ4YgB
 須賀つて那須さんも教えてたんか？ 知らんかつたわ
 うざ

104：名無しのボーダー隊員 ID : h0YZpXRf/
 嫉妬丸出しで草

105：名無しのボーダー隊員 ID : OIE1vM+41
 >>100

那須と影浦をA級に導いた名伯楽やぞ

109：名無しのボーダー隊員 ID : C k t B 6 B 1 L O

何気に実績凄いよな。ここまでA級排出してるのって東さんくらいじゃね？

112：名無しのボーダー隊員 ID : 4 + + Z Z Z O U 1

東塾みたいなしつかりしたもんじゃないぞ。ひたすらシミュレーターでシゴキを繰り返す要▣sブートキャンプや。小南と須賀の二人に目が光を失うほどひたすらボコられる日々があつたから普ネキ熊谷友子だつて攻撃手8位になれたんだからな。覚悟の無い奴が軽い気持ちで弟子入りすると死ぬ

115：名無しのボーダー隊員 ID : y w o P Y + V 2 9

那須さんをシゴく！？！？！？

117：名無しのボーダー隊員 ID : 8 0 / B B 5 b m E

>>115

はい通報

120：名無しのボーダー隊員 ID : dXinH0qwH
 >>115
 通報しますた

121：名無しのボーダー隊員 ID : byZlkhtww
 >>115

鬼怒田さんこいつです

123：名無しのボーダー隊員 ID : Yuivc5Ljf

今は須賀が減点されたから繰り上がりでプネキ7位か。アシスト兼ディフェンス役として目立つてるとてもむしろあのカチカチ防御カウンタースタイルだと個人戦の方でももっと話題になつて良いと思うんだけどな

127：名無しのボーダー隊員 ID : qBPA4D7s

それな。弧月捌きと集中シールドの上手さはボーダーでもトップクラスだろ

130：名無しのボーダー隊員 ID : 3pAA+WTSp

というか村上もそうだけど単純にああいうタイプの斬り合いは見てて楽しい

133 :名無しのボーダー隊員 ID : q i t 2 2 + E / z

>>123

そもそも個人ランクあんまりやつてないからしゃーない。いつも玉柏支部で玉柏連中と模擬戦やつてるつて聞いた

138 :名無しのボーダー隊員 ID : e b d o k o M x F

は？んな事したら誰でも強くなれるやろ。全隊員に玉柏と東さんの講習会実施しろや

143 :名無しのボーダー隊員 ID : G Z h S z 2 X n I

>>138

積極的に自主練してるブネキとそれに付き合つてる須賀達が偉いってだけやぞ。スケジュール通りの任務と訓練が終わつたらさつさと帰つてダラダラしながら真っ先にこんなクソスレ覗いてる向上心の無いお前らとは意識が違う

148：名無しのボーダー隊員 ID：Db7TyW7z

>>143

オーバーキルやめろ

151：名無しのボーダー隊員 ID：CkQQMgbVC
>>143

あまり強い言葉を使うなよ

泣くぞ

155：名無しのボーダー隊員 ID：iV37NtAqe

でも須賀つて隊務規定違反したゴミじゃん

158：名無しのボーダー隊員 ID：g2qG419M/

那須隊の全員にグラホ+メテオラ装備させてひたすらマップを走り回つて爆弾仕掛けまくつて那須とかいうMAP兵器で自由自在に起爆して人間を爆殺する狂気のボンバガ部隊を作り上げた須賀Pを悪く言うな

159：名無しのボーダー隊員 ID：F5k5yKrsx
 >>158

これいつ聞いても笑う

164：名無しのボーダー隊員 ID：KwP a3F1pM
 ランク戦でボンバーマン始まるのクソおもうい

165：名無しのボーダー隊員 ID：y4+bBYvcE
 あまりにも地雷&バイパー戦法がうざいから建物更地にしようとすると射線が通つ
 て途中で日浦に抜かれるクソゲー

170：名無しのボーダー隊員 ID：eF3PXhbPU
 可憐な見た目から繰り出される一見戦術的に見えてびっくりするほどゴリ押しのス
 タイルすこ

174：名無しのボーダー隊員 ID：Co tBqmaA0
 爆殺天使ドクロちゃん

176：名無しのボーダー隊員 ID : d7yQWvDyp

那須さんのお淑やかイメージを崩した須賀の罪は重い

181：名無しのボーダー隊員 ID : ZTaleWdBn

>>176

戦闘時だけSに目覚めるだけだから逆に一粒で二度美味しいだろうが

184：名無しのボーダー隊員 ID : AJpoCsaVN

多(。)(。)「那須隊イマイチやなあ……せや！」

←

多(。)(。)「パーさんを徹底的に鍛えて味方絶対守るウーマンにしたろ！ 戰術？

グラホとメテオラ置いとけばええやで
うーんこれは名将

188：名無しのボーダー隊員 ID : DjyeUfCSe

影浦隊は影浦しか須賀の世話になつてないなんか？ まあ問題児同士お似合いつて言

われりやそれまでだけども

191 : 名無しのボーダー隊員 ID : EfMMw+1/G
/>>188

那須隊の日浦はトリガーセット変えただけで狙撃の師匠は奈良坂だから那須もプネキも影浦も須賀とはあくまで個人の付き合いじやねーの

195 : 名無しのボーダー隊員 ID : dk1kqBaiP

ワオ古参、隊務規定違反の話題の度に槍玉に上がる影浦に涙を禁じ得ない

198 : 名無しのボーダー隊員 ID : 6NSjs/iBp
/>>195

なんで古参のくせに上位帯のランク戦でお前見かけないの？

201 : 名無しのボーダー隊員 ID : im8y/B4DV
/>>198

は？ 匿名板なんだからそんなのお前に分かる訳ないだろ***ぞ

206：名無しのボーダー隊員
効いてて草

I D : N p Y O j Z F B 5

208：名無しのボーダー隊員
草

I D : I 7 0 Z 8 0 / A B

210：名無しのボーダー隊員
ガチ効きやんけ

I D : u C N o h s 2 G U

211：名無しのボーダー隊員
図星ですか……w

I D : t a 9 1 P y 5 9 T

214：名無しのボーダー隊員
マヌケは見つかったようだな

I D : E o Q P H c H F s

218：名無しのボーダー隊員

I D : M k p r b x 9 a c

エンジニアかオペレーターかもしれないからやめて差し上げろ

219：名無しのボーダー隊員 ID：V C m l / P c Z s
 つか処分の内容公表するなら原因と賞罰理由も公表しどけや。無闇に噂が広まるだけだろ

220：名無しのボーダー隊員 ID：9 + X 3 7 O F k a
 まあやらかしたのが機密情報の漏洩とかだったら余計に公表できるのは納得できる

224：名無しのボーダー隊員 ID：Q q u g k m k T u
 玉狹黄金期も終わりかあ。かなしいなあ

226：名無しのボーダー隊員 ID：K i L k p H K 3 e
 玉狹はチームランク戦やる時は全部エキシビジョンとはいえ無法な強さだったからな

227：名無しのボーダー隊員 ID : T O u L R + u 0 V
 新参ワイ、玉泊のチーム戦を一回も観戦できず須賀バイセンが脱隊し泣く

231：名無しのボーダー隊員 ID : M A d Z j B r e /
 かわいそう

236：名無しのボーダー隊員 ID : F K x 4 f F l v N
 どんまい

241：名無しのボーダー隊員 ID : l p E + I K G E i
 最近めつきりチーム戦しなくなつたからなあ

243：名無しのボーダー隊員 ID : C X x w W f f o l
 玉泊つて強い強い言われてるけど実際どんだけ強かつたの？
 が強い？ 誰か野球に例えてくれ

245：名無しのボーダー隊員 ID : x Q 2 j D X I Y F

▽▽243

2003年の横浜とダイエー

250：名無しのボーダー隊員
▽▽245

ID : Eqr+bTESV

252：名無しのボーダー隊員
壁生える

ID : honNHENn

255：名無しのボーダー隊員

ID : MJrh1qaV

流石に壁

260：名無しのボーダー隊員
ええ……（ドン引き）

ID : AD3qTry18

265：名無しのボーダー隊員

ID : AD3qTry18

>>250

>>252

草壁が生えるつて何だよ

270：名無しのボーダー隊員 ID：463V1jNyW
A級1位なのに暗黒期の横浜に例えられるのもう名誉毀損だろ

272：名無しのボーダー隊員 ID：sYgR0FYEW

申し訳無いが玉狹を持ち上げるために他隊を下げるのはNG

277：名無しのボーダー隊員 ID：pgcPbsKeK

>>272

実際こんなもんだろ。お互い一人ずつ勝ち抜き戦するならわからんけどチーム戦だと太刀川隊は一人少ない上に唯我とかいうお荷物いるからな。アソコたまにテンパつて足引つ張つてフォローに入つた出水も死ぬとかいうツラゲマンやぞ。まあラジコンになつてりやたまにいい動きする事もあるけど

282：名無しのボーダー隊員 ID : sZvnG / EEx
 確かに太刀川隊は唯我のお守りして上に玉狹にとりまる引き抜かれちゃつてるからかわいそうではある

285：名無しのボーダー隊員 ID : yWzBvDEDw
 >>282

じやあダイエーじやなくて虚カスやんけ

286：名無しのボーダー隊員 ID : QXnUsmaS7
 草

290：名無しのボーダー隊員 ID : 4t11DjPLh

草

291：名無しのボーダー隊員 ID : GxCi7Dxe1

壁生えますよ

295：名無しのボーダー隊員 ID : P1dHc6bU5
やつぱ虚カスつてクソだわ
な巨関無

296：名無しのボーダー隊員 ID : 4hWFfBmJZ

297：名無しのボーダー隊員 ID : EGbCz/N+x

もう小南と須賀のツートップ見れないの普通にかなしい。あんな見てて面白いチ
ムもう出てこないだろ

301：名無しのボーダー隊員 ID : Wo cocDlVm
味方絶対守るマンのエスクードからの壁ごと斧ぶつぱ大好き

302：名無しのボーダー隊員 ID : 8cbfRpHRe

クソ重ナイフ（レイガスト）とかいう産廃使つてるのにバカトリオンに物言わせてほぼ
當時スラスター吹かせてるせいで影浦にも手数負けしないし機動スタッツも高いから
小南と足並み揃えられる怪物

304 : 名無しのボーダー隊員 ID : EZUZdHtik

、リオノは見てこうなんどよ、ナガミ助さんによい?

どういうス

データスしとるんやアイツ

307：名無しのボーダー隊員 ID：A C D f + m j k H

トリオン 14

攻擊
5

防御・援護

機動

技術

射程

指揮

特殊戰術

TOTAL

これな

5 4 1 3 1
9 0

310：名無しのボーダー隊員
キツシヨ

I D : w S 4 4 r 1 M c t

315：名無しのボーダー隊員
きもい

I D : h 1 G Z f o i J 2

316：名無しのボーダー隊員
なんだこのきたないグラフ

I D : h P m r x u 7 L /

319：名無しのボーダー隊員
きつたねえステータス

I D : 2 N u x + H m 0 q

320：名無しのボーダー隊員
草

I D : I g S s B C s 4 y

323：名無しのボーダー隊員
言い過ぎやろ

I D : r d i U a K 1 S b

325：名無しのボーダー隊員 ID：6I pWgALie
バカみてえなトリオンしてんな

327：名無しのボーダー隊員 ID：uHgKIpxCl
トリオン***

328：名無しのボーダー隊員 ID：tw8HoM/tl
今二宮さんの悪口言つた？

330：名無しのボーダー隊員 ID：7VnArCT/h
グラフの図形汚すぎてジワる

332：名無しのボーダー隊員 ID：piAxEYjrWX
これマジ？ 右側に比べて左側が貧相過ぎるだろ

333：名無しのボーダー隊員 ID：nV/4Jss8O1

スパイダー使つてゐるのに特殊戦術低いのな

335：名無しのボーダー隊員 ID : S B b I C Q t E B

4ありやそこまで低くないぞ。つか特殊戦術は査定の基準がよくわからん

338：名無しのボーダー隊員 ID : g 8 Q W 5 J 2 x v

それより指揮1つて何？ 仮にもA級で1とかあり得るんか？

341：名無しのボーダー隊員 ID : z z Q c L z Y X z

>>338

玉猶第一の試合全部見たけどあいつマジでヘイト受けまくるガチタンムーブするから落ちる時は真っ先に落ちてそもそも仲間に指示出すシーンほぼ無いしあつたとしても

「来い」か「待て」しか言わんぞ

343：名無しのボーダー隊員 ID : i x 5 4 G Q G K m

>>341

アシュリリー連れてるレオンなんか？

3 4 8 : 名無しのボーダー隊員

I D : f B C O L X x U 5

草

3 5 0 : 名無しのボーダー隊員

I D : R 0 F b Q P y W 1

草

3 5 1 : 名無しのボーダー隊員

I D : b V 0 V S J a K g

壁

3 5 3 : 名無しのボーダー隊員

I D : x c H 3 G F 7 2 Q

草

3 5 4 : 名無しのボーダー隊員

I D : 6 1 G P v E w k n

小南と戦術の話してるとこ聞いた事あるけどそんなバカそんな感じしなかつたし多分ポジションとか部隊が変わればそれなりに指示はするんだろうな

3 5 5 : 名無しのボーダー隊員 I D : y H x / O p g q C

>> 3 5 4

指揮に関しては冬島隊でどんな動きするかで本当の評価が出そうって感じか

3 5 9 : 名無しのボーダー隊員 I D : B O T P 8 b O 9 B

まあ指揮が下手で1なんじやなくそもそも指揮する場面無いから低めに見積もられてるのはありそう。にしてもレオンスタイルはどうよと思うけど

3 6 3 : 名無しのボーダー隊員 I D : H f Z u l S 3 n n

>> 3 5 4

いや普通にバカだぞ

3 6 4 : 名無しのボーダー隊員 I D : w E w 5 x H A 0 h

>> 3 6 3

マ?

3 6 5 : 名無しのボーダー隊員 I D : 5 C P z W F L 0 d

>>364

基本テスト全部赤点や。赤点回避したら学校中で話題になるし「須賀要がどうやって転入試験合格したか」は在校生ならみんな知ってる三門第一の七不思議の一つや

366 : 名無しのボーダー隊員 ID : a v n d R 7 J m x
草

370 : 名無しのボーダー隊員 ID : B b U 6 L V O X d

草

371 : 名無しのボーダー隊員 ID : J i p 9 2 e B H R
めちゃくちやバカでワロタ

372 : 名無しのボーダー隊員 ID : J 4 l h 9 L d s u
クソおもろい

374 : 名無しのボーダー隊員 ID : S Q l A 2 I b E b

当真とどつちがバカかバトルさせたい

378：名無しのボーダー隊員 I D : v n g q k q d T 9
 >>374

普通に須賀。須賀は当真を嫌つてゐるけどその理由が「須賀の方が真面目に勉強してゐるのに当真の方が成績が良い」だからとつくに格付け完了してゐる

379：名無しのボーダー隊員 I D : C l I t M t Y K i
 草

381：名無しのボーダー隊員 I D : O x 4 S L 7 s u F

草

382：名無しのボーダー隊員 I D : S M s U a p c S V
 うそだろ w w w w w w

383：名無しのボーダー隊員 I D : / k 6 5 y U H d r

流石にエスクード生える

385：名無しのボーダー隊員 ID：2kYWOG0As
どんだけバカなんだよwwwww

387：名無しのボーダー隊員 ID：W+7JW1JJV

めっちゃ真面目に授業受けて聞き分けもいいから先生からの評判も良いし頭良い連中にも教えたがられるしバカ連中は格下がいるから安心して須賀にめちゃくちや優しくなるから学校では割と人気者。ただ一つダメなのは本当にバカ

388：名無しのボーダー隊員 ID：LpUjustbu
草

391：名無しのボーダー隊員 ID：iCrX3D1q7

須賀の事好きになつてきわた

393：名無しのボーダー隊員 ID：ZNXeJ0OuX

これもうダンガーだろ

397：名無しのボーダー隊員 ID : z g K P + A p K j
 太刀川と須賀で大学 v s 高校の三門N o. 1バカ決定戦やつてほしい

398：名無しのボーダー隊員 ID : 2 c 1 A u b G w E

>>397

普通にいい勝負しそう

403：名無しのボーダー隊員 ID : Z r b h Q c 3 6 X

>>397

マジで見たい

406：名無しのボーダー隊員 ID : L c k C h s n / n

普通に気になるわ

411：名無しのボーダー隊員 ID : c 7 + C Y D / D i

DANGER ↓ダンガ→

v s

くまちゃん↓クマ＝チヤン

ファイツ

414：名無しのボーダー隊員

I D : k Y q K g r D J S

勇次郎対武藏

416：名無しのボーダー隊員

I D : x R b 9 + o 3 d e

五条対宿禰

420：名無しのボーダー隊員

I D : C 7 j m W N I c o

てかメインサブ両方にエスクード入れてるレイガスターなのに防御値で迅さんに負けてるんか

つかこれより防御値高い迅さんって何???

423：名無しのボーダー隊員

I D : z J X C 9 4 S u 2

未来読む奴に防御で勝てるわけないんだよなあ

425：名無しのボーダー隊員 ID:kUx/YL6xq
チーターとプロゲーマー比べるのやめろ

429：名無しのボーダー隊員 ID:NFEy/eBQM
燐然と輝くセクハラグラサン予知予知歩きの防御値15

432：名無しのボーダー隊員 ID:o1V7u9IuM
逆に未来視持ちに1差で迫つてゐる須賀がおかしいだろこれ

435：名無しのボーダー隊員 ID:+230wKFSs
>>420

須賀つて両方エスクード入れてんのかよwww

436：名無しのボーダー隊員 ID:vcNN739XU

主	副
レイガスト	バツグワーム
スラスター	スペイダー
シールド	シールド
エスクード	エスクード
ちな須賀のトリガーセット	
4 3 8 : 名無しのボーダー隊員	I D : q m m F l k L K z
きつつしょ	
4 4 3 : 名無しのボーダー隊員	I D : p G 5 A M X 8 n /
きもい	
4 4 7 : 名無しのボーダー隊員	I D : L e z 6 P s d e 4
これはキモい	
4 4 9 : 名無しのボーダー隊員	I D : Q v G m G X y 3 w

ヤバくて草

453：名無しのボーダー隊員 I D : q f x m M I i 9 W
壁

458：名無しのボーダー隊員 I D : B v 6 U i i T / W
草壁生える

462：名無しのボーダー隊員 I D : G T o X W 0 D m L
頭雪丸か？

465：名無しのボーダー隊員 I D : S d D W 0 i 8 / A
あまりにも潔いフルアタ不可能構成

470：名無しのボーダー隊員 I D : R V K A P p T R L
硬すぎだろこいつ

474 : 名無しのボーダー隊員 I D : k x i A m M / Y A
 チームメイト絶対守るマン

479 : 名無しのボーダー隊員 I D : I 9 6 f W X 1 G 3
 守護キヤラ

482 : 名無しのボーダー隊員 I D : E c O c q Z c h T
 本部以蔵じやん

483 : 名無しのボーダー隊員 I D : a 0 0 6 9 8 g 3 T
 ワイB級、A級との絶望的な差を知つて心が折れかける

485 : 名無しのボーダー隊員 I D : B R W r D / J x d
 >>483

B級中位に村上がいるんだからA級なんてマジメに目指してると奴がおかしいんやぞ

490 : 名無しのボーダー隊員 I D : K B X p 5 n E b v

>>485

それはチーム評価であつて個人だつたらどう見てもA級上位レベルだろ

492：名無しのボーダー隊員 ID : XC4+aTfBA

俺はメインサブ両方にメテオラセットしてるB級上がりたてのフルアタ大好き射手だけど攻撃値4で須賀パイセンに負けてるぞ!!!!!!

495：名無しのボーダー隊員 ID : EKcSJFxE

壁

500：名無しのボーダー隊員 ID : cY1v9Enyi

壁

501：名無しのボーダー隊員 ID : VDHUqI+FC

草

502：名無しのボーダー隊員 ID : G1q4gdUEJ

なんでお前はそんな堂々としてるんだよ

506 : 名無しのボーダー隊員 ID : PnFxBpOHA
爆弾魔ニキ迫真の敗北宣言

511 : 名無しのボーダー隊員 ID : BIR+C/I8V
これは北添の後継者

515 : 名無しのボーダー隊員 ID : GRWCiN61o
>>492

案外こういう奴の方がA級行くんだよな。里見とかマジでずっとこんなノリのまま
気づいたら銃手1位になつてたからな

517 : 名無しのボーダー隊員 ID : Zd0EOPnki
想像したらなんかウケる

518 : 名無しのボーダー隊員 ID : R450uTM1K

二宮さうん!!!!（パン（銃殺（死体の山（増えるポイント

522：名無しのボーダー隊員 ID：VG7ZsPuju
こわい

524：名無しのボーダー隊員 ID：OM9Fuy03Y
里見にパスみを感じるのちょっとわかる

529：名無しのボーダー隊員 ID：4/HaNhQ+2

わかる。あいつこつちが新技とか意表を突く戦法しても「すごいねー!!」（満面の笑
み）で射殺して来そう

533：名無しのボーダー隊員 ID：44CnNqg3
ちょっとわかるの壁

535：名無しのボーダー隊員 ID：pFw7NHpz/
二宮さんみたいに路傍の石コロを見る目で秒殺されるよりマシだろ

540：名無しのボーダー隊員

I D : p8H0ANTxJ

>>535

それはそう

544：名無しのボーダー隊員

I D : R Ih h E w A g Y

てか須賀のトリオン14つて一宮さんと同じ？ ボーダー2トップじゃん

547：名無しのボーダー隊員

I D : 0CTUUUEzqW

はえ～すごい

551：名無しのボーダー隊員

I D : dWIP1ZXgL

トリオン7で一般人からしたら普通に天才なのにその倍つてもうよくわからんわ

554：名無しのボーダー隊員

I D : z/jy kCrFc

普通に嫉妬するわ

558：名無しのボーダー隊員 ID：F9vTAC0cs

まあトリオン器官つて使えば使うほど育つらしいから強くなりたきや積極的に防衛任務入れろつて事やな

562：名無しのボーダー隊員 ID：JOHrtn+EW

才能がこんだけ数値化されると残酷だけど同時に便利でもあるよな。

評価グラフの枠内に収まるのが10までつて事はそれがボーダーの想定する最高クラスの天才つて事だと思うんだけど二宮須賀出水木崎と評価枠外に飛び出してる奴が割と居るの見ると他の分野で「十年に一人の天才」だとか言われてるのも割とゴロゴロ居るレベルなんだろうなと思うわ

567：名無しのボーダー隊員 ID：GVooXP865

>>562

まあその「割とゴロゴロ居る」奴を探す為にスカウト旅に行つてる訳だからな。観光とか言つて叩く奴もいるけど大事な仕事

569：名無しのボーダー隊員 ID : Tr8zgNgJ I
 トリオントップの二人が戦つたらどつちが強いんだ

574：名無しのボーダー隊員 ID : alKdxKpQd
 いや二宮さんだろ

575：名無しのボーダー隊員 ID : mtsn0SjqI

タイマンで二ノに勝つてゐる見た事あるの太刀川以外にいないんだけど

580：名無しのボーダー隊員 ID : OCYcbss9m0

>>574

>>575

いや須賀が勝ち越してゐる

は???? 582：名無しのボーダー隊員 ID : u6+OxNx0G

583：名無しのボーダー隊員 ID : d s d C L T r B 2
ファツ!?

587：名無しのボーダー隊員 ID : S 1 B c r s f d u
うせやん

590：名無しのボーダー隊員 ID : D p U 1 J 1 L d O

初手クソデカエスクード射程範囲ギリギリまで生やしまくつて近づきながらまたクソ
デカエスクード生やしまくつてある程度近づいたらバグワ起動して姿を消して目隠し
用のエスクードで二宮囮みまくつて二宮に「そのまま来るか」「回り込むか」の二択突き
つけてツモや。

595：名無しのボーダー隊員 ID : 2 k B g S v d c p
ええ……

598：名無しのボーダー隊員 ID : M Z K y 5 m k U 7

草

601：名無しのボーダー隊員 ID : u8tPgL e83
壁

605：名無しのボーダー隊員 ID : ZlucFHG/e
草壁

610：名無しのボーダー隊員 ID : xevLieiy1
草にエスクード生やすな

616：名無しのボーダー隊員 ID : KQbHMZzTM
あたまわるすぎる

619：名無しのボーダー隊員 ID : WV07p+LVz

「そのまま来る」に賭けて一点集中で壁壊し始めたら回り込んで近づいて、「回り込む」に賭けて弾散らしたところでそもそも「散らした弾じや破壊が間に合わない距離」まで近づいてからバグワと目隠し壁使つてから詰みのクソゲー押し付けてる。エスクード

がデカすぎて半端な角度だとお得意のハウンドも通らない

624：名無しのボーダー隊員 ID：i l Q l o E b q +
マジでクソゲージyan

625：名無しのボーダー隊員 ID：m C y a n r m d E
クソ過ぎる

628：名無しのボーダー隊員 ID：a h l y R e o P +
ちょっと運営環境壊れてもよ

631：名無しのボーダー隊員 ID：Q Z j U c 6 R Z V

この戦法のキヨシ所は須賀のトリオンが高いからエスクードの射程がかなり伸びて二宮の足じや近づいてくる須賀のエスクード畠の生成速度から逃げきれないってとこや。だから一旦退いて壁壊すっていう安牌が取れない。

結果的に「二宮が壁壊すのが早いか」「須賀が近づくのが早いか」のどつちかになってる。

637：名無しのボーダー隊員 ID：i85BdBsM3
 これ見てる方もつまんないって意味でもクソゲーだろ

639：名無しのボーダー隊員 ID：E35m6Ld03
 これだからトリオンバカはさあ

643：名無しのボーダー隊員 ID：eazgCgMsx

最近は二宮が超角度付けたハウンドとかサラマンダー降らせて割と巻き返してるけど
 それやるとどうしても攻撃が来るまで時間差になつて寄られるからな。総合的には二
 宮が力モられてる側

644：名無しのボーダー隊員 ID：DXM3htnS8
 結構個人戦やつてエスクード生える

648：名無しのボーダー隊員 ID：Ohojr/GTw
 仲良いだろこいつら

653：名無しのボーダー隊員 ID：KfOzocfla

いやこれ須賀ってサポートばかり注目されてたけど攻撃手の理想じゃね？ 寄らな
きや何も出来ないっていう弱点を絶対に近づいて殺すという強い意志で完全にカバー
してるじやん。マジで強いな

654：名無しのボーダー隊員 ID：6WB0NeEkI

絶対に寄れるってのは確かに強いな

660：名無しのボーダー隊員 ID：LHOyVjvw2

はつきり言つて一対一最強だろこいつ

664：名無しのボーダー隊員 ID：ZYdYU8t3q

>>660

そうでもない。生駒旋空を盾ガスト+集中シールド+エスクード畑に切先ギリギリで
当たられて全部まとめてぶつた斬られるからイコさんに信じられないほどカモられて
る。勝率二割とかだつたはず

670 : 名無しのボーダー隊員 I D : e L 8 b Q n l a C

673 : 名無しのボーダー隊員 I D : H 1 W 4 v 7 N m a
草

678 : 名無しのボーダー隊員 I D : M W d y k g 9 6 H
エスクード斬れる

683 : 名無しのボーダー隊員 I D : u z 5 v S V w t Y
つぱイコさんなんだわ

685 : 名無しのボーダー隊員 I D : G s C a i h a G Q
なんでモテないんだろうなあの人

